

司法省藏版

佛
國
刑
法
詳
說

明治十三年六月印行

刑法詳説第四次刊行小序

余ガ茲ニ第四次ノ刊行ヲナス所ノ書ハ數多ノ修正増補ヲ加フルニ拘
ハラズ依然其舊質舊體ヲ具フルモノニテ即チ余ガ嘗テ勉メテ法ヲシ
テ歴史ト政理トニ聯絡セシメント欲セシ所ノ書ヲ再ビ公布スルモノ
ニ過ギザルノミ

此書詳密ヲ加フル三回ニ及ベル者初メ之ヲ刊行セシ以來變更セシ所
ノ法律ノ中或ハ忽諸ニ附ス可カラザル者アリ又毎ニ考據ニ供ス可キ
諸學士分新著ノ出ヅルアルニ因ルト雖モ其主旨大本ニ至リテハ毫モ
變_レ所ナキナリ

此書僅カニ三回ノ刊行ニ止マルキハ或ハ教育上ノ利益ニ非ザル可キ
ヲ恐レ今更ニ之ヲ刊行スルニ至リシナリ

大正
千八百六十六年六月二十七日ノ布告ヲ以テ治罪法第五條第六



條第七條ヲ改正シタル法ニ付テハ余ハ特ニ一章ヲ設ケテ之ヲ論究シ
又輕減情狀出版犯罪刑事禁錮方今檢閱議案ノ目題タル監視流刑等ニ
係レル諸新法ノ如キモ亦皆之ヲ併述セリ
外國法律ニ付テハ從來刊行ノ書ヨリモ援引スル所最モ多ク以テ佛國
法律ニ對照セリ而シテ若シ余ヲシテ過ツ所ナカラシメバ此法律對照ハ
必ズ有用タル可キヲ知ルナリ以太利刑法白耳義刑法日耳曼刑法ハ余
ノ最モ注意セシ所ニシテ而シテ日耳曼刑法ノ如キハ纔ニ一千八百七十
年五月三十一日日耳曼北同盟國刑法ノ名ヲ以テ始メテ公布セラレ翌
一千八百七十一年四月二十二日ニ至リ名ヲ改メテ新帝國ニ頒布スル
モノニ係リ佛國ニ於テ未ダ特テ討究セザル所トス余ノ之ヲ攷漁スル
ニ付テハ少壯ナル法官リボー氏ガ外國法律年報ニ載セタル翻譯ヲ以
テ依據トセリ

余ガ持説ノ刑罰基本論ニ關シテハ佛國ニ於テ甚ダ信ヲ得タル法ト道
徳ヲ混同スル派説トハ確乎ト分離シ一層詳密ノ論ヲ述ベント試ミタ
リ

蓋シ刑權基本ノ論ハ其止マ刑權ニ係レルノミナラズ一般ノ法ニ關ス
ル所アリテ實ニ緊要ニ屬ス可キヲ以テ必ズ特ニ一書ヲ著サハルヲ得
ザル可シ而シテ此書ニ於テハ之ヲ詳明スルニ足ル可キ餘地ヲ供スルヲ
得ザリシナレバ僅ニ之ヲ舉示シタルニ過ギザリキ然レモ凡ソ社會學
百般ノ問題中共論ハ至緊至要タルヲ閱者ニ了解セシメタランニハ則
チ以テ余ガ目的ヲ達シタリトスルナリ

一千八百七十三年二月十日ウエルサイユニ於テ ベルトール識

刑法詳說第三次刊行序

余ガ茲ニ第三次ノ刊行ヲナス所ノ刑法詳說ハ余ヲ以テスレバ之ニ下
 ダセシ名稱ノ如ク理論ト實際トヲ兼備セル書タリトスルナリ
 其理論ノ書タル所以ノ者唯條款ノ義意ヲ説明シ其應用スル所即チ論
 說ト斷例トニ於テ生シタル難事ヲ解剖スルニ止マラザルヲ以テナリ
 此書タルヤ乃チ遠ク歴史ニ溯リテ法律ノ根源ヲ討テ深ク道理ヲ推シ
 テ其基ク所ヲ明ニス蓋シ是ノ如キ學問ノ主旨ハ管ニ律令ノ文面ヲ明
 ニスルニ在ルノミナラズ又其精神區域ヲ量定スルニ在ルナリ其固ヨ
 リ此主旨アリ又其此成果アル可キハ余ノ冀望スル所タリト雖モ尙ホ
 他ニ一ノ主旨ナル者アリ即チ法學特ニ刑法學ノ如キハ理學、政事學其
 他社會及ビ經濟ニ係レル諸般ノ學問ニシテ文明ノ端緒ヲ開キ其進歩
 ニ資ク可キ者ト緻密ノ關係アル所以ヲ明示スル是レナリ

又此書ノ理論ノ書タル所以ノ者人民及ビ政府ノ權自由及ビ官權ノ區域主權ノ性質政府ノ定則及ビ其職任人間定命上ノ社會ノ職務ニ關シ常ニ興起ス可キ所ノ一大問題ニ付テハ確定セル原則ヲ記載シ毎ニ此原則ニ據リ諸論ヲ討究スルヲ以テナリ

余ガ刑法詳說ノ實際ノ書タル所以ノ者ハ苟モ異論アルトハ必ズ其結果ヲ舉ゲ其證明變改若クハ反對ノ解說ハ皆之ヲ對照シ即チ之ヲ玩弄珍奇ニ附セズ誠ニ法律ヲ審査解釋ス可キノ活動機具タラシメタルニ由ルナリ

此書ノ實際ノ書タル所以ノ者其吾ガ法律制度ヲ搖亂セズ一ニ其區分ニ從ヒ其區分ニ據テ論究シ凡ソ法律ヲ釋解スルノ說ハ其歸着ノ當不當ヲ論ゼズ皆之ヲ列載查察シ又諸々ノ判決殊ニ大審院判決ノ如キハ大ニ徵引スル所アレバナリ

余ガ企圖セシ所余ガ設ケシ所ノ方法ハ斯ノ如シト雖モ此レ唯意望ノミニシテ其實之ニ副ハザルハ固ヨリ明ナリ勿論前回刊行セシ書ニ於テ幸ヒニシテ世上ノ美評ヲ被ムリ余モ亦孳々トシテ之ニ改良ヲ加ヘタリト雖モ奈何セン成ル所欲スル所ニ充ルニ足ラザルヲ然レ厄余ハ如何ナル方法ニ從ヒ如何ナル說ヲ取リ如何ナル書ニ援據シタルヤ否ヤハ當サニ忽ニスベカラザル者タルヲ以テ之ヲ指示セザルヲ得ザルナリ

殊ニ余ガ說ク所ノ如クンバ此刑法詳說ハ誰レノ閱讀ニ供ス可キヤ否ヤ先ヅ之ヲ説明セザル可カラズ

抑此書タル多年教授ノ結果ニシテ亦聊カ教授ニ裨補アル可ク余ハ敢テ偏倚ノ目的ヲ以テ作為セザルガ故ニ殊更吾學堂ノ生徒ニ適ス可キハ疑ヲ容レザル所ナリ蓋シ文學ノ業タル大ニ法學ニ助ケアリ其止マ

之ニ有用ナルノミナラズ凡ソ法學ヲ講究スル者ニハ實ニ必須ニシテ
缺ク可カラズ苟モ之ニ由ルニ非ズンハ法學士モ亦卑賤無用ノ人タル
ヲ免ル可カラザルガ故ニ余ハ吾學堂ノ生徒ニ向フテ決シテ文學ヲ忽
ニス可カラズ必ズ之ヲ平日ニ練磨スルノ要用ナルヲ明ニセント欲ス
ルナリ抑史學、性理學、經濟學ノ如キハ法律學ト互ニ連絡關係シ其唯之
ガ近隣者ナルノミナラズ同盟者ナルノミナラズ姻縁者ナルノミナラ
ズ實ニ同胞者タル可ク而シテ其命令ヲ施シ牽制方ヲ用ユル同胞者ハ長
子ニ非ズ有力ノ同胞者ニモ非ザル可キハ是レ未ダ得ル所ヲ實施ス可
キノ地位ニ至ラザルモ苟モ吾ガ大學校ニ於テ既ニ位階ヲ得タル少壯
ノ輩ガ宜シク自カラ顧慮スベキ所ナリ夫レ斯ノ同胞者ハ假令ヒ能ク
庶事ヲ現今ニ裁決シ動カス可カラザルニ至ラシムルモ之ニ對シテ議
論ヲ呈スルノ禁ハアラズ若シ其誤謬アルヲ審明シ之ニ了解セシメタ

ランニハ必ズ自カラ改ムル者ナリ蓋シ討論審査ノ權ニシテ能ク之ニ
制限ヲ行ヒ時アリテ之ヲ補正ス可キ者ハ其認許スル所タレバナリ
凡ソ大學校ニ於テ試験ヲ受ケ自由職業ニ就キ以テ財產ヲ營ミ名聲ヲ
博シ生活ヲ計ルニ其誘導保護ヲ得ルノ端緒ヲ開クハ微々タル民間必
携ノ如キ書ニ由ルニ非ズ多少工ニ簡明ニセシ條目彙集ノ如キ書ニ
由ルニ非ザルハ彼ノ活潑ナル少壯ノ法學士ニシテ今將サニ實務ニ就
カントスル者ニ於テ領解セザル可カラザル所ナリ諸政理學ト道德學
トハ相須テ離ル可カラザル者タルハ余ハ教場ニ於テモ著書ニ於テモ
論辨シテ未ダ止マラザル所ナリト雖モ性理學ハ當今ニ於テ衰微ハセザ
ルモ教課上稍盛ナラザル者アルヲ以テ數年ノ後其社會上最大ノ權力
ヲ得ルニ至ツテ始メテ余ガ素懷ノ說ヲ發シ以テ其莫大ノ洪益アルヲ
辨ズ可キ乎然レ厄余ハ毎ニ法學ハ即チ社會學ニシテ而シテ法學ノ諸

部ノ中刑法ハ凡ソ吾人ノ心神行爲ニ發生スル所ノ元素ヲ以テ滋養スル所最モ居多ナル液汁ヲ含メル枝葉タルヲ陳述セシニ未ダ嘗テ之ヲ非トスル者アルヲ聽カズ又刑法ヲ簡明ニセント欲シテ其區域ヲ狹クシ或ハ之ヲ狹クセント欲シテ乃チ其緒ヲ多端ニスル者ヨリ之ヲ見レバ刑法ハ荒蕪タルヲ以テ是ノ如キ學問ニ慣熟スルニハギグーウ（非ルメ）ンクーゼン（ユ）フロウーロシイ（チ）ギスタン（チ）エーリー（ノ）著書ヲ讀ムヲ至良ノ方法ト思考シ屢之ヲ證引セシニ亦未ダ嘗テ之ヲ非トスル者アラザルナリ夫ノプラトノ法律書アリストートノ政事書シヒロンノ共和政論モンテীগニユノ漫筆ノ如キハ既ニ陳腐ニ屬スト雖モ其採擇ス可キ者アルトハ亦之ヲ考閱センコトヲ觀者ニ乞ヒタリキ蓋シ以テ無用ノ業トナサレバナリ

顧フニ佛國ニ於テ文部ノ教育ヲ掌ル者常ニ其人ヲ得タルヲ以テ社會

ニハ道理ヲ主トスルノ説ヲ開述スル者ノ爲メニ恩典狀ヲ下ダサレシコトヲ願フヲ要セザリキ蓋シ此學派タル本ト社會ノ進捗ヲ計リ之ヲ獎勵鼓舞スルモノニテ其現時ノ事ト既往ノ事トヲ別異ニセザル決シテ其現時ノ事ト將來ノ事トヲ別異ニスルガ如クナラズ又縱令ヒ其律令ト法トヲ分ツアルモ若シ此律令タル濫恣偏局ニ出ヅルコトナク實ニ無上ノ元則ニ據リテ而シテ右ノ學問ニ於テ務メテ探出セント欲シ漸次ニ近接シ得ル所ノ根幹ノ返射ニシテ能ク其無上ノ元則ニ適合ス可キキハ固ヨリ以テ之ヲ尊重セザル可カラズ

故ニ此學問タル未ダ嘗テ仇敵ニ遭遇セズ且ツ同意者之ヲ保護シテ遂ニ全勝ヲ占メ今日ニ在リテモ尙ホ益々開進シテ其底止ズル所ヲ知ラザラントス既ニ凱陣ス今ニシテ或ハ之ヲ防止セントスルハ其宜シキヲ得ル者ニ非ザル可シ

今余ガ持説ノ今日ニ變ゼザルヲ明ニセンガ爲メ一千八百五十九年刊行ノ序文ニ就テ僅カニ數句ヲ假リ茲ニ以テ提舉セント欲ス曰ク理學士、歴史家、政談者ガ説ニ於テ余ハ頗ル援引シ殊ニ同時ノ著述家ガ説ニ就テ文學ト公法學ト密接スル所以ヲ明ニセリ夫レ學問一方ニ局スルキハ不全タラザルヲ得ズ純ラ現行法ヲ研究シ以テ政理道德諸學ノ變遷ヲ顧ミザル者ハ終ニ法律ノ條目ヲ解ス能ハザルニ至ル是レ他ナシ照ス可キノ光明ナク律令ノ精神タル元則ヲ忽ニシタルヲ以テナリト此書法官及び代言師ト雖モ亦須ク閱讀スベシ顧フニ實際家モ理論ニ據リ理論ニ資ス者ニ非ザレバ之ヲ慧敏ナル實際家ト稱ス可カラズ是レ余ガ法官及び先進者ヨリ聽ク所ナリ蓋シ實際ニ老練ナル人モ道理ニハ屈セザルヲ得ズ今日事務ヲ處スルニ當リ如何ニ事務ニ慣熟スト謂フト雖モ學問ニハ如カザル所アル可ク猶ホ博士院ニ於テ老練家ノ

一步ヲ讓ラザルヲ得ザルガ如ケン

ルーソーガボームン氏ニ贈ルノ書ニ云ク佛國ノ王國タル實ニ廣大ニシテ佛人ハ皆佛法ニ非ザレバ人間ノ遵守ス可キモノナシト思惟セリ而シテ其控訴院其裁判所ニテ處理スル所ノ如何ヲ問ヘハ決シテ性法ト公法トニ基ク所無キニ似タリ又此全王國ニ於テ是ノ如ク數多ノ大學校アリ是ノ如ク數多ノ中學校アリ是ノ如ク數多ノ博士院アリテ要用ノ事ヲ教ユルモ少カラズ無用ノ事ヲ教ユルモ亦少カラズト雖モ一トシテ性法ヲ教授スル所アルヲ見ズ實ニ歐羅巴中此學問ヲ以テ無用視スルハ唯斯國ナル哉ト

此言ヤ今日ニ在リテハ復々適切トスルヲ得ズ蓋シ諸官衙諸學校ニ於テ人皆社會上ノ交際規則トシテ性法即チ道理ヲ信認セザルヲナク縱令ヒ特別ニ講場ヲ設ケテ之ヲ教授セザルモ一般ノ教育一般ノ講場

ニ於テ之ヲ以テ大本トナサハルナキヲ覺ユルナリ
 又此書ノ實際家ニ適ス可キ所以ハ固ヨリ純粹ノ理論ヲ列載スルモ又
 實際上ノ問題即チ裁判所及ビ法律註解者等ニテ討究セシ諸問題ヲ舉
 ゲ或ハ以前ノ法令及ビ近時ノ外國法律ニ照比シ以テ之ヲ論シ或ハ秀
 俊ナル學士ガ著書ニ據リテ以テ之ヲ審査シタレハナリ蓋シ一個ノ博
 士ノ論說ハ其反對若クハ唯異ナルノ說ヲ討究スルニ非ザレハ能ク了
 解スルヲ得ズ苟モ一個ニ就キ次ヲ逐テ審察スルハ諸說モ同一ニ歸
 スルニ似タリト雖モ一旦之ヲ比較シ深ク玩味スルニ及ンデハ各固有
 ノ體ヲ具ヘテ相異ナル所アルガ如ケン一人ノ說ニ拘泥シ敢テ他ノ說
 ニ比較セザルハ抑之ヲ信ズルノ甚シキト謂ハン歟故ニ余ハ毎ニ茲ニ
 注意シタリキ又余ハ刑權基本論ヲ以テ彼ノ一旦確定スルモ復々顧ミ
 ザルヲ得可キ一時ノ所見タル者ノ如キニ非ズトスルガ故ニ此編中

何レノ處ト雖モ總體ノ事ニ就テモ細密ノ事ニ就テモ必ズ之ヲ依據ト
 シ以テ論述セリ

此刑權基本ノ說タル即チ余ガ教授上諸士ト別異ナル所ニシテ務メテ
 法律ニ記載スル所ノ順序ニ順フモ以テ之ヲシテ一途ニ歸シ互ニ相須
 ツ所アラシムルヲ得タリ

是ヲ以テ一千八百五十五年大赦、特赦、復權、訴ノ期滿免除、刑ノ期滿免除
 ノ事ニ就テ余ガ記述セシ所以テ刑法地限ノ事及ビ隨身ノ事、引渡ノ事
 刑ノ既往ニ及ブ事、其等級、其累加ス可カラザル事、認歸、再犯、情狀輕減、從
 犯等ニ適用スルヲ得可シ蓋シ此等ノ事件ハ刑法中刑權ニ基ク所ノ
 諸元則ヲ講究スルニ最モ關係スル部分ニシテ此權ノ釋解ニ因リテ生
 ズ可キ諸理論ヲ忽ニス可カラザル所以ヲ知リ或ル刑法家ニ於テ輕視
 シタル性理學ノ利益アルヲ明ニセシムル所ナリ又余ガ刑罰ノ基ク所

ハ社會ノ利益ヲ以テ制限シタル道德ニ在リト云フ説ヲ排駁スルニ大ナル裨補アリタリ

此書ニ載スル所ノ事項ハ一千七百九十一年、一千八百八年、一千八百十年、一千八百三十二年、一千八百四十八年、一千八百五十二年、一千八百五十四年、一千八百六十三年ノ法令ニ係リ又余ガ此ニ舉グル所ノ説ハ大率モソテスキウルトーベツカリアフランツエリーベントムカンギグーノ諸氏ガ議論ヲ討究セシノ効トナス其他有名ノ人ルベルチエー、ド、セ、ン、フ、ル、シ、ヤ、ウ、メ、ル、ランノ諸氏ヨリ立法院並ニ政府ノ答辨者法學士等ニ至ル迄凡ソ法律改正ノ關與セシ者ノ説ヲ載セタル今枚舉スルニ遑アラズ此等ノ諸氏ガ論ゼシ所以テ當時ノ歴史ト法理トヲ窺知スルニ足ル可ク而シテ其成績タル不幸ニシテ甚々良カラザル者アリタリ然レモ余ノ著書ヲ輕視セズシテ一タビ之ヲ閱讀セシ者ハ其成績中皆自

カラ普通ノ性質ヲ具ヘ自カラ一様ナル所アルヲ曉識シテ而シテ彼ノ佛國歴史政理論一千八百六十年刊行人文ノ自由一千八百六十年刊行法律根源史入門一千八百六十年刊行以上三書ノ如キ余ガ刑法ヲ講ズルニ付テ余ニ大ヒニ助ケアリシヲ確知スルナラン又余ガ近世ノ學士ヲ攻撃シシノ論ハ即チ以テ茲ニ舉示セザルモ尙ホ數多ノ書ヲ通觀シ數多ノ説ヲ比較シ今日ニ於テ之ヲ量定シ應用スル者ハ必竟多年ノ間之ヲ討究査察シタルヲ證スルニ足ル可シ

一千八百六十三年五月十三日ノ改正法ハ余ガ力ヲ盡シテ論究セシ所タリキ夫ノ再犯ニ係ルル刑法第五十七條第五十八條ノ新文面ハ一千八百六十三年五月三十日布達ノ押印者ガ深奥ナル説ノ如ク大疑議ヲ生ズ可キ根原ナラン第四百六十三條ヲ改正セシ情狀輕減ニ係レル法モ亦疑端ヲ起ス可キ者ナラン而シテ其眞解釋ヲ得ルニ至ルハ一朝一夕

ノ業ニ非ズ又二三ノ輩ノ能クス可キ所ニ非ザルモ余ガ勉強シテ論セ
 シ所幾分カ之ガ端緒ヲ開クニ足ル可キヲ知ルナリ夫レ衆力ヲ假ルニ
 非ザレハ得可カラザルノ成果ハ以テ一人ニ望ム可カラズ又一人ニ歸
 ス可カラズ種々反對ノ説ハ既ニ已ニ叢起セリト雖モ余ハ乃チ余ガ固有
 ノ方法即チ余ガ見ル所ニ於テハ判定ノ義務ヲ遂グル者トスル方法ヲ
 重シ純シ之ニ準據シ諸説ノ異ナル所ヲ指示シ以テ閱者ヲ之ヲ撰取
 セシメント欲スルナリ余ハ又他人ガ説ニ就テ利益ヲ得ル所アルヲ以
 テ諸氏ノ名ヲ重シ如何ナル説ヲハ余ハ之ヲ取り又誰ヨリ之ヲ得タル
 ヤヲ明言セザル可カラズト信ズルナリ諸氏ノ説タル紛然雜然其孰レ
 カ可ナルハ眞ニ知ル可カラズト雖モ敢テ以テ一刀ノ下ニ兩斷シ實際上
 反對ノ事アルモ亦可ナリトス可カラズ夫ノ第十六世紀ノ剛邁ナル法
 學士ハ談論ノ際謙讓スルト少カリシガ余ハ其嫉妬ナル競争ヲ演シ

容易ク怒氣ヲ帯ビ強テ勝タントスル風ニ倣フヲ欲セズ唯諸説ヲ列載
 シ其人名ヲ擧グルトハ第一討究ニ利益アリテ且ツ穩當ノ語ヲ用ユルヲ
 得可シト信シ一ニ之ヲ公平ニ論スルヲ事トシタリヤ故ニ此書ニ載ス
 ル所ノ余ガ駁論ハ宛名ナキノ書翰ニ非ズ誰レニ向フテ疑難ヲ呈スル
 ヤ判然タル可シ況ヤ論説ヲ先後及ビ其連絡ノ如キハ甚ダ緊要タル者
 チヤ然レモ一己ノ見ヲ棄テ以テ衆人ノ見ニ委スルノ甚シキモ又從來
 ノ諸論ノ異ナル所ヲ擧ゲテ全滅セントスルモ亦皆共同派ノ類ヲ結ビ
 學問上ノ共同説ヲ唱フルニ等シカラザルヲ得ザル可シ

刑法詳説凡例

一此書ハ原名チ「フールドコルドペナールエルソン
 クリミナール」ト云フ佛國韓府法律大學校博士兼控訴院附屬代言師
 長及ビ國會議員邊留吐爾氏ノ著ス所ニシテ刑法必須ノ理論ト實際
 トヲ説明シ旁ハラ軍律及ビ其他ノ法令ヲ撮舉シ佛國刑典ノ蘊義精
 微ヲ極メタル者ナリ

一邊留氏ガ此書特ニ學生ノ爲メニ著ス者ニテ純ラ其レヲシテ入り易
 カラシメント欲シ新タニ順序ヲ設ケ節目ヲ立テタルハ其體裁タル
 或ハ他本ニ異ナル者アリ而シテ其一旦世ニ出ヅルニ及ンデヤ大ニ
 美評ヲ得タリト云フ今譯スル所ノ原本ハ一千八百七十三年第四次
 ノ刊行ニ係ル者ニテ其以前ニ涉レル變更改正ハ悉ク舉ゲ以テ校閱
 補足シ又諸ノ判決録ニ據リ實際ノ如何ヲ細論セリ

凡例

一書中解シ難キ所アレハ諸書ニ據リ譯解註釋シ問々又己ンガ聽ク所ヲ附シ閱者ノ參考ニ供ス謬陋ヲ忘ル、ノ罪固ヨリ重シト雖モ亦小補無キニ非ザレハ則テ幸甚

一書中邦語ニ譯シ難キ者ハ原語ヲ存シテ嵌註ヲ施シ其義ヲ釋ス又人名ニハ右傍ニ單線ヲ付シ地名ニハ雙線ヲ付ス而シテ古語或ハ閱者ノ特ニ注意ヲ要ス可キ者ニハ圈點ヲ加ヘ以テ之ヲ辨別ズ

一凡ソ(按)ト書スル者ハ譯者ノ所見ナリ而シテ其一段一句ノ未ダ了ラザルニ註釋ス者ハ亦舉テ譯者ノ解說トナス

一譯語ハ率テ日本刑法草案民法草案及ビ箕作氏譯スル所ノ五法ニ從フト雖モ間々又明清ノ律書米人丁氏譯萬國公法並ニ經史子集ニ據ル者アレバ往々舊譯ニ異ナル者無キニ非ズ唯譯者學識ノ淺乏ナル或ハ恐ル謬錯舛誤ヲ免レザルヲ故ニ每語左傍ニ原語ヲ記シ以テ

高雅君子ノ釐正ヲ待ツ

明治十二年八月

譯者識

刑法詳説第一卷目次

○第一卷

第一章 緒言

一丁

刑法ノ緊要ヲ論ズ○刑法ノ他ノ法トノ關係ヲ論ズ○凡ソ刑法ニハ
 顯明或ハ隱冥ニ確定スル所ノ疑問アルヲ論ズ○刑律ヲ學フニ於テ
 必要トスル者ヲ論ズ○ボワタール氏ノ駁論○ボワタール氏ノ説ヲ
 駁ス○三疑問題ヲ擧ゲテ刑法ノ來歴ヲ論ズルヲ示ス○刑法ノ義解
 ハ一般ノ法ト離ル可カラザルヲ論ズ○法ノ六義解○許ス可キノ義
 解ヲ擧グ○遺傳派及ビ改革派ノ説ノ歸趣ヲ論ズ○法ト徳義トノ別
 チ論ズ○法ハ變遷ス可キヲ論ズ○徳義ニ於テハ興衰變遷スル者ナ
 キヲ論ズ○徳義ト法トノ混淆○自然法ノ諸義解ヲ駁ス○徳義ト宗
 門トハ相異ナル所アルヲ論ズ○何ヲカ刑法ト謂フ

第二章 緒言

三九丁

緒言ノ歴史上ノ二個ノ問題○一千四百年ヲ五期ニ分ツ○第五世紀ヨリ第十一世紀ニ至ルノ期○日耳曼元素○サリアン法○リビエール法○エンベツト法○ウキジエツト法○サリアン法校閱○自後ノ増加○カピチコール○羅馬元素○右元素ノ小別○古羅馬ノ元素○アレピアリナム、アニアニー○パピアニー、レスボンナム○ジニステニアツ彙集○新羅馬ノ元素及ビカノン法○刑法ノ性質○支配セシ法○各自離權ノ制限○賠償法○賠償法ノ歴史ニ係レル疑難○復讎權ノ規定○前説ノ答

第三章 緒言

七七丁

第十一、十二世紀及ビ第十三、十四、十五世紀○第十一、十二世紀○刑法ノ新性質○佛國ヲ分テ慣習法ノ地方成文法ノ地方トナス根源○主

權ノ分裂○一國分裂ノ結果○封建法○レイイス、グステナム○ジニリユザルムノアツシーズ○コンシエチエチエス、フイドロム○ノルマンジー裁廳ノ制度○ビエルナド、フォンテースノ書○聖路易王ノ憲章○ボーウワラジーノ慣習法○ジニステニアツ法典○カノン法○何故ニ犯人ガ住處ノ法律ニ照シテ之ヲ處斷シタリシ乎○第十一世紀ヨリ第十二世紀迄ノ刑法ノ主義○第十三世紀ヨリ第十六世紀迄ノ一期○政事上ノ變遷○一般法律ヲ設ケント試ミシテ○刑法ニ付緊要ナル王命○特別ナル書類○學術上ノ書類○カノン法○第十四、第十五、第十六世紀間ノ刑法主義○各自復讎主義ノ衰微○檢事ノ制○君主利益ノ上位ニ在ル利益ハ刑法ノ第一義タリシ證○王事○地限管轄ノ主義

第四章 緒言

一一二丁

第十六世紀ヨリ一千七百八十九年迄ノ期○此期ノ性質○王朝主權

○法律ニ属スル事件○「エギト」○「デクラ、シモン」○「アレーシユ、コン
 セイユ」○「パル、マン」ノ權力パル、マンノ口實ヲナス根源○規則ノ
 決定○刑法ニ係レル緊要ナル王命○自餘ノ刑法根源○學術上ニ供
 ス可キ書類○法學士ノ著書○第十六世紀ヨリ一千七百八十九年迄
 ノ刑法主義○諸主義ノ確證

第五章 緒言

一四三丁

一千七百八十九年以降ノ刑法根源○「コンスタ、ユアント」ノ要切ナ
 ル法律○「アッサンブレ、レヂスタチーフ」○「コンウツンション」○「シレク
 トワール」○「コンシュラ」及ビ帝國○「レストーラション」○一千八百三十
 年七月ノ革命○一千八百四十八年二月ノ革命○一千八百五十二年
 一月十四日、二十二日ノ「コンスタ、ユシモン」○一千八百五十二年十
 二月ノ「コンスタ、ユシモン」○全國防禦政府○國會○刑法ノ新主義

○社會合約主義其勢力ヲ刑罰ニ及ボス○治罪法○實物派主義ノ危険
 ○共和第四年ノ法典○ベンタム氏ノ説○カント氏ノ説○バストレ
 氏ノ説○帝國法典ニハ一定ノ主義アル乎○帝國法典ニ就テ「レスト
 ーラション」政府ノ施爲

第六章 緒言 一七一丁

刑權主義ノ問題ノ利益アルヲ論ズ○八個ノ主義○復讐主義○威懼
 ノ主義○社會合約ノ主義○刑權ハ犯人ガ承服スルニ基クトスル説
 ナ論ズ○刑權ハ間接ナル防衛權ニ在リトスル説○最大數ノ利益○
 純然タル正義ヲ以テ刑權ノ基礎トスル説○折衷説○折衷説ヲ節修
 セシ主義○折衷説トナルトラン氏トノ説ヲ駁ス

第七章 法定犯罪及ビ刑法ノ地限隨人ト

ヲ論ズ 二〇二丁

原法及ビ調査法ヲ論ズ○犯罪ノ義解○犯罪ノ別○如何カ刑法ハ犯罪ヲ義解スル○此義解ヲ駁スルノ説○前ノ駁論ニ答フ○罪ナル語ノ諸義意○刑法ノ管掌ヲ論ズ○刑法ノ地限ナルヲ○ボルダリースノ民法第三條ノ解釋○前説ノ駁論○刑法ハ被害ノ内外人ヲ問ハズ○佛國ニ在ラザル外人ニ對シ佛國ニ於テ外人ノナシシ犯罪ヲ論ズ○刑法ノ隨人ナルヲ○隨人原則ノ駁説及ビ答辨○外人外國ニ於テ佛人ニ對シ罪ヲ犯スルハ佛國刑法實施シ難キヲ論ズ○古法ニ於テ履行シタル隨人原則ヲ論ズ○中法ノ此原則ヲ釋シタル如何○治罪法ニ就ヒテ之ヲ論ズ○第七條ノ規則ヲ適用ス可キ條件○異見○改正案○外國人外國ニ於テ罪ヲ犯スル古法ハ如何ニ之ヲ處置セシ乎○中法ニ於テハ如何○ボワタール氏ガ第六條ノ解釋○隨人論ノ緊要ナルヲ論ズ○國土ノ義解○邦土内海○軍艦商舶○軍隊○地限ノ

義ヲ狹論ス

第八章 治罪條規改正論

二五七丁

一千八百六十六年六月二十七日布告ノ緊要ナルヲ論ズ○一千八百八年ノ法律ニ付キ排駁ヲ下ダセシ諸説○改正ノ源由ヲ論ズ○以下講究ノ義理上ノ目的○法律審議ノ時諸説論理ノ情狀○難論ノ駁説第一○難論ノ駁説第二○刑事ニ於テハ人事法ハ民事ニ於ケルト其性質ヲ異ニスル乎○一千八百十一年十月二十三日ノ勅命ハ復ス可キヤ否ヤ○一千八百五十二年六月四日ノ制法院立案ノ誤解○ボンシヤン氏ノ説及ビ其説ノ排駁○隨身ノ主義ヲ輕罪ニ擴張ス○隨身ノ主義ハ輕罪ニ於テ例外ナル者アル乎○外國ニ於テ輕罪ヲ犯ス者ヲ佛國ニ於テ裁判スルノ條件○駁論及ビ辨明○駁論○如何ナル期滿免除ヲ當ツ可キ乎○莫再審一事ナル格言ノ實行○外國ニ於テ行

ヒシ大赦ノ効ヲ論ズ

第九章 刑法ノ時ニ關スル權力

二九三丁

刑法權力ノ區域時ニ從フヲ論ズ○論問ノ別○根源刑法○如何ナル時ニ於テ新法ハ犯人ニ利アリトナス可キ乎○三法相襲ク時ヲ論ズ○處決確定ノ場合ニ於テ新法ノ力ナキヲ論ズ○刑ノ執行ニ於テ新法ノ權力如何ヲ論ズ○調査法○調査法ノ細別○純粹ナル治罪法○原法ニ相關連スル治罪法○從前法官ノ主任トシタル丁ニ關スル法律○新設裁判所結講法ニ付テハ如何○控訴ノ事ヲ廢止若クハ挿入シタルノ法○新法頒布ノ時ニ當リ既ニ裁判官ニ附セラレタル事件ニ付テ其控訴上ノ權力○期滿免除ノ法○期滿免除ノ二種○期滿免除ノ基本ニ於ケル諸論○民法第二千三百八十一條ハ刑事ニ於テ亦施用ス可キ乎○第一說○第二說○第三說○第四說

第十章 犯罪論

三三七丁

犯罪等級ノ性質○犯法ノ性質ヲ論ズ○犯法ノ心○犯法ノ決意○豫爲事○行爲ノ端○半途ニシテ自カラ止メタル者ヲ論ズ○自己ノ意ニ非ズシテ中止シタル試犯○失敗犯罪○全成犯罪○佛國刑法ノ解釋○舊規ヲ論ズ○刑法ノ審議○五疑問ノ講究○其方法必無効或ハ目的必不遂ノ勢情アル時ハ試犯モ刑ニ處ス可カラザル乎○豫爲事ト行爲ノ端タル聚成所爲トハ純粹ナル法理ニ於テ差別ヲ立ツトテ得可キ乎○決闘ノ試犯○爲事人恐怖シ自止スルヲ論ズ○輕罪試犯ノ性質○隱謀ヲ論ズ○刑法第三百三十二、第三百四十七及ビ第五百十條ハ其第二條ヲ減除スル乎

第十一章 加辱及ビ施體刑論

三七九丁

刑法ハ軍事犯罪ヲ制定セズ○順序ノ移轉○刑罰トハ何ゾヤ○刑罰

ハ如何ナル財産ニ施スベキ乎諸説審議○死刑ハ正當ナラザル乎○
屢死刑ヲ廢スルノ建言アリ○死刑廢止ニ付キ一千八百三十二年法
律改正ノ精神如何○國事犯ニ於テハ死刑ヲ廢セシテ論ズ○一千八百
五十三年六月十日ノ法○刑法ニ於テ設ケタル刑及び其別○重罪ニ
當ツ可キ主刑附加刑○重罪ニ當ツ可キ主刑○加辱ナル刑名ヲ設ク
ルハ理ニ合フヤ○何ノ刑ヲ施體加辱ノ刑ト謂フ乎○死刑弑尊屬親
ノ刑○刑法ニ於テハ如何カ徒刑ヲ行フヤ○今日ニ於テハ如何カ徒
刑ヲ行フヤ○流刑○一千八百五十年六月八日ノ法ヲ以テ輕流刑重
流刑ノ二等ヲ設ク○老人流刑ニ該ル者ハ如何○禁錮○懲役○追放
○剝奪公權○剝奪公權ハ自カラ無期ナルヲ論ズ○肆觀○軍律ニ定
ムル重罪ノ刑

第十二章 附加刑論

四二四丁

重罪ノ附加刑ヲ論ズ○義解○刑法ニ載スル所四附加刑アリ○准死
及び其根源ヲ論ズ○准死ハ一千七百九十一年ノ刑法ニ於テモ共和
第四年第二月ノ法律ニ於テモ亦保維セラレザリキ○准死ノ再設○
刑法ニ於テハ如何ナル刑ニ准死ヲ附帶セシメタル乎○流刑ニ處セ
ラレタル者ハ民權ヲ使用スルニ付テ政府ノ許可ヲ得可キ乎○一千
八百五十年六月八日ノ法律ヲ以テ聊カ改正シタルヲ論ズ○准死ノ
効○准死ヲ當ツ可キ時ヲ論ズ其別通常裁判言渡○其通常處刑執行
ニ脱レタル者ハ如何○抗傳處刑○准死ハ悉皆沒収ノ諸効果アリ○
准死ニ於テ期滿得免ノ効○剝奪公權ノ効果ヲ論ズ○刑法ニ於テハ
剝奪公權ヲ以テ如何ナル刑ノ附加トシタル乎○今日ニ於テハ如何
ナル刑ニ附帶スル乎○剝奪公權ハ主刑期免ノ後尙ホ存スルヲ論ズ
○抗傳裁判ヲ受ケタル者二十年内ニ死シタルニ付キ剝奪公權ノ効

○法律上ノ禁○如何ナル刑ニ附属スル乎○通常裁判言渡ニ於テハ何ノ日ヨリ始マル乎○法律上ノ禁ハ抗傳處刑ノ結果ナル乎○法禁ノ結果ヲ論ズ○法禁ヨリ生ズル無能力ノ罰則ハ如何○法律上ノ禁ニ付テ期滿免除ノ如何ヲ論ズ○監視○監視ノ性質○當今行ハルノ法○監視ヲ駁スルノ説○疑議○監視ヲ始ムルノ日○監視ハ如何ナル刑ノ附加刑ナル乎○監視ノ期限○監視ハ期滿ニ因テ免除ヲ得ズ○烙刑ハ一千八百十年ヲ以テ廢セラル○肆觀ハ一千八百三十二年ニ廢セラレ公示ヲ以テ之ニ易フ而シテ公示モ亦一千八百四十八年ニ廢セラル

第十三章 廢止准死刑論

四六七丁

如何ナル刑ヲ以テ准死ニ易ヘタル乎○此諸刑ハ何ノ日ヨリ始マル乎○二附加刑ノ間相異ナル者ナシ○遺囑ノ無能力ハ法律上ノ禁ニ

拘ハラズ○不承償ニテ收受スル無能力ニ於テモ亦同シ○第三條ニ載スル所ノ生存中ノ贈與ナル語ノ義意○抗傳處刑者ハ何ノ日ヨリ此無能力トナルベキ乎○抗傳處刑人ノ生死ヲ推測スルニ因ル乎○五年ノ後二十年ノ内ニ抗傳處刑者自カラ首出シ又ハ捕獲ニ就クハ如何○刑人一己ノ利益ノミニ付テ准死ヲ廢止シタル法ハ既往ニ溯當ス○然レモ其溯當ハ他人ヲ害セズ○被刑人再婚ス可キヲ論ズ○准死ノ後蘇生シタル者ハ一千八百五十四年五月三十一日ノ法律ニ據テ處分ス○新法ハ無期刑ノ中死刑ヲ包含セシム○軍事裁判所ニ於テ處シタル死刑ハ如何○諸説及ヒ駁論○一千八百五十四年ノ法ハ新附加刑ヲ創定ス

第十四章 懲治刑論

五三一丁

此章ノ目題ヲ擧グ○禁錮○禁錮トハ如何○懲治刑ノ期限○禁止諸

權ノ異質○如何ナル場合ニ於テ此禁止諸權ヲ命ズ可キ乎○陸海軍律ニ於テ制定セル懲治刑○違警刑○重罪輕罪ニ適當ス可キ刑○監視○監視ハ或ハ補充刑トナルヲアリ○如何ナル場合ニ於テ監視ニ附スル乎○監視ノ成立○罰金○罰金ノ員額○罰金ノ性質○相續人ハ罰金ヲ拂フ可キ乎○格別沒收○格別沒收ノ性質○格別沒收ハ補充刑ニシテ附加刑ニ非ズ○處刑確定ノ時ハ沒收ヲ相續人ニ施行ス可シ○其未ダ確定セザル時ハ如何○重罪ニ付テハ如何○刑人逃脫スルハ如何○刑期起算ニ付テ上告ノ効如何○懲治罪ニ付テハ如何○刑期起算ニ付テ控訴ノ効如何○第二十四條ノ區域○刑ノ執行上ノ事件ヲ審理スルハ如何ナル裁判所ナルヤ○各刑人間ノ連帶○身體強制○一千八百十年ノ法○一千八百三十二年ノ法○一千八百四十八年ノ法○一千八百四十八年ノ法第八條○禁錮ハ刑ニ非ズ○

禁錮ノ期限ニ係ル訴訟ヲ審理スル裁判所ハ如何

第十五章 不累加刑論

五七四丁

道理ニ據テ不累加ノ原則ヲ論ズ○不累加原則ハ再犯増重原則ニ照合セザル可カラザルヲ論ズ○不累加ノ實際必須ナルヲ論ズ○道理ノ必須○羅馬法○佛國古法○中法○現今ノ法○異質ノ二重刑ノ爲メニ制定セラレタル同一種ノ二刑ハ累加ス可カラズ○治罪法第三百七十九條○マンゼンフオーステンエリー及ビチルトランノ諸士ノ說ニ違フ○不累加ノ規則ヲ當ツ可キ犯罪○二個ノ輕罪俱發ノ時當ツ可キヤ否ヤヲ論ズ○違警罪ノ俱發ニ於テハ如何○附加刑ニ於テハ如何○詞語ヨリ生シタル混同○財貨ノ刑ニ於テハ如何○別格ノ名義ニ依ル沒收ニ於テハ如何○不累加規則ノ性質○諸例○不累加規則ノ應報

第十六章 罪惡認歸論

六一四丁

轉移○認歸ノ要件○刑法第六十四條ノ二主義○智能○狂癡○モノ
 マニ一症ニ罹ル者○泥酔○ソノナナビユール○犯罪ノ後ヲ狂癡トナ
 リシ者○處刑宣告後狂癡トナリシ者○自由○内部外部ノ牽制○上
 級ノ人ノ命令○父ノ命令○主人ノ命令○自防正當○危急已ムヲ
 得ズトスル場合○他人防衛ニ干涉ス○財産ヲ侵サル、時モ亦正當
 防衛ヲナスヲ許ス可キ乎○權威アル者法律ニ背ケル所業ヲナシタ
 ル時之ニ抗スル權ノ有無ヲ論ズ○推測ヲ以テ爲事人ハ智能ト自由
 トヲ具フル者ト推測ヲ以テ定ム○心意善ナルモ刑ナキニ非ズ○被
 害者ノ承肯アルキハ如何○自殺

第十七章 犯人ノ年齢刑罰ニ關スルヲ

論ズ

六六三丁

犯人ノ年齢ハ其責ニ關ス可キ乎○法律ノ精神○刑法第六十六條ノ
 文面ノ瑕瑾○刑事ト民事トニ付キ幼者ノ關係○幼者故意ニテ罪ヲ
 犯セシキハ丁年者ト同視ス可キ乎○羅馬法ニ就テ論ズ○佛國古法
 ○一千七百九十一年九月二十五日ノ刑法○一千八百十年ノ刑法○
 一千八百二十四年ノ法○一千八百三十二年ノ法○犯人ノ年齢裁判
 所ノ管轄ニ關ス○幼者カ犯罪無意ニ出デタル時ヲ論ズ○幼者が犯
 罪故意ニ出デタル時ヲ論ズ○幼者違警罪ヲ犯シタル時其故意ニ出
 デザルノ推測ヲナス可キ乎○特別ナル法ニ記シタル罪ヲ犯セシ時
 モ亦年齢ニ關ス可キ乎○年齢ヲ證スル事及ビ此證ヲ審査スル者○
 十六歳以下ノ者ト雖モ民事上ノ禁錮ニ處ス可キ乎○或刑ヲ執行ス
 ルニ付キ年齢ノ關スルヲ論ズ○略言○罪ヲ宥恕ス可キ他ノ原因及
 ビ二別○第一種ニ屬スル宥恕ス可キ事○第二種ニ屬スル宥恕スベ

キ事○減輕ノ源因○老者タルヲ以テ罪ナシトス可カラズ○用語ノ論及ビ其緊要ナル事

目次畢

刑法詳說第一卷

佛國韓府法律大學校博士兼控訴院附屬代官師長及國會議員

邊留吐爾氏著

福原直道譯

第一章 緒言

名譽自由生命ハ此レ人ノ最モ貴重ナル所而ノ刑法ハ之ヲ安危ノ間ニ置ク者也夫レ其之ヲ安危ノ間ニ置ク者ハ乃チ以テ之ヲ衛護スル所ナリ故ニ其設ケタル威逼保護ノ二事ニ在リトス

古ヨリ刑法ハ大ニ諸國ニ行ハレ其國情ニ適スルト否トニ因テ以テ開明ノ利害ヲナセリ刑法ハ法ノ一部ニシテ宗教德義ノ道ト最モ相須ツ者其固ヨリ之ガ責應ニ非ズト雖モ其影響ヲ受クル蓋シ亦大ナリ矣苟モ法ノ諸部ト相須ツ則チ尤モ公法ト輔車唇齒スルヲ必セリ然ラハ則チ其政事ト緻密ノ大關係ヲナスハ固ヨリ言フニ足ラザルナリ

刑法ノ緊要ヲ論ズ

刑法ノ他ノ法トノ關係ヲ論ズ

緒言

一

凡ソ刑法ニハ顯明或ハ隱冥ニ確定スル所ノ疑問アルヲ論ズ

凡ソ刑法ニハ顯明ニ確定セル疑問三アリ

一ニ曰ノ命令シ禁制スル所ノ事件ニシテ社會ノ懲罰ヲ以テ待ツ者ハ何ゾ

二ニ曰ク社會ノ常用スベキ懲罰ハ何ゾ

三ニ曰ク刑ス可キ事件ヲ爲シ或ハ爲サレハ刑スベキ事件ヲナセザル者ヲ裁判シ及ビ社會ノ懲罰ヲ將テ之ニ當ツルニ於テ當サニ制定スベキ方法程則ハ如何

其第一第二ノ疑問ヲ明ニスル者ハ本然ノ刑法則ヲ原法是レナリ

其第三ヲ明ニスル者ハ定例法即チ調査法是レナリ

何ノ主義ニ由テ刑ヲ行フヤトハ此レ刑法ノ大疑問ニシテ論議百出未タ其孰レカ是ナルヲ知ラズト雖モ凡ソ刑法ハ假リニ以テ定マル所アリトス

刑律ヲ學ブニ於テ必要ナル者ヲ論ズ

立法者ハ常ニ深ク此主義ヲ顧慮セズト雖モ抑刑權ノ基本タル主義ハ刑ス可キ行爲ヲ定メ刑罰ヲ制シ及ヒ其方法ヲ設クルニ於テ大ニ勢力アルトハ固ヨリ明ナリ

此ニ由テ是ヲ觀レハ刑法ニ四疑問アリ其三ノ者ハ顯明ニ決定シ其一ハ隱冥ニ決定スル者其隱冥ニ決定スル者は大本ノ疑問トス

夫レ刑律ノ以テ學術タル所ノ者唯凡々條目項款ヲ玩弄スルノミニ在ラズ其義意ノ存スル所其因テ起ル所其當サニ行フベキ所トヲ求メ尊思講究スルハ乃チ其最モ眼目トスル所ナリ

此律學ハ其精神原理及ヒ其往時ノ歴史ト須臾モ離ル可カラザル者ナリ

設シ其レヲシテ原理ヨリ離レシメハ所謂原法ナル者ハ唯此レ文字ヲ列スタル一書ノミニシテ道理モ無ク源因モ無ク命令禁制モ亦含蓄ス

ホワタール
氏ノ駁論

ル所ナク不正不義ナル威逼ニ過ギズ而シテ夫ノ調査法ハ豫備網羅ニシテ擠シテ刑辟ニ陥ラシムル具タルニ外ナラザル可シ
又設シ其レヲシテ往時ノ歴史ヨリ離レシメハ大ニ缺ク所アリ茫邈トシテ甚ダ解シ難カラシム蓋シ人ノ能ク法則ヲ諒知シ測識スル所以ノ者其能ク本源ニ溯リ之ガ連絡ヲ求メ之ガ改良ヲ察シ其變遷沿革ヲ用ヒテ以テ當時ノ狀勢ヲ比スルニ由ルナリ
ホワタール氏ハ大ニカチ刑法ニ盡ス者ナリ然ルニ其書ニ曰ク古ヘノ刑法ノ學問ハ方今ノ法律ニ於テ甚ダ要ナラズト此說ヤ二義ヲ貽生シ刑法ヲ學ブ者ヲ障礙ス駁セザル可カラズ
其意ニ曰ク刑法ハ須ラク文義ニ從フベシ舊法ノ條目ヲ以テ之ヲ擴張シ補足ス可カラズト
二ニ曰ク刑法ハ時勢風俗革命トニ從フ其根源ヲ既往ニ取ルハ甚ダ稀

ホワタール
氏ノ駁論

ニシテ大略當時ノ爲ス所ナリ就中一千七百八十九年ノ革命ニ於テハ刑事ハ民事ト異ニシ從來存スル所擧ゲテ之ヲ廢シ萬般維新ノ事ヲ建テタリト

余將ニ一々此二義ヲ論ゼントス
其一ニ曰ク刑法ハ須ラク文義ニ從フベシト設シ之ヲシテ確説タラシメハホワタールガ因テ以テ論出スル所其結果ニ超過スル亦已大ナリ而シテ其義ハ刑法ヲ以テ唯往時ノ歴史ニ離ル、者トスルノミナラズ凡ソ説明解釋理由原因含意ナル者ハ皆以テ無用トナラン謂フ可シ己レガ地位刑法教師タルノヲ棄テ律意ヲ講究スルヲ以テ全ク無益トスル者ト設シ其レ果シテ刑法ハ悉ク義ヲ掲ケ悉ク明示シ何ノ裨補ナキモ以テ完全無缺一目瞭然タル者ナラハ何ソ汲々教師ノ説明講述ヲ須クヤ緡閱律書ノ一勞乃チ足レ、リ假令ヒ其娛樂ナラザルモ亦容易ノ業ナラン

然リ而シ其實決シテ是ノ如ク其レ容易ナラザルヲ奈何ヒン法律ヲ學
 ブ者ノ苦ハ決シテボワタールガ思慮スル如キ者ニハ非ズ刑法ノ講義
 ハ娛樂ノ道ヲ教ユルニ非ズ而シテボワタールガ書ハ雄秀活達無益ノ冗
 言ニハ非ザルナリ
 蓋シ刑法ハ毫モ辨解スル所ナシトスベカラズ固ヨリ大ニ其義ヲ擴張
 スル者ハ非ナリト雖モ所謂説明ナル者ハ則チ之レ有リ夫レ其説明ア
 リ以テ條目ノ真意ヲ發シ隱晦ヲ明ニシ區域ヲ詳ニス其レ亦無クンハ
 アラザルナリ求義ノ失錯刑事ニ在テハ最モ大ニシテ法律ノ他ノ部ノ
 比ニ非ザルナリ
 其二ハ則チ前事ヲ引キテ以テ備考トスルヲ非トスル者曰ク刑法ハ傳
 來法ニ非ス就中吾國今日ノ法ハ一千七百八十九年ノ革命ノ子孫ニ外
 ナラズト

是レ亦事實ニ誤ル者ナリ抑刑法ハ之ヲ編纂セル當時ノ政體ノ痕跡ヲ
 常ニ存シ現ニ今日ノ法ハ革命時世ノ意思ヲ觀ルニ足ル者アル此レ亦
 實ニ疑ヲ容レザル所ナリ
 夫レ其時勢ニ隨ヒ政事ノ革命ヲ經轉々變更スル者ハ刑律固ヨリ之レ
 アリ而シテ其永久連綿確乎トシテ時ノ消長ニ拘ハラザル者亦之レナキ
 ニ非ズ其永久連綿變セザル者是レ一般刑法ノ根本ナリ
 余前ニ論ジテ曰ク凡ソ刑法ニ三疑問アリ其顯明ニ決定スル者一ニ刑
 ス可キ事件ト云ヒ二ニ刑罰ト云ヒ三ニ發覺處分ノ方法ト云フト
 其第一問ニ於テハ本ト善惡邪正ノ不朽ナル區別ヲ立テ以テ罪惡ノ危
 害ヲ論ズルガ故ニ人心即チ治者被治者ノ心ハ大ニ過ツ者ナカリキ蓋
 シ人心ノ全々カラザル前例ニ率制セラレ俗言ニ惑迷シ或ハ陷テ謬誤
 ヲ是トシ社會德義ヨリシテ辜ナキモ終ニ以テ罪視スル者アルニ至ル

續言

七

此レ亦已ムヲ得ザル者一時ノ謬失夫ノ風俗ト當時ノ意思トニ因テ生
スル者ナレハ其特別例外ナラザル者未ダ之レアラザルナリ
其第一問ハ謬誤殊ニ多ク且ツ甚ダシキ者アリ法律ノ中數過酷暴虐ノ
所爲アルヲ見ルナリ
夫ノ政事ノ變更ノ大ニ影響ヲ及ボス所ノ者ハ獨リ其第三問ニ在ル而
己
一千七百八十九年ノ革命ハ實ニ未曾有ノ大變ナリト雖モ決シテ古来
ノ刑法ヲ舉ゲテ悉ク廢滅シタルニ非ズ乃チ新設更立ノ事ナシト謂フ
モ或ハ可ナラン刑事法應ノ憲制結構ノ如キモ舊制ニ倣フテ多ク今ノ
調査法ハ即チ一千五百年迄盛ンニ行ハシタル公明糾治法ト一千五百
年以降大革命ニ至ル迄履行スル所ノ秘密検査法トヲ取捨折衷シタル
ニ過ギザルナリ

原法ニ至テハ禁止ノ區域ハ狹縮シ自由ノ範圍ハ伸張シ而シテ刑罰ハ寬
柔ヲ致スト雖モ唯其罪科ノ事一時ノ濫漫ニ出デズシテ社會ノ必要ニ
基ク者ハ固ヨリ依然トシテ尙ホ之ヲ今日ニ遵奉セリ然ラバ則チ其事
ノ條件ヲ究極シ其罪タル所以ヲ求ムルハ亦大ニ利益アル者ニアラズ
ヤ
方今ノ治罪法ノ内古ヘノ典則ヨリ出テ或ハ之ニ易ハリ或ハ之ヲ修正
シタル者アリ則チ以テ其舊法ニ照合比較スルニアラズンハ能ク之ガ
合意ヲ了解ス可カラザル者ナリ此法ノ内此ノ如キ者甚ダ多シ
今其往時ノ刑罰如何ヲ論ズルハ法律上甚ダ緊要ナラズトスルモ理論
ニ於テハ大ニ利益アリ殊ニ臨時取捨シテ變遷一ナラザル者ト其精神
骨髓ノ事情時勢ニ拘ハラザル者トヲ判別スルニ大裨補アル者ナリ
加之ナラズ余ノ數書中ニ引擧スル所ノ多識ノ學士即チフホースタンエ

三疑問ヲ舉
ケテ刑法ノ

リーヲルトランノ二氏ハ確乎不殺ノ論理ニ據リ一方法ヲ立テ、以テ
 刑法歴史ノ助ケアル如何ヲ證セリ
 就中フースタンエリー氏ノ如キハ自著ノ「治罪入門」ヲ以テ近世律學ノ
 大基礎ヲ建テタリ
 是故ニ原理歴史ノ二者ノ光輝ヲ借リ以テ此言ヲシテ粲然ヲラシメ
 ト欲スルナリ故ヲ以テ直チニ刑法治罪法ノ條目ニ就キ之ヲ講究スル
 一ヲ得ズ
 然リ而シテ所謂四疑問ノ古ヨリノ解説ヲ詳舉シ之ガ歴史ヲ全了スルハ
 亦余ノ欲スル所ニ非ズ蓋シ此ノ如キ者ハ一朝一夕ノ業ニ非ズ而シテ余
 ノ以テ枝葉トスル者却テ眼目トナルニ至ラン余ハ主ヲ置テ從ヲ先ニ
 スルヲ欲セザルナリ
 故ニ來歴論ニハ止テ三疑問ヲ舉ゲテ講究ス可シ

來歴ヲ論ス
ルヲ示ス

一ニ曰ク刑法トハ何ゾヤ又其法律ノ他ノ部ト相須ツテ如何又其他
 ノ部ト主義ヲ同フスル者ナキヤ
 二ニ曰ク佛國ニ於テ刑律ノ連綿タル根源ハ何ゾ即チ今日ノ成法ノ
 依據トスル者ハ何ゾ
 三ニ曰ク其數多ノ根源ヲ激出セシ主義心意ハ如何
 此三題ニ於テ古昔ヨリノ沿革諸說ヲ概論シ以テ後章條目ノ解説ニ裨
 補スル所アラシメントス
 顧思スルニ此來歴論ハ稍冗長ニ似タリ然レモ刑法條目ノ真理蘊奧ヲ
 極ムルニ於テ必ズ大益アル可ク又其レヲシテ歴々明カナラシムルハ
 余亦何ゾ務メザランヤ
 刑法トハ何ゾヤ
 苟モ此レヲシテ明晰ナラシメント欲セハ且ツ須ラク最モ廣汎ナル議

刑法ノ義解
ハ一般ノ法

終言

ト離ル可カ
ズナルヲ論

論ヲ究ムベシ曰ク法トハ何ソヤ蓋シ法ヲ以テ人意ノ上人意ノ生スル
前ニ在ル者トセズ誠ニ天則ニ非ズシテ却テ人意ヨリ出デタル者ナリ
トセハ則チ法ノ他ノ部ノ大責報タル刑法ハ人意ニ由ルニ非ザルヨリ
ハ毫モ他ノ檢束ヲ受ルノ理ナシ然ラハ則チ刑法ハ此レ唯一兇器タル
ニ過ギザルナリ然リ而シテ若シ法ヲシテ人爲ナラザルノ天法ニシテ而
シ人ノ奉戴スル所ノ者タラシメハ刑法ハ乃チ此天法ヲ保全衛護スル
者決シテ人ノ私制ヲ擅制ス可キ所ノ者ニ非ズ則チ大道大義ニ遵從シ
確手トシテ動カス可カラザル者タリ
然ラハ則チ法トハ何ゾヤ

法ノ六義解

法ニ義解六アリ各一派ノ説トス

第一説ニ曰ク法ハ人意ナリ社會權ニ依リ規準以テ布告スル者是レ
ナリ但タ權ノ單一若クハ數多即チ一人ノ聚メテ之ヲ有テ若クハ衆

人ノ分チテ之ヲ有ツテ論セズ

第二説ニ曰ク同時衆人ノ意ト

第三説ニ曰ク舉國人意ノ和合ト

第四説ニ曰ク普通ノ利益大數ノ利益ノ爲メニ制定スル所ノ規則ト

第五説ニ曰ク祖先ノ遵守シ來ル遺傳規則ニシテ社會結合ノ初メニ

成ル者ト

第六説ニ曰ク道理正義ノ命ズル社會交際ノ規則ト

今此諸説ニ就キ一々所見ヲ陳セントス

第一 法トハ人意ニシテ社會權ニ依リ規準以テ布告スル者乎

人意ニシテ社會權ニ依ル者トハ何ゾヤ唯是レ律令ナル者而已夫レ
律令ハ法ニ非ズ所謂律令ナル者ハ一式目ニシテ多少法義ヲ掲グル
者故ニ律令ノ法義ヲ掲グルノ多少ヲ以テ其是非正邪ヲ辨ズルニ非

緒言

ズヤ律令ノ法ヲラザル其レ以テ證スベキナリ故ニ曰ク律令ハ己レ
 ヲ評判度量スル所ノ規則即チチ創造セズト
 若シ社會權ニシテ唯其權タル所以ニ因リ以テ法ヲ創造セハ則チ是
 レ法ハ獨リ威力ニ賴リテ而メ起ル者然ルニ威力ノ法ニ非ザルハ人
 皆認メテ以テ然リトスル所ナリ
 又若シ法ハ一社會ヲ治ムル權ニ依リ其社會ノ爲メニ制作セシ者ナ
 ラハ則チ是レ各社會ハ廣通ノ上法ナキヲ以テ其互相ノ交際ヲ制ス
 可キ法亦宜シク無カル可キナリ何ゾ其理アラシヤ
 第二 法ハ同時衆人ノ意ヨリ生スル者乎
 果シテ然ラハ則チ是レ法ニハ不動不變永續普通ノ原子ナル者ナク
 人心ノ移動變遷ニ隨ヒ少數多チナシ多數少チナシ昨日ノ非ハ今日
 ノ是トナリ今日ノ是ハ明日ノ非トナリ反覆轉々常ナラザル可ク決

シテ一定不抜ノ者ナカラシ
 且ツ夫レ衆意ヲ以テ規則トナシテ而シテ毫モ道理正義ニ由ル所ナキ
 者ハ抑何ニ由テ而シテ然ル乎力ト法トハ同物ニ非ザルナリ

第三 法ハ舉國人意ノ和合ヨリ生スル者乎

嗚呼是レ憶測想像ノ説ノニ斯ノ如キ和合ハ實際斷シテ無ク到底必
 ズ得可カラザル者ナリ又設シ之ヲシテ連紐ニシテ當サニ守ルベキ
 規則ヲラシメバ則チ上必ズ一大義ノ自然ニ存スルアリ以テ此約束
 チ犯ス可キ禁ズ可キナリ然ルニ法ヲ以テ約束トナサバ所謂自然ノ
 大義ハ何處ニカ在ル且人意ハ法ヲ生ズトスル者是レ意思ノ變遷紛
 紜一ナラザルニ遇ヘバ法ヲシテ爲メニ亡滅シ以テ異思ノ者チシテ
 一己ノ私ニ放任セシメザル可カラズ何トナレバ其義ニ曰ク一箇人
 ハ其意ニ非ザルハ規則ナル者ナシ是ヲ以テ社會モ其社員ノ意ニ非

ザレバ又規則ナル者ナシ而シテ若シ一箇人ノ其己前ノ意ヲ絶チ其念ヲ斷スルハ復タ其意念ノ牽結スル所ニアラズ社會ニ於テモ亦然リ社員ノ同意ヲ存スルニ非ザレバ其規則ヲ保有スルコトナカル可シ豈ニ其理アラシヤ

第四 法ハ普通ノ利益大數ノ利益ノ爲メニ制定スル所ノ規則ナル乎」義務ノ一大義モナク唯大數ノ利益ヲ以テ之ガ基本トナサバ何故ニ爲メニ一箇人ノ利益ヲ供セシムルコトナスヤ蓋シ大數ノ利益ハ乃チ多數ノ利益ニシテ大ハ小ニ勝チ多ハ少ニ愈ルハ理ノ固ヨリ當サニ然ルベキ所ナリト雖モ余前ニ既ニ論セシコトアリ曰ク多數ノ意及ヒ多數ニ由テ生ズル所ノ力ハ以テ法トス可キ者ニ非ズト蓋シ威力ハ以テ一個人ノ意思ヲ牽制シ鎖繫ス可キモ若シ其意思ニシテ窃カニ之ニ脱レ或ハ變遷漸ク日チ積ミ遂ニ以テ輿論ヲナスニ至ル時ハ

威力ノ得テ而シテ責ム可キ所ニ非ザルナリ
第五 法ハ祖先ノ遵守シ來レル遺傳規則ニシテ社會結合ノ初メニ成ル者乎

若シ其レ然ラバ則チ是レ法ハ皆一定不易時勢ニ隨フテ變更セザル者ナリ夫レ天下ハ活物動ヒテ止マズ而シテ法ハ苟モ其開化チ裨ケズ其進歩チ挑促スルナク頑然舊ニ依ラバ則チ必ズ之ヲ壅塞障害スル者トナラン又何故ニ祖先ノ意ヲ後裔ノ必ズ遵奉セザル可カラザル者乎此權威ハ何レヨリ生ズル乎果シテ其舊物經久タルニ由ルトモソ乎祖先ノ意數千百年ヲ經テ而シテ尙ホ今日ニ朽チザル者ハ固ヨリ大力アル者ナリト雖モ此レ何ニ由リテ然ルゾ他ナシ其寸毫ノ牽制スル所ナク數千百世人ノ許容シ來ル者ナルヲ以テナリ其唯祖先ノ意タルニ因ル可ク以テ吾人ノ制シ來ルニハ非ザルナリ或ハ曰ハン

往古社會ノ結合ニ當リ祖先ヲ統治セシ規則ハ即チ神意ニ本ク者必ズ神威ノ在ルアリト然レ厄此レ將々何ニ由リ何ニ基ヒテ以テ證スル乎亦空妄ナリト謂ハザルヲ得ズ

且夫レ神意ハ至正至理ナル者ナリ今若シ社會關係ノ狀勢ニ因テ舊法其正ヲ失フニ至ラハ是レ其初メハ神意ニ適合シタルモ今ハ乃チ然ラズトスルナリ何ゾ其理アラシヤ

以上四説一ハ法ハ社會權ヨリスト云ヒ一ハ多數ノ意ヨリスト云ヒ其次ハ舉國人意ノ和合ト云ヒ其次ハ大數ノ利益ヨリスト云ヒ區々紛紜一ナラスト雖モ皆實物派按實物派ニ對シテ實物者事ニ就テ凡百ノ道理ヲ説ク者虛物派ハ靈魂ヲ以テノ説ク所トス實物派ハ第十八世ヨリ始マルニ非ズ往古ヨリ聞ク之ヲ見ルナリ蓋シソクラト希臘國ノ碩儒紀元四五百年ノ間ニ著ル前已ニ此派アリ其後漸ク盛ンニ有

名ノ輩相尋ヒテ起リ以テ今日ニ至ル其中バコンホベースロツク最モ傑俊トスベシサムノ如キハ近時ノ錚々ナル者ナリ

凡ソ人生ノ行末ハ斯世界ニ於テ全了セズト信ズル者ノ爲メニハ前ノ四説ハ均ク不可ナリ其德義之道亦道德ト云フヲ無クスルヲ以テナリ

蓋シ德義之道ハ上ニシテ大ナリ法ハ下ニシテ小ナリ法ハ德義之道ニ若カズ且此四説ハ衆人專制或ハ多集權專制ノ良奇貨ナリ誠ニ此説ノ如キハ法原チ人意ニ委シ又一規則モ無キノ公益ニ委シテ而シテ確乎不拔千載不朽ノ理ヲ求ムルヲナサズ唯人意ヲ以テ毫モ制セラル可キ所ニ非ズトセリ夫レ斯ノ如クハ則チ是レ法ハ人々亦自カラ之ヲ奉ズル能ハズ況ヤ他人チシテ之ニ由ラシメント欲スルヲヤ

法ハ古來ノ遺物トスル派論モ若シ往古初發ノ法ヲ以テ特ニ祖先ノ

意ニ歸セシメナハ責ム可キ所モ亦前ト同シカラン然レモ其法ヲ以テ至正犯ス可カラズトスル者ハ其人意タルニ因ルニ非ズ星霜ノ久シキヲ經テ猶ホ其跡ヲ觀以爲ラシ此レ是レ神意神之ヲ爲スナリ神ハ社會ヲシテ事物變遷紛擾雜亂ノ間ニ立タシメ命ズルニ改良進歩ノ事ヲ以テシ違フ者ニハ自殺即チ滅セシムルナリト乃チ往事ヲ追懷シ曰ク法ハ傳來スル者傳來スル者ハ神意ナリト此ニ由テ是ヲ觀レハ遺物ノ說ハ虛物派ナリ然レモ其說大ニ過グル者アリ是レ虛物派ニシテ眞實ニ誤ル者ナリ

第六 此說ハ大ニ可ナル者アリ曰ク法ハ社會交際ノ規則ニシテ道理及ビ正義ノ命ズル所ノモノナリト此義解ニ於テハ辯駁ス可キ者無キ乎曰ク否人權ニシテ少シク神權ヲ侵セル者アリ此レ人ノ自由タルヲ以テスレバ豈ニ不正當ニ非ズヤ

許ス可キノ義解ヲ舉グ

夫レ道理正義ノ二ツノ者ハ獨リ爲善ノ自由ヲ保護シ勸獎シ爲惡ノ自由ハ嚴禁シテ遺ス所ナク貸ス所ナキ者ナリ

社會ノ權ハ他ノ自由ヲ害セザルノ自由ヲ妨害スルノ理ナシ而シテ世界ニ於テハ立法人アルヲ以テ各人ノ自由ハ他人ノ自由ヲ以テ之ガ限界トナス可シ

然ラバ則チ宜ク法ヲ義解シテ曰フベシ各人ノ自由ト一般ノ自由トヲ取捨適和シ以テ之ヲ保護スル所ノ規則ト

彼ノ所謂道理及ビ正義ノ制スル所ノ社會交際ノ規則ト云ヘルハ余ハ以テ失當トナサズ

唯其曖昧誤謬ノ恐レアルヲ以テ之ヲ取ラザルナリ

然リト雖モ其社會交際ノ規則ト言フテ社會上ノ道理正義ナル者ヲシテ瞭然別異ニセシメタルハ甚ダ善シ蓋シ之ヲ別タズンハ徒ラニ道理

遺傳派及
改革派ノ
論議ト
ス

法ト徳義ト
ノ別ヲ論ズ

正義ノ純路ニ陥リ之ガ蔽フ所トナリテ社會ハ宗教若クハ理學ノ蹂躪
スル所トナラン

遺傳ノ派ハ古來ノ遺傳ヲ以テ道理ニ適ヒ正義ニ合フト主張シ改革派
ハ多少有識ノ意ヲ以テスレバ今ヨリ以降更ニ法ヲ立ツルモ亦理義ニ
合フ可シト言フナリ

徳義上理ニ適ヒ義ニ合フトハ何ノ謂ゾヤトハ是レ宗教理學ノ論題ナ
リ

社會上適理合義トハ何ノ謂ゾヤトハ是レ乃チ法ノ論題ナリ

若シ法ハ徳義之道タラハ徳義ノ管スル所法亦之ヲ管スルナリ而シテ若
シ法ハ徳義之道ノ一部ニ過ギザレハ其所管ハ徳義ノ管スル所ニ若カ
ズ唯徳義ノ所管ノミ法之ヲ管スルナリ

夫レ徳義ノ管スル所ヲ舉ゲテ法ハ之ヲ管セズ特ニ其幾分ヲ管スルノ

ミ是レ法ハ徳義ト異ナリテ而シテ其目的タル亦同シカラザルヲ知ル可
シ

法ノ目的タル其レ既ニ徳義ト異ナリ

徳義之典則人ノ総義務ヲ制定ス即チ直接ニ社會ニ關係セザル者モ亦
其定ムル所ナリ故ニ神ニ於ケルノ義務自己ニ於ケルノ義務同類即チ人

ニ於ケルノ義務是レ皆徳義之典則ノ所管ニ歸ス又此典則ハ啻ニ行爲
ヲ治ムルノミナラズ吾人心思ノ主宰ニシテ意ヲ此ニ決定スル以上ハ
亦心思ヲ治ムル者ナリ

義務ノ是三ツノ者アル社會ノ固ヨリ宜ク深ク注意スベキ所ナリ而シ
其大小輕重ニ至テハ等シキ者ニ非ズトス故ニ心思ノ如キ假令ヒ甚々
惡ナルモ其外ニ發シ事件トナラザルノ間ハ人々互相ノ交際ヲ擾サズ
他人ノ權利即チ他人ノ至正ノ自由モ亦其害スル所トナラズ然ラハ則

予社會ハ其心思ヲ探索シ之ヲ證明スルヲ得ルト雖モ之ヲ責ムルヲ
 ハ其權ニ在ラザルナリ
 其神ニ於ケルノ義務自己ニ於ケルノ義務ヲ忘却スル者モ亦斯ノ如キ
 者ナリ蓋シ其之ヲ忘却スル所ノ者ハ以テ他人ノ權利ヲ犯ストナス
 ヲ得ス社會ノ交際ハ爲メニ損フ所ナケレバナリ
 此ニ由テ是ヲ觀レバ心思ハ全然不羈ノ者其自己ニ係リ天神ニ係レル
 者ハ社會ハ之ヲ放委シ敢テ關涉ス可カラザルナリ社會ノ權ハ唯以テ
 其秩序ヲ保護シ以テ之ヲ改良スルニ在ル耳心思ヲ抑壓シ自由ヲ強制
 スルモ爲メニ大益ナカル可キナリ
 凡ソ德義之道ノ制スル所タル他人ニ於ケルノ總義務ハ社會ノ名義ヲ
 以テ盡ク之ヲ強ユ可キニ非ズ一方ニ於テ他人ノ權ヲ有シテ而シテ道理正
 義ニ適合スルニ非ザレバ社會上行ハシム可キノ義務ナル者ハアラズ

故ニ恩施ノ如キハ義務ハ則チ義務ナリト雖モ貧人ハ強テ之ヲ求ムル
 ノ理ナシ
 法ノ制スル所ニシテ或ハ德義之道ト同シキ者アリ而シテ共同シキ所ノ
 者ハ一己ノ私意ニ委シテ以テ遵奉セバ必ズ社會ノ危害ヲ招ク者ナリ
 法ノ直接ナル標的ハ自由ニシテ法ハ即チ之ヲ衛護スル者ナリ各人有
 スル所ノ自由種類多シト雖モ之ヲ要スルニ之々縦マ、ニ其權利ヲ行
 ヒ其智識ヲ磨テ而シテ他人ノ亦之ヲ爲スノ自由ヲ妨ゲザル而已法ノ或
 ハ以テ併立義務接凡ソ義務ニ二類アリ一チ單純義務ト云ヒ一チ併立
之ガ執行ヲ求ムルヲ得ザル者即チ負擔ノ輕キ者ナリ併立義務ハ權利
ト並ビ立チ他人ノ之ヲ要求スルヲ得ル者負擔ニ於テヤ重キ者ナリ
 ヲ制シ之ガ執護ヲ保行スル所ノ者是レ各人ノ自由ヲ制スルニ於テ己
 ムヲ得ザルニ因リ強制ノ方法ナクシテ義務ニシテ義務タラザル者ア
 シハナリ

德義ノ綱領タルハ義務ニ在リ而シテ其義務ハ權利ト併立スル者ト或ハ然ラサル者トアリ其之ヲ制スル所以ノ者其唯地球世界ニ於テ之ヲ行ハシメントスルノミナラズ又之ヲ未來世界ニ期スルナリ

法ノ制スル所ハ唯現今ノ生存ニ在リ

法德義ト命令ヲ同フシ互ニ適合スル者アリ其利ヤニアリ法ノ禁制スル所ノ行爲ハ是レ法ノ管スル所ニシテ心意ハ德義ノ掌ル所ナリトス

法ハ惡ナル結果即チ惡事ヲ戒メ德義ハ惡ナル欲望即チ惡心ヲ制スルナリ

法ノ或ハ心意ヲ制スル所以ノ者其行爲ヲ制スルニ於テ己ムヲ得ザルニ因リ且以テ罪視ノ度ヲ定メントナリ

故ニ曰ク法ハ心意ニ關涉セズ又自カラ害スルニ止マレバ行爲ニモ亦干涉セズ他人ノ權利ヲ害スルニ非ズンバ行爲ヲ問ハザルナリト

德義ハ法ト其主義ヲ異ニス德義ハ神ノ自作ニシテ誠ニ神德ニ頼リテ

確立維持スル者ナリ

法ハ固ヨリ神慮ニ係レル者ナリ蓋シ神ノ人ヲ斯世ニ生シ社會ヲ結合セシムルヤ其欠ク可カラザルノ規則ニ頼テ以テ存立スルヲ欲スルナリ然リト雖モ其至良至善最モ義ニ合フ者ヲ探求スルハ人ノ思慮ニ委シテ而シテ自カラ之ヲ作サザルナリ其至善至良最モ義ニ合フ者トハ自由ノ區域殊ニ廣キモ以テ社會ノ交際ヲ紊亂スルヲナク人ヲシテ自カラ其所業ノ責ニ任セシムル者是レナリ

法ノ制スル所ニシテ德義ニ反スル者ハ有ル可カラズ蓋シ神既ニ人ヲシテ社會ヲ結合セシメント欲シテ而シテ又之ガ規則ノ立ンテ欲ス夫レ德義之道ハ來世ニ於テ現世ノ行爲ヲ判スルノ資トナル者ナリ何ゾ社會交際ノ規則ニシテ德義ニ抵牾スル者アラシヤ

法ハ一定不遷ノ者ニ非ズ時勢、情狀、風俗、智識、教育ト與ニ變更ス可シ社

法ハ變遷ス可キヲ論ズ

會權ノ分ナル首領權及ビ被治者ノ分ナル自由ハ特ニ常ニ事情ニ於テ
 度ヲ同フセザルノミナラズ又決シテ然ル可カラザル者タリ
 憲制律令ハ法ヲ行フノ器具ナルモ人力ノ限リアル亦完全周備ノ者ニ
 非ズ決シテ一國ノ百般ノ需要ニ充ツルニ足ラザルナリ
 然レ凡此需要モ時勢ニ因テ變易シ根據ノ法モ亦衰頽ナキ能ハズ又其
 實際ニ必要ナル碎礪窮極新義ヲ發明スルト少カラズ且其數過不及ノ
 事アル以テ人智ノ足ラザル至善按茲ニ至善ト謂フ者ハ國ヨリ事理當
 然之極ナリト雖モ百般ノ事物至良
 至美皆其處ヲ得タルヲ道ニ到ルノ難キ又真理ノ曉然ト一點ノ雲烟ナ
 フ其義最モ廣大ナリトスニ致スノ遲キヲ見ルナリ法ノ義解ノ紛々タル夫レ既ニ以テ證ス可
 キニ非ズヤ
 律ト法トノ別ヲナスヲ得タルハ是ヲ第一著ノ進歩トス
 其後法ノ性質ヲ定ムルノ事起リ論議百出解釋紛紜遂ニ人民一己ノ權

德義ニ於テ
 ハ興衰變遷
 スル者ナキ
 ナ論ズ

利ト一國政府ノ權限トヲ分論スルニ至リ世運ノ開進セル日ニ細ニ月
 ニ密ニ漸理義ノ炳昭タルヲ見ルナリ蓋シ一國ノ權トハ首領權ナリ人
 民一己ノ權トハ人タルノ自由ノ謂ヒナリ此二者ノ分限タル風俗人情
 時勢文化ニ因テ變更ス今ヨリ以降亦博學多識ノ黽勉窮極シテ己マザ
 ル所ナリ
 然リ而シテ彼ノ德義ノ綱維ハ毫モ斯ノ如ク其ノ興衰變遷スル所ナキ乎
 何レノ國ヲ問ハズ何レノ世ヲ論ゼズ凡ソ人ノ知覺ニシテ永存スル者
 アリ即チ善惡ノ辨別是レナリ爲善避惡ノ義務是レナリ
 蓋シ甲ノ以テ善トスル所乙ハ之ヲ惡トシ乙ノ以テ善トスル所甲ハ之
 ヲ惡視スルトアリ
 甲國ノ以テ是トスル所乙國ハ之ヲ非トシ乙國ノ是ハ甲國ノ非彼世ニ
 於テ邪ナルモ此世ハ以テ正トシ此世ノ邪彼世ノ正タル是レ亦固ヨリ

免レザル所ナリ

其事ノ惡タリ善タルヲ定ルヤ人其見ヲ異ニシ國其論ヲ殊ニシ世其評ヲ別ニス事ニ即テ觀察スレバナリ然リ而シテ唯其惡ト善トヲ別異ニスルハ古往今來人各知覺ノ存在スルアリテ而シテ之ヲ能クス是レ天下普通ノ理字内ノ人皆然ラザル莫キナリ

此ニ由テ是ヲ觀レバ彼ノ良智ノ精妙ニ因テ以テ能ク善惡ヲ別スシメ且爲善ノ義務ヲ明ニセシムル法ハ人生ノ必要永ク存シテ朽チザル者ナリ其用方或ハ變更スルアルモ蘊義ニ至テ寸毫ノ違フ所ナキナリ
ウホルテールノ言甚ダ善シ曰ク字内各國皆德義ノ綱維アリ而シテ千百ノ情狀ニ因テ其之ヲ引用スルヤ區々一ナラズ唯其蘊奧ハ常ニ變セズ義不義ノ別是レナリト
其蘊奧ヲ以テ義不義トシタルヲ察スルニ蓋シウホルテールハ德義ト法

德義ト法トノ混淆

トチ混淆セシナラン德義ノ蘊奧ハ善惡ニシテ法ノ蘊奧ハ義ト不義トナリ

ウホルテールノ混淆ノ事唯余輩ノ說ノミナラズ他ノ理學士著述者律學士ノ喋々之ヲ論ズル者甚ダ多シ

余ノ單ヘニ所謂法ナル者ハ諸士ノ稱シテ自然法ト曰フ者ナリ此法ヤ古ヘヨリ衆議ヲ經ルモ未ダ嘗テ良義解ヲ獲ザル者トス

其以テ久ク明解ヲ獲ザル所ノ原因亦固ヨリ多シト雖モ其中勢力ノ大ナル爲メニ其義ヲ壅蔽スル者一アリ古ヘヨリ自然法ノ根源ト性質トヲ論ズル者其主眼ハ事物ノ義解ニ在ルニ而シテ却テ其事物ニ注目セザル者比々皆是レナリ是ヲ以テ自然法ヲ論述セシ者ニシテ而シテ此名ヲ以テ自然法ニ社會ヲ治スルノ法ニ適用シタルノミナラズ德義ノ經常ニモ亦之ヲ用ユル者甚ダ多シ

緒言

自然法ノ諸義解ヲ駁ス

思想法ハ立法者及ヒ社會ノ常ニ願思推考スル所ナリ思フニ人定法ト
ドロアイトール
 思想法トテ分々ト欲セハ社會法ノ名ハ最モ周密ナルヲ以テ當初自
ドロアイトール
 然法ニ易ルニ此名ヲ以テセハ辯駁誤謬ハ甚ダ少ナカリシナラン
ドロアイトール
 モンテスキウノ言ニ曰ク自然法ハ宇内森列星羅ノ諸國ヲ治ムル以上
 ハ人生ノ道理ナリト
 余ヲ以テスレバ宜ク左ノ言ヲ以テ之ヲ増補シ以テ其義ヲ縮約スベシ
 曰ク且其社會交際ノ強制規則タル以上ハト且其意謂ヘラク此普通
 ノ性質ナクンハ律令ヲ以テ自然法ノ部分ヲ成ス者トスルヲ得ズ其
 普通ノ性質アルハ必須ノ事ナリト余ハ之ヲ信セザルナリ蓋シ天下ノ
 服従スル所以ノ者固ヨリ必ス則アリ時ヲ論ゼズ地ヲ問ハズ億萬人ノ
 承服スル所ハ此則ヲ遵守スルノ以テ人タルノ道道率之謂ニ合ナヒ社
 會交際ノ維持改良ニ必要ナルヲ證スルニカアル者ナリ而シテ自然法即

ナ社會法ハ許多ノ事理ヲ以テ成立スル者而シテ其總事理ハ一時ニ天下
 ノ尊奉承服シ得ル者ニ非ズ必ズ此ニ明ナルモ彼ニ暗ク今之ヲ知ルモ
 古ヘ之ヲ知ラザルアリ夫レ其事理彼此明暗古今知不知ノ異ナルアリ
 而シテ是亦所謂ノ法中ニ入ル者ナリ唯之ヲシテ益詳明ナラシムルハ乃
 チ開明ノ目的トスルナリ
 又自然法ヲ釋スル者アリ曰ク經常ノ彙集ニシテ永存不朽ノ理衆人ノ
 心ニ銘スル所ノ者ト此レ余ノモンテスキウヲ駁スルノ言略以テ適用
 ス可キナリ其普通永久ノ性質アルシセロン按紀元前百六年ニ既ニ已
生ル羅馬ノ辨士
 ニ之ヲ言ヘリ
 自然法ノ中古今何ノ地ヲ問ハズ人皆承服スル者アリ人智ノ全々カラ
 ズシテ發明スル能ハザル者アリ又民權ノ伸暢ニ隨ヒ開明ノ社會ヲ改
 良スルニ因テノミ社會交際ノ規則トナル者アリ唯其大本ノ主義ニ至

テハ毫厘ノ異ナルナク之ヲ駁スル者モ亦未ダ嘗テ之レアラズ而シテ其
 之ヲ枉ゲ之ヲ履マザル者ハ蓋シ其取用ニ在ルノミ
 社會ヲ作サハルモ亦人ヲ治ム可キノ經法之ヲ自然ノ法ト云フトノ義
 解ハ固ヨリ余ノ許サハル所タリ
 抑社會ハ人意ニ成ル者ニ非ズ自然ノ法ノ結果ナレバ社會交際ヲ保持
 スル規則ハ則チ社會存立ノ己前ニ在ル者ナリ是ヲ以テ其規則ハ特ニ
 自然法ニ離レザルノミナラズ其骨子トス可キ者ナリ
 ダゲソノ自然法ヲ義解スルノ言甚ダ眞理ニ近シ曰ク所謂法ナル者ハ
 汎ク之ヲ論ゼハ諸則ノ纂集ニシテ吾人ノ由テ以テ義ト不義トヲ辨シ
 以テ從避スル所ヲ知ル可キ者ノミト
 此言ヤ不可ナシトセズ其規則設立ノ基本ノ主義ハ何處ニ在ル乎ダゲ
 ソノ以爲ラク法ノ眼目ハ其當サニ治ムベキ社會ノ幸福改良ニ在リト

德義ト宗門
 トハ相異ナ
 ル所アルヲ
 論ズ

余輩ヲ以テスレバ法ノ眼目及ビ定度ハ社會ノ改良ニ在ラズ而シテ其自
 由ニ在リト
 又ダゲソノ忽ニスル所アリ法ハ其規則ノ遵守ヲ舉ゲテ之チ一己ノ
 心ニ任放セズ服従ヲ要センガ爲メ必ズ牽制ノ方法ヲ設ク是レナリ
 法ハ德義ト混淆セズ而シテ亦宗門ト混淆セズ
 德義之道ト宗門ノ經維ト差マフ如何
 德義之道ハ良智ト道理トニ因テ之ヲ知ル夫レ人ノ斯世ニ在ル必ズ一
 規則ノ存スルアリ以テ動作心思情愛ノ三者ヲ統制スルナリ此レ固ヨ
 リ照々明々人ノ得テ而シテ識ラズトセザル所ナリ而シテ此規則タルヤ道
 理之ヲ發顯スルモ之ヲ創造セズ何トナレバ人ニ上下ノ相抵觸セルニ
 職分アリテ一ハ法ヲ爲シ一ハ之ヲ遵守スルトスルトハ決シテ得可カ
 ラザル事ナレバナリ

天下ニ自カラ規則ノ存在ス可キヲ推シ以テ之ヲ熟考セハ高大無邊實
 ニ測ル可カラザルノ理神即チアルヲ見ル高大無邊ノ理是レ人ノ道理ノ
 由テ來ル所ニシテ人ノ道理ハ之ニ與カル者ナリ是ヲ効果ヲ推シテ源
 因ヲ求ムルトス故ニ宗教ハ神ノ自カラ顯カニスル所神意神命ナリ
 且宗教ハ德義ノ真理アルニ拘ハラズ他ノ真理ナル者アリ即チ典謨訓
 誡是レナリ而シテ其典謨訓誡ハ人生ノ道理ヲ以テスルノミニテハ決シ
 テ茲ニ至ルヲ得ズ是ヲ以テ一信奉ヲ以テ之ガ大本トナスナリ然レモ
 彼ノ道理モ亦其蔑視スル所ニ非ズ蓋シ諸宗教ノ中ニ就テ其孰レカ眞
 ナルヲ辨別スルハ道理ニ頼ルニ非ザレバ能ハザルナリ
 宗教ハ之ヲ了解セシムル者ナリト云ハンヨリ寧ロ之ヲ命ズル者ナリ
 ト謂フ可シ蓋シ吾人德義之道ニ因テ得ル所宗教ノ勢力ヲ受クル者多
 シ其古ヘヨリ智識ヲ練磨シ改良シ鞏固ニシ成熟スルニ與カル所アル

ヲ以テナリ而シ吾人ハ平常深ク之ニ注意セザルニアリ故ニ宗教ヲ謂
 フテ教育ノ内自然ニ存在ストスルモ亦可ナリ
 然リ而シ宗教ト德義ハ全ク相懸隔スル者ニ非ズ唯相異ナルト謂フ可
 キ而已

ギンソードレミョザット氏ハ曰ク人世一タビ宗教ノ亡ブルアル法亦爲メニ
 廢スルナリトギンソード氏ハ德義ヲ以テ法ノ基礎トナセシ者ナリ
 カロー氏ノ説ニ曰ク天命ニ率ヒ智識ヲ皇張シ及ビ人生地上ノ本分ヲ
 盡スニ付テ社會ヲ結成スルヲ以テ必要トセバ則チ法ノ無キ能ハザル
 所以テ證スルニ足レリ又將ク何ツ神ノ存在來世ノ約束ヲ云々スルヲ
 須タシヤト
 其レ或ハ然ラン蓋シ人ノ自由ハ法ニ非ザレバ人カノ以テ保護ス可キ
 者ナク法ハ人生ノ必要ニシテ正當ナルヲ猶ホ自由ノゴトシ又其一人

ノ自由ト一般ノ自由ト相併立スルノ樞機ナルヲ以テ須臾モ自由ト離
 ル可カラザル者ナリ
 且法ハ人ノ社會ヲ成ササル可カラザル所以ト自由トニ由リテ直チニ
 生ズル者ナリカロー氏ノ言亦當レリトス可シ然リト雖モ其社會ヲ成
 ササル可カラザル所以ト自由トハ何レヨリ生ズル乎是ヲ當サニ窮ム
 可キノ急トスルナリ
 天神ハ人ヲ造リテ自由ナラシメ互ニ交ハラシムル者ナレバ法ハ則チ
 神ヨリ出ヅル者トスルモ亦間接ニシテ直接ニ出ヅル者ニ非ズ而シテ
 法ト律令トノ別ヲ舉グルニ外ナラズ律令ハ德義ノ經常ニ非ズ宗教ノ
 典則ニモ非ズ思フニ法ニハ固有ノ一主義アリ且德義上ニモ非ズ宗教
 上ニモ非ズ一特別ノ責報ヲ具フルナレバ鬼神ニ關與セザルハ有
 ラザルナリ

何チカ刑法
ト謂フ

然ラバ則チ刑法ハ特殊ノ責應ニシテ其責應ハ固ヨリ宗教德義ニ因テ
 起ル者ニ非ザルモ二ツノ者ノ鞏固ニシテ共ニ混淆セザル所ノ律令ニ
 因テ生ズルナリ先ヅ責應アル規則ヲ詳明理解セズンバ責應ノ方法ヲ
 講究スルニ由シナシル一ツ曰ク刑法ハ法ノ一類トセンヨリ寧ロ特
 殊ノ者トセント

第二章 緒言

俄國刑律ノ根源ハ如何

緒言歴史上
ノ二個ノ問
題

其根源ヲ挑發誘導シタル原則精神ハ如何
 是レ此緒言ノ二個ノ題目ナリ

此二個ノ題目タル實ニ一千四百年間ノ沿革興亡及ビ其他ノ事跡ヲ登
 載スル者ナリ

此ノ如ク多年ノ事跡ヲ論ズルニ於テ之ヲ別タズンハ必ズ混淆ヲ生ズ

緒言

ルニ至ラン

故ニ今此一千四百年ヲ別ケテ五期トナシ而シ前ニ舉グル所ノ二題目
ヲ其各期ニ就テ講究ス可シ

第一期 即チ紀元四百年ヨリ一千年ニ至ル之ヲ日耳曼期ト稱ス

第二期 即チ紀元一千年ヨリ一千二百年ニ至ル之ヲ封建期ト稱ス

第三期 即チ紀元一千二百年ヨリ一千五百年ニ至ル之ヲ一時改革
期ト云フ或ハ之ヲ佛蘭西期ト云フモ可ナリ

第四期 即チ紀元一千五百年ヨリ一千七百八十九年ニ至ル之ヲ最
大王權期即チ王命期ト云フ

第五期 即チ一千七百八十九年ヨリ方今ニ至ル是レナリ
今左ノ二問題ヲ窮査セント欲ス

第一 紀元四百年ヨリ一千年ニ至ルノ間佛國刑事法令ナル者ノ根

源ハ如何

第二 此根源ヲ挑發誘導シタル原則精神ハ如何

第一 紀元四百年ヨリ一千年ニ至ルノ間佛國刑法ノ根源如何紀元四
百年ヨリ一千年ニ至ルノ間ハ是レ即チ「メロウツンシアン」竝ニ「カルロウツ
ンシアン」朝ノ名ニ國ノ二期ナリト雖モ合セテ之ヲ一期トナス

此一期間ノ諸法令ヲ明ナラシメンニハ先ツ茲ニ聊カ歴史ヲ摘叙セザ
ル可カラズ

回顧スルニ今ハ佛國ノ名稱ヲ下ダス邦土モ紀元四百年ノ頃ハ雜種
異族ノ野人ガ巢窟ニシテ決シテ今日ノ如キ同一ノ人民ノ占領スル所
ニ非ザリキ而シテ其今日ニ於テ佛國ノ人民タル者ヲ創成セシハ即チ此
各種族ノ數多ノ星霜ヲ經ルニ隨フテ漸ク混同セシ者ナリ又太古ニ洵
リテ基督世紀ノ以前ヲ視ルニ哥爾ニ於テハ既ニ三種ノ生民アリ其北

方ニ在ルヲ「ベルジユ」ト云ヒ中央ナルヲ「セルト」ト云ヒ南方ナルヲ「アキ
テン」ト云ヒ各割據シ互ニ分離セリ其羅馬ノ敗ル所トナルヤ屢叛亂ヲ
起スト雖モ成ス所ナク依然其管轄ヲ受ケ遂ニ以テ日人侵入ノ日ニ至
レリ

「フランク」將來邦土ニ佛蘭西ノ未ダ移住セザルニ當リテヤロワール河
ノ南方ニ於テウヰシゴットナル王國ヲ新建シ東ノ方ニハビュルゴンド王
國興リ羅馬ノ管轄ハ既ニ地ニ墮チタリ此レ純ラ兵力ヲ假ルニ非ス全
ク商議和談ノ致ス所ニシテ而シテ其ビュルゴンド人ハ元ト日耳曼ノ種
族ニシテ基督教ニ化セシ者ナリト云フ
紀元二百年以降ハ「フランク」サリアン種族ノ名聲來寇シ諸所ヲ犯シテ隣
ヲ極メタリシモ其事トスル所攻略ニ非ズ唯奪掠ヲ擅マ、ニシウヰシ
ゴットビュルゴンドノ各一地ヲ占領シタルノ比ニ非ザリキ是ヲ以テ其

侵入ノ効ヤ哥爾羅馬哥爾羅馬ノ相混シタル種族ヲ謂フ人ノ全社會ヲ亡滅シ純
一ナル新國ヲ創建スルニハ至ラズ但其將來ニ於テ漸趨食シ多年ヲ經
ルモ後ニ至リテ始メテ邦土ヲ占有シタルガ故ニ却テ當時精神風俗宗
教開明ニ於テ卓越シタル哥爾羅馬ノ人民ノ爲メニ大ニ化セラント
ト云フ

「フランク」リビユエール即チムーズモゼールリナレ諸河川ノ沿岸
ニ在リシ「フランク」人ノ一種ナルガ紀元七百年頃ニ於テ再ヒ大寇ヲナ
セシヤ否ヤ又其「フランク」サリアン種族ヲ亡ボシテ日耳曼第二ノ種族ヲ立
テタルヤキヰト氏ハ以テ然リトスルモシヤトトブリアン氏ハ其然
ラザルヲ論ゼリ然レ正「フランク」リビユエールノ「フランク」サリアント
共ニ而立シタルモ或ハ其之ヲ亡ボシ相混一スルニ至ルモ法律ノ原素
トナル可キ許多ノ新原素ヲ招致セシハ固ヨリ瞭然ナラン

雜種異族ノ相混シテ多年ノ星霜ヲ經ルニ非ザレバ同一人民ノ形ヲナ
 サル國ニ於テ其法律ハ純一ナル根源ヲ求索スルハ徒爲ナラン吾佛
 國法典ハ亦吾人ノ如ク種族ノ全ク相異ナル祖先アリテ純一ナル者ナ
 シト雖モ試ミニ其諸原素ヲ別テハ則チ二大原素トナルベシ曰ク日耳
 曼原素曰ク哥羅原素是レナリ此レ佛國公法私法ノ根源ニシテ即チ刑
 法ノ根源ナリ此二原素ノ合離興廢混同之ヲ法律ノ歴史トナス

日耳曼原素

日耳曼原素ハ如何ナル法律ヨリ生ゼシ乎「サリヤン」法「リビユエール」法
 「ゴンベット」法「カピチュール」其根源タリ

サリアン法

何チカ「サリアン」法ト謂フ政府ノ布告シタル命令ノ條目ナルカ或ハ古
 來ノ慣例遺傳ノ蒐集若クハ賢人哲士ノ確定セル決議録ノ如キ者乎日
 人侵入ノ前ハ「ツートン」日耳曼種族ノ名語ヲ以テ之ヲ記載シタル「アリア」即
 チ羅匈語ヲ以テ記載シタルハ其侵入以後ノ事ナルヤ何レノ時ニ於テ

始メテ羅匈語ヲ以テ之ヲ記載シタル乎

此諸問題ニ付テハ學士ノ論說紛紜一ナラズ就中ギグー氏バルドシニ
 ウラフフリエール氏ノ如キハ數多ノ日耳曼著述家ノ後ニ於テ大ニ之ヲ
 論ゼリ第一第二ノ問題ニ付テ起ル所ノ議論ハ茲ニ之ヲ論ズルヲ要セ
 ザル可シ

唯其第三問題ニ於テ最モ信據ス可キノ說ハ「サリアン」法ハ「クロウ」オス
 王ノ世即チ紀元四百八十八年ヨリ四百九十六年ニ至ルノ間ニ於テ公
 布セラレタル是レナリ

固有ノ法即チ慣習法ハ西佛國ニ於テ最モ行ハレタル者ナリ西佛國ハ
 即チヌーストリーナリ此慣習法ハ日耳曼原素中ニ就テ一大緊切ノ部
 分ヲナスト雖モ亦既ニ羅馬原素ノ幾分ニ混染シ全ク純一ナル者ニ非
 ザリキ

其四百八條ノ中三百四十三條ハ刑法ノ引據スル所タレバ則チ此根源ノ刑法ニ於テ最モ緊要タルヲ知ル可キナリ然レドサウガキニ一氏ガ自著ノ中葉羅馬法史ニ於テ論ズル所ニ據ルニ曰ク「サリアン」法ノ名ヲ以テ吾人ニ傳ハル所ノ者ハ甚ダ緊要ナラザル事件ニ關スル不全不備ナル摘撮録ニ過ギザルノミト亦誣言ニ非ズト謂フ可シ

「リビユエール」法ハ稍後世ノ者トス或人ハ云ク第六世紀即チ紀元五百十一年ヨリ同三十四年迄ニ登錄セラレタリト又或人ハ云ク第七世紀即チ紀元六百十三年ヨリ同二十八年迄ニ記載セラレタリト此第二ノ説ハギヅ一氏ノ是認スル所タリ世ノ最モ信ヲ措ク所ノ説ニ云ク此法ハ二百七十七條アリテ其百六十四條ハ刑法ニ關シ自餘ノ百十三條ハ他ノ事件ニ關セリト又此法ニ於テハ彼ノ日耳曼原素ナル者羅馬原素ノ勢力ヲ受クルヤ殊ニ甚シク「サリアン」法ノ然ルヲ致セシ比ニ非ズ加

リビユエール法

之其條目ノ中ニ問羅馬法ト相關繋スル者アルヲ見ルナリ「リビユエール」法ノ數事項モ亦此法ニ關スル者アリト云フ

ギヅ一氏ハ「リビユエール」法ニハ「サリアン」法ニテ廢シタル日耳曼原素ヲ變更シタル者アリト云フヲ以テ右ノ説ハギヅ一氏ノ意見ニ相反セラルガ如シ然レモギヅ一氏ハ自家撞着ノ論ヲナサズ蓋シ其説ニ據ルニ「リビユエール」法ハ「サリアン」法ノ後ニ編纂セラレタルガ故ニ羅馬法ノ遺迹アルヲ殊ニ多シト云ヘリ

ゴンベツト法

第三ノ法ハ亦日耳曼原素ノ大ニ混入スル所ニシテ之ヲ「ビユルゴンド」法トナス世俗名ケテ「ゴンベツト」法ト云フ此法ハ「ゴンドボ」ノ世其全部ヲ公布シタリト云ヒ又ハ其世ニ於テハ唯其一部ノミヲ公布シ自餘ノ法ハ後世ニ至テ公布シタリト云ヘリ但其公布ハ「プー」ル「ゴ」ギ「ユ」ノ未ダ「フ」ラン「ク」入ノ手ニ歸セザル前即チ紀元五百三十四年前ニ在リシ

「ハ明カナリ又此法ハ固ヨリ慣習ノ簡略ナル彙集ノ如キ者ニ非ズ平
 生命令ヲ布ク所ノ一定ノ官府ノ手ニ出デシ者タリ此レ當時既ニ大ニ
 開明ニ進歩シタルヲ徵スルニ足ル可ク而シテ其羅馬法ノ事跡ヲ遺セシ
 亦尠カラズ三百五十四條ノ中刑律タル者ハ百八十二條アリシト云フ
 「ウキジゴット」法ハ紀元四百六十六年ニ於テ登錄シタルガ如シト雖モ今茲
 ニ之ヲ論ゼザル可シ蓋シ「ウキジゴット」人ハ五百七年ニ於テクロウキス王ノ
 擊破スル所トナリ西班牙ニ遁走シケルガ故ニ其法ノ當時ニ在リテ最
 モ善良ナリシニ拘ハラズ佛國法律ニ於テハ唯間接ニ些々タル影響ヲ
 受ケタルノミ故ニ其詳細ハ觀者ギヅ「氏」所著ノ佛國開化史第九第十
 章ニ就テ考究セン「氏」ヲ冀望ス又其條目ヲ詳ニセント欲セバ宜シクカ
 「ンシアニ」氏所著ノ「バルバロン、レーシユアンナツケ」名書及ヒ「バルド
 シユウ」氏ガ一千八百四十三年ニ於テ刊行シタル「サリアン」法ノ諸編ヲ

ウキジゴット
法

閱スベキナリ

サリアン法
校閱

紀元七百六十八年ニ於テシャル、マーギユ王ハ「サリアン」法ノ校閱増
 補シタル者ヲ公布シ又八百三年ニ於テ「サリアン」リピユニールニ法ノ
 増加改正シタル者ヲ頒布セリ

自後ノ増加

ルイ、ルデボンテール及ビシヤル、ルシヤウブノ二王ハ亦前ノ法律ニ
 増付ス可キ條目ヲ公布セリ此條目ハ「カビチユニール」ノ名アル諸法令中
 ニ編入セラレタリト云フ

カビチユ
ニール

「カビチユニール」ナル語ハ編章ニ小別セラレタル書類ノ義ニシテ其性質
 ト其根源ト「因テ種々相異ナル諸例規ヲ稱スル尋常一般ノ名タリ又
 此稱名ハ宗門ヨリ出ヅル所ノ諸例規ニモ適用セリ然レテ初代二朝即
 チ「メロバンデアン」「カルロバンデアン」諸王ノ命令ニ於テ特ニ專用スル
 所ナリ

彼ノハリユース氏カ至頁ノ著述ヲナシタル「カビチユレール」ハ此レ法律
上萬般ノ例規ヲ舉テ詳悉シタル者ニ非ズ其他尙ホ行政上ノ布令官吏
ヘノ公達、私事争訟ノ判決職務、任命、赦典等モ亦皆「カビチユレール」ノ内ニ
入ル可キ者ナリ

立法上ニ係レル條目タル可キ「カビチユレール」ナル者ハ三月會（按初代工
ニ當リ毎年三月一日其臣屬ヲシテ原野ニ集會ニ於テ登錄シタルヲア
シ事ヲ議セシメシヲアリ後五月一日ニ改ムニ於テ登錄シタルヲア
リ緇徒素流ノ中最モ顯著ナル者ノ會合ニ於テスルヲアリ又ハ此一派
ノ中最モ顯著ナル者ノミノ會同ニ於テスルヲアリ或ハ一回ノ會合モ
ナク之ヲ編纂シタルヲモ亦之アリ

三月會議員ノ審議ヲ經ザル「カビチユレール」ハ通常一般ノ法律ト異ナル
所アル乎バルドッシユウ氏ハ以テ然トセリ曰ク此レ王家ノ存意一時
ノ權力アル者ノミ故ニ其存意ニ因テ廢除ス可キ者タリ一般ノ法律ハ

之ニ反シテ諸議員ノ審議ニ罹リシ者ナレバ亦其承諾ヲ受クルニ非ザ
レハ廢除ス可カラザルナリト

然レ厄初代二朝ノ立法會議ニ於テハ余ハ深ク信ヲ措ク能ハザルナリ
蓋シ當時王家ニ於テ多少成規ニ準據シ招集シタル大民議會ノ意見ヲ
問フテハ固ヨリ之アリト雖モ己レヲ制抑シ或ハ自家ノ權ヲ制限スル
權力ノ如キハ大民議會ノ有スル所ニ非ザリシ故ニ此點ニ於テバルド

ッシユウ氏ノ說ヲ措テギヅ一氏ノ說ヲ取ラン（第四文）曰ク余輩ヲ以テ
スレバ法律ト王命ト異ナル所以ノ者ハ其自リテ出ヅル所ノ權威ニ關
ルニ非ズ其公布ニ付テ禮式ノ輕重アルニ係ラズ又其出ヅル所ノ名義
ニ因ルニモ非ズ唯其目的タル如何ニ因ル耳

其種族ノ如何ヲ問ハズ凡ソ衆庶ニ適用ス可キ者是レテ法律トス
其一種一族ニ適用ス可キ特別ノ條款ノミアル者之ヲ王命ト云フ

シヤル、マーギニユノ世ニ於テノミ六十有五ノ「カビチユノール」頒布セリ
此「カビチユノール」ニ四百六十一條アリ其百三十條ハ刑法ニ屬スル者ナ
リト以上ギン
氏ノ説

羅馬原素

右原素ノ小別

古羅馬ノ原素

アラビヤニア
ニ

ギヅ一氏ハ自著ノ佛國開化史第二十一章ニ於テ右ノ「カビチユノール」ノ
總表ヲ載セ其規定スル所ノ事件ヲ八類ニ別テリ
此一期間ニ於テ羅馬原素タル者ノ根源ハ如何アリシ乎
此原素ハ又小別セザルヲ得ズ曰ク古羅馬原素曰ク新羅馬原素及ビ其
純粹ナル民事上ノ原素曰ク宗門原素曰ク寺院原素
其純粹ナル民事上ノ原素ノ根源ハ第一「ブレピアアリナム」ニアニ一第
二「パピアニールスボンソム」皆規則
ノ名シユスチニヤン彙集ハ蓋シ其第三
ニ列ス可キ者カ
「ルブレピアアリナム」ニアニ一ハ四百六十六年ヨリ四百八十四年ニ至

パピアニール
スボンソム

ルノ間「ウサジゴット」王國ニ於テ公布シタル羅馬法ノ纂集ナリ
此纂集ニ引據スル所ノ者ハ第一「テラドーズ」法典第二「テラドーズ」ウ
ンチニヤンマルセンマシヨリアン及ビセウエール諸帝ノ憲法第三「ガイ
ユス」憲典第四「法學士」ボールノ「レセプター」サンテンマエ「第五」クレ
アン及ビエールモシエニアン「法典第六」パピニアンノ「リベル、レスホンソ
ン」第七「ガイユス」憲典ヲ除クノ外以上諸法ノ解釋ノ一部是レナリ「ル
ブレピアアリナム」ハ羅馬人ノ遵奉ス可キガ爲メ登錄セラレタルナリ
「パピアニールスボンソム」又ハ「パピアン」ト云フ者ハ五百十七年シヂス
モンノ世ビユルゴンド王國ニ住スル羅馬臣民ノ爲メニ登錄セラレタ
ル者ニテ諸事件ノ類別方ニ於テハ「エンベット」法ト其趣テ同フナルナリ
「ラフンク」人ノ「ビユルゴンド」人ヲ征服シ「ウサジゴット」人ヲ驅逐シタル
ノ後ハ「ルブレピエール」及ビ「ルパピアン」ナル者ウサジゴット及ビビユ

緒言

ルゴンドノ舊邦ニ行ハレ其他哥爾ノ諸部ニ於テモ亦之ヲ遵守セリ因
テ思フニ此「ルビレビエール」及「ルバビアン」ナル者ハ羅馬臣民ノ規則
タリシ者ノ如シ

其詳細ハギグー氏ノ佛國開化史第十一章ニ就テ知ル可シ

ジュエスチニ
アン集

ジュエスチニア「彙集」ハ第六世紀或ハ第七世紀ノ末年哥爾ニ廣マリタ
ルヤ否ヤハ大ニ議論ノ在ル所ニシテジュリアン法概要ニ包括セラレ
タルジュエスチニア憲法ハ當時尙ホ分明ニシテ援引セラレタルコトア
リシヤ否ヤ亦世ノ大ニ論ズル所ナリ

然レ尼余輩ニ在テハ此ノ如キ疑問ヲ窮査スルコトヲ要トセズカズス
グドサウキギニラフエリニールトロ、ン諸氏ノ如キハ尤モ之ヲ痛論
スト雖モ余輩ニ於テハ自カラ一定ノ講説方法アリ且ツ毫モ之ニ關
スル所ナケレバ諸氏ガ議論ハ各異ナルアルモ爲メニ意見ヲ述ブルニ

新羅馬ノ原
素及ビカノ
ン法

及バザルガ如シ

カノン種ノ根源ハ其數ニアリ

第一「ル、コデクス、カノ、ム、エクレヂエ、ユニウエルセ」是レナリ即チ

ニツセコンスタンチノブルエフエーズガルセドワースノ僧侶會

議ニ於テ決議スル所ニシテ希字ヲ以テ記載シタリシガ紀元四百

年代ニ於テ聖レナン法王羅句語ヲ以テ翻譯セシメタル者ナリサ

ルヂク僧侶會議ノ決案モ亦此中ニ在リト云フ

第二「ルコルビユス、カノ、ン」或ハ「ウニチニス、コデクス」ト云フ者

即チ「エクレヂエ、ロマチ」ハ第五世紀ノ末年ニ於テ僧官ドニース、ル

プチーノ蒐集スル所ナリ其後二百餘年ヲ經テ法王安ドリアンノ

之ヲシヤル、マーギニユ王ニ寄贈スルニ及ンデ始テ佛國ニ普行シ

遂ニ哥爾寺院ノ成典トナレリ降テ聖ルイ王ノ世ニ至リ其僧侶法

テ領布スルニ當テ之ヲ用ヒ第十四世ルイ王ハ之ガ再刊行ヲナサシメタリト云フ

「イザドール、ビサウキール」ノ名ヲ以テ八百三十六年ヨリ同五十七年迄通行シタル偽「デクレタール」王ノ指令ノ如キ者ハ法ノ如キ者ハ縱令ヒ勢カチ及ボスト少ナカラスト雖死余ハ之ヲ叙述セザル可キナリ蓋シ此「デクレタール」ハマイヤンヌノ僧官ニシテ嘗テ「カビチユレール」ヲ偽作セシブノハ、ノ作爲ニ出ヅル者タルカ如シ

此根源ノ詳細ヲ知ラント欲セバ「ラフエリエール」氏所著羅馬佛國法律史ヲ考閱ス可シ

同時ノ諸法ハ既ニ述論セリ今其諸法ハ刑法ニ於テ各權カアリシ者乎「サリアン」法ハ「フランクサリアン」リビユエール「法」ハ「リビユエール」人「エソベツト」法ハ「ブルゴイギ」ユ人羅馬法ハ「哥羅人」哥羅人ヲトハ哥羅人馬人ヲ云フ以下

之ノミノ遵守セシ所タリシ乎

此疑問ヲ能ク領得セント欲セバ既往ト當時トニ就テ詳明セザル可カラズ

夫レ民事ニ付テハ第五世紀ヨリ第十一世紀迄ノ法ハ全ク隨人ノ性質アリタリ故ニ「フランク」人ハ「フランク」法「ブルゴイギ」ユ人ハ「ブルゴイギ」ユ法「哥羅人」及ヒ諸僧侶ハ其種族ノ苗裔ヲ論ゼズ皆羅馬法ヲ遵奉シタリ而シテ若シ異種族ノ間ニ於テ争訟ノ起ル「アラハ」被告人所屬ノ種族ノ法律ニ據テ斷決シタリト云フ

民法隨人ノ主義ハ刑法ニ於テモ亦其權カヲ同フスル乎吾國今日ノ刑法ハ特殊ノ性質トシテ地限ノ性質アルガ故ニ其唯國民ヲ統制スルノミナラズ凡ソ佛國疆内ニ在ル者ハ故國ノ如何ヲ論ゼズ皆之ニ由ラザルヲ得ズ是レ民法第三條ニ掲グル所蓋シ外人ノ吾國ニ在ル者ハ吾刑

法ノ保護スル所トナレバ其爲ス所ノ事件ニ於テモ亦之ニ準據セザル可カラズ

此地限ノ主義ハ第五世紀ヨリ第十一世紀ニ至ルノ間ニ於テ之ヲ施行スルコトヲ得タリシ乎抑何ヲカ地限ノ法ト謂フ

「サリアン」「リビエール」「ブルジョーギ」ユ及ヒ羅馬ノ四同時ノ法ハ當時ニ在リテ其行ハル、所ニ於テ一定ノ區域ナル者ナク唯混亂並行シ羅馬種ノ如キニ至テハ諸種ノ内其混入セザル者ナカリキ

又縱令ヒ地限ノ主義ヲ施行スルコトナキモ隨人ノ主義ハ實施スルコトアリシ乎若シ被害人及ビ犯罪人ニ於テ其種族ヲ同フセシトハ其各自種族ノ法律ニ照準シタルハ明カナルモ兩造ノ種族各異ナルニ於テハ如何ナル法律ニ據ル可キ乎被害人ノ法律ニ據ラン耶是レ民法上定ムル所ノ主義ニ悖戾スルナリ蓋シ民法上定ムル主義ハ被告人所屬ノ種族

ノ法律ニ依リシト雖厄今論ズル所ノ如クシテ原告人ノ法律ニ據ラザルヲ得ズ然ラバ則チ犯罪人所屬種族ノ法律ニ據ル可キ耶是レ被害者ニ於テ自カラ犯ス所アリシト違奉ス可キ法律ノ擁護ナル者ナキナリ斯ノ如キ結果ヲ致ス者果シテ至當トセン乎抑自國ノ人民ニ非ザル者即チ外國人ニ對シテハ如何ナル刑法ヲ適用シタリシ乎

此問題ニ於テハ古ヨリ未ダ良説ヲ聽カズ識者モ亦詳論スル所ナキ者ノ如シ獨リド「サウサギ」氏其中葉羅馬史ニ於テ此議論ヲ起セリ其主要トシ論ズルノ言ニ曰ク犯罪ニ因テ負フ所ノ賠償ハ被害者ノ身分ニ隨フテ確定セリト是レ民法ノ規則ヲ犯ス者タルヤ明カナリ民法ノ規則ニ隨ヘハ少ナクモ第十世紀迄ハ被告人ノ法律ニ準據セザルヲ得ザリシナリ

然レモド、サウギギ一氏ハ又「サリアン」法ノ條目ヲ舉示セリ此條目ニ據
 レハ羅馬人「フランク」人ニ對シ盜罪ヲ犯セシトハ罰金六十二「ソリジ」
 貨幣ニ處シ「フランク」人羅馬人ニ對シ盜罪ヲ犯セシトハ罰金三十「ソ
 リジ」ニ處シタルガ如シ
 故ニ「サリアン」法ハ或ル場合ニ於テ被害人ノ身分ニ依リ又他ノ場合ニ
 ニ於テハ犯罪人ノ身分ニ依リテ適用シタル者ト爲ス可シ
 ギヅト氏ハ刑法ニ於テ隨人ノ主義アリシトスレモ余ハ之ヲ然リトス
 ルヲ得ズ彼ノ契約程式ハ契約上ノ推測ニ於テ必須ナル結果タルヲ
 以テ隨人主義ニ據リテ之ヲ規定シ又此主義ニ據リテ親族及ビ所有權
 ナリテ相續ノ順序ヲ規定スルガ如キハ是レ目的ノ土地ヲ奪略スル
 ニ在リテ民生ヲ廢滅スルニ在ラザル攻征ニ於テ當然ノ事タル可シ
 余ハバルドツシユー及ビブライギユヌタンチエリ一兩氏ノ如ク諸種族

ノ各法ノ外一般普通ノ法律ナル者アリテ其種族ノ如何ヲ問ハズ凡ソ
 其地ニ住スル者ヲ統制シタリト信ズルナリ
 戰勝者其許ス所ト禁ズル所トヲ定ムルニ付キ戰敗者ガ法律ニ從フ
 ハ決シテ之レ無ガル可キナリ
 是故ニド、サウギギ一氏モ亦自カラ信認スル所アリ謂テク「カピチユ
 レール」ノ内一般普通ノ性質ナル者アリシヤル、マ一ギニユノ世ニ於ケ
 ルガ如キ實ニ種族ノ如何ニ拘ハラズ全帝國ニ適用シタル者アリ而シ
 其他ノ者ハ特別ノ性質アリ某法ニ屬シ或ハ某法ヲ變換シタル者アリ
 ト
 其特別ナル諸法ノ上ニ在ル所ノ此法律ハ如何ナル者ヲ謂フ乎是レ攻
 略當初ノ法律ナリ「サリアン」法即チ固有ノ法律ナリ蓋シ「カルロウハ
 シアン」朝ハ日耳曼人ガ第二ノ來寇ニ因リ王位ヲ得タルト明カナル時

ハ其第二王家ニ在リテハ則チ「リビユニール」法タリシ者ノ如シ
 然ラバ則チ何故ニ刑法ニ係レル他ノ法律ヲ前ニ論ゼシ乎其故ハ第一
 被害人ト犯罪人トハ共ニ同種族ニシテ其事苟モ政府ノ大權ヲ侵害セ
 ザルカ或ハ之ヲ罰スルトモ政府ノ大權ニ於テ極メテ直接ナル利益ナ
 シトセシ以上ハ右ノ法律ニ據テ處斷セシ「フ信ズル」ニ足レバナリ第
 二其特別ナル諸法ハ吾佛國法典ヲ成セシ者ナレバナリ
 之ニ由テ是ヲ觀レバ彼ノギ「グー」氏カ心膽ヲ挫ヒテ「日耳曼」舊例中至良
 ノ者タリト（續令其源法ニ就テノミ云フモ）證明セシ「ブール」ゴ「ギ」ニ刑法即チ賠償ノ
 外尙ホ施體ト無形ノ刑トチ含蓄セル此法律ハ進步ノ具トシテ幾分ノ
 影響ヲ及ボサ「バル」テ得ザル可キナリ是レ「羅馬」法及ビ僧侶法ハ總ニ僧
 侶ノ特例ニ於テノミ適用セラレタリシモ余ノ刑法ニ於テ之ヲ辨論シ
 タリシ所以ナリ

第二第五世紀ヨリ第十一世紀迄ハ如何ナル主義ニ據テ刑法ヲ施行シ
 タリシ乎即チ刑權施行ニ於テハ如何ナル主義ヲ根據トセシ乎
 刑權施行ノ主義ノ中、古ヘヨリ未ダ嘗テ變セザル者アリ又之ニ反シ或
 ハ一時ニ止マ「リ」久カラズシテ一層善良ノ主義ニ易ハル者アリ其漸ク
 變更スル者以テ開化ニ進歩スルヲ徵スルニ足ルナリ
 其古今一定不易ノ者ハ完全ナル義務即チ要求ス可キ義務ニシテ權利
 ト並時スル者ヲ犯セバ何故ニ刑罰ニ罹ル可キヤヲ詳明ナラシムル者
 是レナリ人ハ自由ナリ故ニ責アリトハ是レ古今不易ノ原則ナリ
 一己ノ群衆ヲ論ゼズ凡ソ人ハ假令ヒ其同類自カラ求メテ責罰ニ應當
 スルアルモ如何ナル名義ニ據リ我手ヲ以テ之ヲ刑ニ處スルノ權アル
 乎是レ古來許多ノ解釋アル所ニシテ漸ク改良ニ赴クト雖モ一モ眞理ヲ
 ル者ナキモ亦未タ知ル可カラザルモノトス

回顧スルニ當初刑罰ナル者ハ民人互相ノ復讎ニシテ後群衆復讎トナ
 リ既ニシテ社會ト宗門上トノ復讎トナリ恐怖ノ方法トナリ防禦ノ方
 法トナリ公益トナリ又一變シテ正義トナレリ而シテ其正義ノ説モ亦未
 ダ今日ニ於テハ諸人一般ノ認許スル所ニ非ズトス
 此主義ノ中執レカ第五世紀ヨリ第十一世紀ニ至ル迄刑法ノ據ル所ナ
 リシ乎

今之ヲ講窮セント欲セバ先ツダシトヲノ史ヲ作ラシメタル日耳曼
 遺傳ニ溯ホラザルヲ得ズ此遺傳ヲ考フルニ日耳曼人ニ於テハ公事ニ
 係レル犯罪ノミ尋常ノ刑罰ニ處シタリ而シテ人民一己ノ財産或ハ身體
 ニ對セル犯罪ノ如キハ被害人及ビ其親族ト侵害人及ビ其親族トノ間
 ノ純乎タル私事ニ委シ決シテ一般ノ利益トシテ之ヲ罰スルヲアラザ
 リキ君主ノ威權財産或ハ身體ヲ犯シタル罪ト雖モ亦之ヲ私事トシ罰

各自復讎權
ノ制限

スルノミ夫ノ衆益集リテ大權ヲ生ズル如キノ論ハ幼稚社會ニ於テハ
 未ダ盛ンナラズ僅カニ微冥ノ間ニ見ル耳

其後時勢稍變シ政府ノ權漸ク確立スルニ及ンテ嘗テ秩序ヲ恢復スル
 ノ具タリシ私闘ノ如キハ結局却テ將來ヲ傷ケ唯秩序ヲ紊亂スルノミ
 ナラズ實ニ社會ノ改良進步ヲ妨グ可シト思惟スルニ至レリ
 然レモ法律ニ於テハ直チニ以テ私事復讎ノ權ヲ奪ハズ其主義ニ至テ
 ハ久シク之ヲ敬重シ唯數多ノ要件ヲ設ケテ之ガ限界ヲ立ツルニ過ギ
 ス故ニ初メ侵害人ノ家屋ハ犯ス可カラズトシタリモ其生命ハ乃チ
 犯ス可カラザル者ニ非ズトシタルヲ以テ被害人ノ親族ニ於テ仇ヲ報
 スルヲ得タリ然レモ侵害人己レカ家ニ在ルモハ之ヲ襲撃スルヲ
 得ズ預謀スルヲナク此規則ヲ犯ス者ハ侵害人ノ身體一己ノ價格ニ均
 シキ罰金ニ處セラレ預謀シタリシ者ニハ其價格ノ九倍ヲ徵収セリ

侵害人家屋ニ在ルノ外尙ホ法律ニテ之ヲ犯ス可カラズトシタリシ一
 定ノ公同地アリ寺院市場ノ如キ是レナリ中古大ニ行ハレタル逃難所
 (按逃難所ハ多クハ寺院ニシテ一且茲ニハ即チ之ガ爲メニ起シ入ルル所ハ決シテ犯ス可カラズトセリ)
 或ル場所ニ於テ復讎ヲ禁シタル上又法律ハ或ル時日ニ於テ之ヲナス
 ヲ禁ゼリ諸祭日及ビ宗門上一定ノ時期例ヘバ「アウソン」(按「耶路撒冷」)
夫時間ノ時間ノ如キ是レナリ又官吏或ハ僧侶ノ面前ニ於テ私事復讎ヲナスヲ得ザリキ
 私讎ノ區域斯ノ如ク漸次ニ狹縮スト雖凡尙ホ未ダ足ラザルヲ以テ從
 來自由ニ私闘ヲナセシ場所及ビ時間ニ於テモ亦之ヲ禁セント欲セシ
 ニ舊習ノ骨髓ニ染入スル容易ニ復讎ノ感覺ヲ減ズ可カラズ乃チ新法
 ヲ設ケ貪財心ヲ發生セシメ以テ之ニ易ヘントセリ
 爾來犯罪ニ付テハ唯外ニ顯レタル損害ノミチ問ヒ其大小輕重深淺ニ

依リ以テ賠償ノ額ヲ定メ被害人又ハ其親族ニ於テ一己ノ復讎ヲ擲棄
 シ之ヲ要承スルヲ得セシメタリ然レモ其于犯ノ價格トシテ強テ此
 賠償ヲ承受セシムルヲハナカリキ
 此法律ハ兩造ノ中間ニ在リテ唯預定ノ和解ト言フニ過ギズ而シテ私闘
 ヲナストナサバハ其兩造ノ意ニ任ゼシ手此レギグー氏ノ其佛國
 開化史ニ於テ然リトスル所タリ
 又此法律ハ被害人及ビ其親族ヲ賠償ト私闘ト其一ヲ擇取スル爲メ
 ノミニ在ル手將々被害人及ビ其親族ノ此賠償ヲ承諾スルハ強テ侵
 害人ヲ之ヲ辨納セシメタル手
 若シ余輩ヲメ太過ナカラシメバ請フ政府ガ如何ニ干涉ノ規則ヲ施行
 シタルヲ見ヨ
 當初ハ賠償及ビ其額ヲ定ムルハ前談ノ事件ニ過ギザリシモ後世ハ官

權ヲ以テ之ヲ確定命令スルニ至リ乃チ裁判廳ヲ設ケ以テ之ヲ審判セ
リ其裁判廳ノ職務トスル者曰ク

第一 賠償辨納ノ處分

第二 侵害人ニ於テ其辨納處分ヲ執行スルヲ得ル時ハ強テ之ヲ
ナサシメ然ラザルハ死刑或ハ奴隸ノ刑ニ處ス

然レモ其裁判廳ニ訴フルト否ト自カラ裁判スルト否トハ總テ被害人
ノ權内ニ在リタリ

既ニ法律一變シ侵害ノ登時即チ犯罪現行ノ時ニ非ザレバ各自復讐
ノ權ナシトセリ

時世降テ法律稍改良シ復讐權ハ復タ全ク行フヲ得ズ而シテ彼ノ賠償
ノ法ハ侵害被害ノ間ニ於テ必ズ遵奉セザル可カラザル者トナレリ

賠償ノ外尙ホ「フレドム」ト稱スル罰金ナル者アリ此罰金ハ被害者訴フ

ル所ノ裁判廳ノ利益トナリ政府干涉ノ謝儀ノ如キ者ナリキ唯其「フレ
ドム」ナル者ハ侵害人直接ニ其裁判廳ニ納メズ先ヅ之ヲ被害者即チ原
告人ニ辨附シ原告人ハ之ヲ政府ニ納メタリ蓋シ政府ハ被害者ガ代理
人トナリテ其私事ヲ理治シタリト看做セバナリ此「フレドム」ハ世人ノ
能ク知ル所トス

政府ニ於テ定メタル賠償法ハ何ノ世ニ於テ兩造ノ遵奉セザル可カラ
ザル者タルニ至リシ乎ギ「フレドム」氏ノ論唱セル如ク纔ニ第八世紀ノ間ニ
在ル手蓋シ此主義ハ暫ク實際ヲ措クモ法理ニ於テハ早ク混入セリト
信セザルヲ得ズ

熟第六第七世紀ヲ察スルニ邦家紊亂紛擾極リ無ク法律ニ於テハ縱令
ヒ既ニ此主義ノ登録セシメタル「フレドム」モ其權力ヲ施スニ由シナキハ
固ヨリ知ル可キナリ

其然ルヤ否ヤヲ論セズ又其勢力ヲ得タル時日ヲ問ハズ抑其主義ニ於テ既ニ各人一己ノ復讐權ヲ含蓄セザルニ至リシ乎時世ノ變更刑法ノ改良社會一般ノ秩序利益ノ名義ニ據リ共同復讐ヲ以テ各自復讐ニ易ヘタル乎

犯人ヲ罰スルニ付テハ各自ノ利益ヨリ一層廣大ナル利益ノ無カル可カラズト思惟スル者當時ニ於テ固ヨリ稍其人ナシトセズト雖モ尙ホ未ダ以テ法理ノ蘊義骨髓トスルニ至ラザリキ

今日吾人ノ邦國ト稱スル者即チ人民一體ハ治者被治者ヲ以テ成ル者ナレバ往時ニ在リテハ未ダ是ノ如キ者アルヲ見ズ蓋シ其本體タル者無ケレバナリシヤル、マーギユノ試ミニ企圖セシ所僅カニ之ガ影形ヲ現ハスト雖モ而モ繼承スル者ハナカリキ

故ニ政府ノ干涉シテ侵害人ヲ罰スル者ハ唯各人ノ私闘ハ亂雜ニシテ

一定ノ規矩ナキニ因リ政府ハ之ガ爲メニ搖亂セラレノチ慮リ最強ナル力ノ名義ニ據リ之ヲ制抑セシニ過ギズ

是レ即チ君王ノ名義ヲ藉リ裁判ヲナセシ所以ニシテ其他私事裁判ナル者アリタリ此私事裁判トハ豪族僧侶ノ管理ニ屬スル者ヲ云フ蓋シ往時ニ在リテハ凡ソ大地ヲ有スル者ハ各臣民アリテ其密理ス可キ者ハ判者ヨリスレバ乃チ富資タリ財産タリ祖先以來ノ繼承物タルガ如シ古昔ハ人モ財産ノ内ニ入レリ而シテ今其私闘ヲ許セバ人員即チ財産漸ク減ズルガ故ニ之ヲ保護セザル可カラザレバナリ

當初王家二朝ノ法ニ於テハ既ニ他ノ原種ヲ混入スル如キ有ルモ各人復讐ノ意ヲ刑罰ニ含蓄スルヲ證スルニ足ル者アリ何ゾヤ證憑ノ種類是レナリ證憑ノ種類ハ審判ニ於テ大ニカアリシト云フ
侵害人其侵害事件ニ付キ爭論スルモハ證人ヲ出シテ之ガ證明ヲナサ

シムル丁ハ唯禁シラレザルノミナラズ當初ニ在テハ反テ他ノ證憑シ措テ之ヲ專用セリ然ルニ往々僞導者アリシヲ以テ終ニ證人ハ信ヲ措クニ足ラズトシ以テ之ヲ斥クルニ至レリ

又保證人ヲ出シテ以テ罪ノ有無ヲ證明シ及ビ宗教ヲ假リ十字架、燒鐵、熱湯ヲ以テ神裁ヲ仰グガ如キハ復タ用ユル丁ナク百般ノ疑議ヲ決スルニ付テハ大抵裁判上ノ決闘ヲナシタリ

故ニ政府ハ私闘ヲ禁止セズ唯之ヲ規定シタリト謂フ可シ

モンテスキウ及ビラフエリエール氏ノ説ク所ニ隨フテ「サリアン」法ニ於テハ裁判上ノ決闘ナル者ヲ許認セズトスルモ此證明方ノ漸、四方ニ横行シ遂ニ「フランス」人一般ノ慣習トナリ第二朝ニ於テハ萬事ニ付テ之ヲ行ハザルモ大概之ヲ用ヒタルハ明カナリ

之ヲ駁撃スルニ説アリ

第一 裁判上ノ決闘ハ刑事ニ於テハ勿論民事ニ於テモ最モ世人ノ信ヲ措キシ證據方タリシガ故ニ下ノ如ク決定セザル可カラズ曰ク第五世紀ヨリ第十一世紀迄ハ裁判ヲ乞フ者ハ其求ムル所ノ裁判ニ付テ屈指ノ達人ヲレバ大概力ニ決スル裁判ヲ行ヘリト

第二 七百八十九年ニ於テハ「カピテユレール」ナル者設定セラレ又八百十九年ニ於テハ「ルイ、ピエール」ノ「カピテユレール」制定セラレタルヲ見レバ晚クモシヤル、マーギユノ世ノ初年ヨリシテ從來私事視タルノ刑罰モ亦裁判廳ノ吟味ヲ經テ之ガ命令ヲ受ケタル可シ然レバ則チ其刑罰ニ於テハ被害者私益ノ外尙ホ他ノ利益ノ之カ基本トナリシト瞭然タル者ノ如シ

前説ニ答フ

今論ズル所抑、何チ決定セントスル乎ニツノ者即チ賠償法ノ未ダ設ケ

ラレザル前ニ當リ刑罰タリシ各自復讎ト後世ニ及テ確定セシ公衆復讎ト其孰レカ第五世紀ヨリ第十一世紀迄ニ刑罰ノ主義ヲリシ者乎是レナリ

若シ復讎ノ義ハ此ニ叙述スル所ノ時期及ビ其前後ニ於テ刑罰ノ基本タリシナレバ第五世紀ヨリ第十一世紀迄ハ各人其力ヲ用ユ可キノ時ナリト論定スル者ハ是レ被害人ノ利ハ他ノ利ヨリモ重ク且ツ各人復讎ニ於テハ制限セラレ規定セラレ之ヲ廢止セザルモ其レチノ超過スル所ナカラシメタリト論定スルニ異ナランヤ

殊ニモンテスキウモ既ニ注目セシテアリ曰ク裁判上ノ決闘ハ當初刑事調査ニ於テノミ用ヒシ所ノ證據方ナリ其後民事訴訟ニ於テ之ヲ假用シ終ニ一般之ヲ用ユルニ至リシナリト

余又曰ハシトス後世宗門ノ盡力ニ因リ裁判上ノ決闘衰フルニ至ラハ

其必ズ刑事ニ止マリ而シテ重大ノ事件ニ非ザレバ復タ用ユルヲ無カル可キナリト

若シ裁判上ノ決闘チノ唯刑罰ノ器具タラシメバ何ゾ當時ニ於テ刑罰ノ主義トスル所ヲ發生セシムルヲ無カラシヤ

第二ノ駁撃ニ付テハ第五世紀ヨリ第十一世紀ニ至ルノ間ニ於テハ各自復讎ノ義ノ外他ノ原因移入シ就中罰金ヲ利スルノ意又其場合ニ因テハ争擾ヲ鎮壓スルノ必要タリト云フチ以テ刑罰ヲ結成シ之ガ基本トナシタル如キハ余固ヨリ之ヲ抗論セザルナリ

然レハ公罪ト看做サバ者ノ訴訟裁權アル者ノ權内隨意ニ在リテ決シテ之ヲ必要トセザリキ又其注目ス可キ所ハ純手タル私益ニ出デザル此訴ニ於テハ若シ證人ナキ時ハ保證人ガ誓ノ證ヲ用ヒ裁判上ノ決闘ノ如キハ之ヲ實際ニ行ハザリシ是レナリ則チ勇氣腕力ニ訴フル裁

判ハ各自復讎ノ義ト相連貫スル知ル可キナリ
 又公訴ハ臨時補助ノ訴ヘニシテ尋常規定ノ訴ヘニ非ズ蓋シ被害人或
 ハ其親族其權ヲ行ハザル時ノミ官ニ於テ調理スル所アリシナリ
 古ヘノ奇事法律ヲ蔑視セザル者ハ宜シクシニグスウルトル氏カ著書
 中復讎賠償誓神裁判上ノ決闘ノ部ニ就テ四目次ヲ考閱スヘシ
 或罪ニ付キ定メラシタル賠償即チ刑アルニ因リ超越ス可カラザル例
 外法ヲ設ケタルハ是レ既ニ社會復讎ノ義ニ向フノ進路タル亦疑フ可
 カラザルナリ
 余ノ唯深ク信ズル所ノ者ハ各自復讎ノ義ナラザル他ノ原因ハ補助一
 時ノ勢力アルノミニシテ刑罰ノ普通根本タル者ニ非ザル是レナリ
 余ハ獨リ信ズ當時ノ刑法ハシロセンノ當テ言フ所ヲ以テ主本トナセ
 シトテ曰ク性法ニ二者アリ曰ク自己防衛權曰ク自己復讎權ト

第十一十二
 世紀及ビ第
 十三十四十
 五世紀

第十一十二
 世紀

刑法ノ新性
 質

第三章 緒言

此章ニ於テハ二期ヲ並セテ刑法史ヲ論ゼシト欲ス二期トハ第十一、十
 二世紀即チ封建期及ビ第十三、十四、十五世紀即チ一時ノ改革ト稱セシ
 期是レナリ

先ツ初メ第十一第十二世紀ニ就テ之ヲ叙論セシ今二問題ヲ設ク

一ニ云ク第十一第十二世紀ニ於テハ刑法ノ根原如何

二ニ云ク如何ナル主義アリテ此根原ヲ誘發シタル乎

此二世紀間ハ一般法律及ビ特別法律ノ歴史ニ於テ甚ダ緊要ナル者ニ
 シテ之ヲ分テ三トナス而シテ其第一ノ者ハ大緊要ナルニ非ザルガ如シ
 第一 第十一第十二世紀ニ於テハ法律ノ尋常ナル根原アルヲ見ズ
 第二 刑法ニ於テ新性質ヲ生出セリ今此性質ヲ叙ブヘシ余上文ニ
 論シテ云ク第五世紀ヨリ第十一世紀ニ至ル迄ハ刑法民法各其主

緒言

義ヲ異ニシ民法ハ隨人ニシテ即チ種族ニ因テ各殊別アリ而シテ刑
 法ハ地限ニ非ズシテ種族ノ如何ヲ論ゼズ敗者勝者ヲ問ハズ凡ソ
 同一ノ政權ニ服従スル人民ニ適用セリ故ニ「メロウワンヂアン」ノ
 朝ニ在テハ刑法ハ通用法タリ征服法タリ及ビ「サリアン」法タリ也
 然ルニ今叙述スル所ノ世紀間ニ於テハ刑法ハ特別法ノ上ニ列スル一
 般ノ法律ニ非ズ隨人法即チ犯人ノ種族ニ關スル法律ニモ非ズ又所謂
 地限ノ法即チ犯處ニ從フ法律ニモ非ズ而シテ唯犯人ガ到所ニ關係スル
 者ナリ是即チ新主義ニシテ將サニ之ガ原因ニ就テ暢述スル所アラン
 トスルナリ

佛國チ分テ
 慣習法ノ地
 方成文法ノ
 地方トナス
 根源

第三 法律上ニテ佛蘭西ヲ分テ慣習法ノ地成文法ノ地ノ二部トナ
 シタル事情ノ芽萌ヲ發生セシハ乃チ此二世紀間ニ在リトス
 此新主義ノ釋明ハ之ヲ政事上ノ制度ニ求索セザル可カラズ蓋シ

主權ノ分裂

此一期ハ即チ封建期タルヲ以テ凡ソ法律制度諸般ノ封建ニ係ル
 者ヲ想見スルニ足ル者アリ

シヤル、マーギニユノ後ハ大權ヲ中央ニ集メテ以テ之テ固フスルトナ
 シ綱維紊亂王室衰頽統御ノ權ハ尙ホ僅カニ存スト雖モ全國分裂シテ
 各一國ノ形ヲナセリ

「アル」チ領スル者ハ初メハ政事上ノ管制ヲ除クノ外全ク負擔ヲ免レ
 タル土地ヲ有スル者ニテ「ベテフ」トス「アル」トス皆領地ノ名稱トシテ
 ス又定期間或ハ終身ノ讓ヲ受ケタル土地ヲ有スル者ニテ或ル條件ニ
 從ヒ讓授シ一定ノ義務ヲ盡ス以上ハ相續ニ因テ之ヲ移轉スルヲ得
 タル者アリ官吏ノ如キハ其委任サレタル行政權ノミヲ有スルニ過ギ
 ザリシモ時世ノ推移スルニ隨ヒ漸ク其名義ヲ擴張シ其性質ヲ變易シ
 各威權ヲ地方ニ樹テ王室ヲ輕クシ國權ヲ侵シ遂ニ僭シテ主權ヲ立テ

以テ其土ニ屬スル所ノ人民ヲシテ己レガ臣屬ノ如クナラシムルニ至
レリ

蓋シ王室ハ人民ヲ主トシ土地ヲ從トシ以テ理治スルヲナク却テ土地
ニノミ偏倚シタルヲ以テ斯ノ如ク分裂ノ形ヲナスニ至リシナリ九
百八十七年ノ王朝ノ變更カペシアン朝即チ第三ハ乃チ此革命ヲ助成
シ確保シタルニ外ナラズ

佛蘭西侯ハ侯トハ佛蘭西州ト云フガ如キ大地ヲ其臣屬ニ推尊セラル
テ王位ニ昇レリ其他ノルマンディー侯ブルゴーギニユ侯ブルターギニユ

侯アキテーヌ侯ガスゴーギニユ侯ロレーヌ侯モ亦其臣屬ニ推尊セラル
テ君主ノ位ニ即ケリ此六諸侯ハ佛蘭西侯ト其勢威ヲ同フセズト雖モ
權力ニ於テハ平等アリシ者ナルガ王家ノ存スルハ己レニ於テ必要ナ
ルヲ以テ其即位ヲ責ムル者ハナカリキ諸侯ノ意以爲ラク全國分裂制

度一變郡邑各君アリ之ヲ統治スル者アルヲ欲セザルモ之ニ冠トシ國
君タル者ハ無カル可カラズト當リ邦家系絶益甚ク言アリ云ク長時ニ
臣主其權ヲ專ニシ子男ノ如キモ威ヲ獲昔日アキテ微ニタル門地モ高
之ヲ知何トシモパン能ハザリシト雖モ然レモ無上ノ位ヲ比ニ非ズル者モ亦
聊カ當世ヲ益スル能ハザリシト雖モ然レモ無上ノ位ヲ比ニ非ズル者モ亦
至リシ者誰カ以テ不可ナリト言ハル諸侯ニ於テ能ク之ヲ爾後其自カ
等大ニスト雖モ威ノ等シカラザル諸侯ニ於テ能ク之ヲ爾後其自カ
非ズタルト

七侯領ノ地各分テコンテウキコンテトナシウキコンテ又之ヲ小別セ
リ

寺領ニエニシエアベイ皆領地ノ別アリ亦封建制ニ入ル者ニシテ其
所有者ニ於テモ尊長卑屬ノ等級アリ

稱セシ真正ノ平民タルヲ論ゼズ皆此封建ノ制内トナス而シテ此諸種平民ハ或ハ羅馬時代ノ「ミユニシハリテ」郡邑ノ如キノ苗裔ナル者アリ主侯ヨリ特別ニ權利ヲ受ケタル者ノ子孫ナル者アリ又ハ叛旗ヲ樹テ「シヤルト」ナル法令ヲ受ケテ其分限ヲ許認セラレタル者アリ斯ノ輩ノ如キ概テ諸侯僧侶ノ附屬者タリキ

一國分裂ノ結果

一國主權ノ此ノ如ク分裂散亂シタルニ付キ三ツノ者ヲ詳明ス可シ

- 其一 此一期間ニ於テハ尋常ノ法律根源ナル者ハナシ
 - 其二 當時適用ス可キノ刑法ハ犯人住所ノ法タリシ規則
 - 其三 後世佛蘭西ノ分レテ成文法ノ地慣習法ノ地トナリシ規則
- 第一 主權ノ分裂散亂シタルニ付キ尋常ノ法律根源ナル者ナキヲ説明ス
- 是時主權ノ狭小ナル隸民ノ接近スル以テ成文法ヲ要セザリキ蓋シ

無智ノ官吏裁官ニシテ其任ハ一般ノ法律ヲ適用スルニ在ルルハ其或ハ迷誤セントテ恐レ之ヲ掲載明示シ以テ據ル所アラシム可キニ時勢此ノ如キニ因リ此等ノ事ヲ要セザリシナリ而シテ裁判權ノ區域モ亦隨テ狭小ニシテ唯所有權ノミニ屬シ立法者ハ土地所有人ニシテ裁官モ亦土地所有人ナリ乃チ裁判ハ土地所有ノ義務ナリキ

分裂ノ各地一トシテ裁廳アラザルナク或ハ小邦一裁廳アリ或ハ大國數ヶ所ノ裁廳アリ而シテ法律ナル者ハ古來ノ慣例ニシテ君主ノ獨斷ヲ以テ縱カニ變換シタル者ニ過ギズ

成文法ハ唯當時ニ在リテ必要ナラザルノミナラズ君長ノ統御ニ於テハ蓋シ障礙スル所アリシナラン又何故ニ封建制ニ於テハ古來ノ慣例遺傳ニ之レ據リ其範圍ノ外ニ出デザル乎ト云ハシ其慣例遺傳ノ通義骨髓ヲ遵守スルニ足レリトスル所アレハナリ

且人爲ニアラザルノ習俗ハ日チ積ミ月ヲ追フテ成例トナルトアルモ
 綱紀陵夷ノ世人以テ意トセズ緩漫ニ放チ衰頹ニ委シ決シテ進歩スル
 トナケレバ又之ヲ登録セントスル者ナキ明ケシ
 又縦令ヒ當時ノ法律ヲ編纂スル者アリト雖モ其目的タル舊規古例ヲ
 採録スルニ在ラズ人爲ニ係レル變更改正ヲ挿入セシヲ以テ古來ノ
 眞面目ヲ考究スルニ由ナキナリ
 是ノ故ニ封建ノ世ニ在リテハ全ク固有ノ法記載ノ法ナキ知ル可キナ
 リ唯其歴然今日ニ觀ル可キ者ハ平民ヲ認許セシノ法令一アルノミ此
 平民ヲ認許セシノ法令中刑法ノ原則タル者甚ダ多ク彼ノ現行犯ヲ除
 クノ外ハ犯人住所ノ裁廳ニ於テ其法律ニ照シ之ヲ處斷スル根源法ノ
 如キ即チ此中ニ在リ此原則ハ後世一千二百年ヨリ同五百年迄ニ王ノ
 家法學士ノ爲メニ左右セラル、所タリ

封建法

然レ凡刑法及ビ其他ノ法律ニ付キ封建法ノ眞面目ヲ表出シ完全完備
 遺ス所ナキ者ハ却テ外國法ニ在リノルマン人ノ英國征略ゴドフロア
 ードブイヨンノシエルザルム討征ノ後編纂登録シタル者は是レナリ
 蓋シ封建法移リテ英國及ビ東方東方トハ即チシエニ入り漸ク傳播ス
 ルヤ其依據スル所ノ根源法ノ缺ク能ハザルヲ以テ之ヲ蒐集登載スル
 ノ必要タリシガ如シ

レイス、グ
チユニ

其果シテ然ルヤ否ヤテ論ゼズギユイヨムル、コンケランノ法ハ一千
 六十六年ヨリ一千八十七年迄ニ佛蘭西ノルマン二國ノ語ヲ混語ヲ以
 テ登録セラレ法律慣例ノ稱ヲ受ケタルハ信然ス可キガ如シ

シエリユザ
ルムノアツ
ミーズ

シエリユザルムノアツシーズ法典ハ一千九十九年ヨリ一千百八十七
 年間ニ登録セラレ其官集法令ハサラデシエリユザルムヲ陷落ス
 ルニ當リ不幸ニ亡滅シサンシヤンダーシュル法典ノ纂集ハ大率フキ

コンシエ
チユシエ
ブドロム

ノルマン
度ノ制

リツアドナウワール及ビジャンギブランノ手ニ出ヅル所ニシテ一千二百五十年ヨリ同六十六年ノ間ニ成レリ然レモ亦第十一世紀及ビ第十二世紀ノ遺傳習俗ヲ採録セシ者ニ過ギザルナリ
其他全ク外國ニ係ル者アリ之ヲ「コンシエチエチエチエ」ト云フ蓋シ一千百五十八年ヨリ一千百六十八年迄ノ「ロンバルディー」ノ封建制度ノ諸規ヲ纂集シタル「コルピユスシエリス」ノ後ニ出ヅルト云フ又第十一世紀及ビ第十二世紀間ノ狀勢ヲ詳悉セル固行ノ法無キニ非ズ此法ハ第十三世紀間ニ編纂セラレタル者ニテ分テ四類トナス
其一 ノルマンジー裁廳ノ憲制慣習典章決議是レナリ此憲制ハ何時ニ起リシヤトハ諸說紛紜タル所ナリ
其典章ハ一千二百三十四年ヨリ同三十六年迄ニカンフワレーズ及ビハイユーニ於テ蒐録セラレタル者ナリ

ビエルト
ホンテ
メ

聖路易王ノ
憲章

ホーウ
ホリ
法

ノルマンジー裁廳ノ決議ハ一千二百七年ヨリ一千二百四十五年迄ニルアンカン及ビフワレーズニ於テ斷案セシ者ニ係ル此諸集ハ皆佛蘭西古語ヲ以テ登錄セラレ一千八百三十九年ニ至リテマル
ミエー氏之ヲ世ニ公ニセリ
其二 ビエルトフホンテメノ其知人及ビ他人ヲ教諭シタル書此書ハ一千二百五十四年ヨリ同七十年迄ニ世ニ出デタリト云フ
ビエルトフホンテメハクレルモン府法官ニシテ聖路易王ノ世
檢査官タリ
其三 聖路易王ノ憲章此書ハ寧ロ其抜萃ト謂フ可キ者ニテ之ガ全部ヲ蒐集シタル者ニ非ズ一千二百七十年ニ出デタリ
其四 ホーウホリノ慣習法乃チフサリツブドホーマノワールノ編述スル所ニ係ル一千二百八十三年始メテ世ニ公ニシ一千八

百四十二年ニ至リブーギニヨ侯更ニ之ヲ刊行セリ以上第二第三
第四ノ書類ハ固ヨリ封建法ノ眞面目ヲ表出スル主旨ナキヲ以テ
其純粹ナル者ヲ窺フニ足ラズ蓋シ各編纂者ハ學術上ヲ眼目トナ
シ羅馬法ノ餘習ヲ帶ビテ之ヲ類聚シタルガ故ニ往々變更校正シ
タル者アリ

ジュヌチニ
アン法典

「ジュヌチニアン」法典ハイベード、シヤルトル及ビペトリユスノ書ニ言
フ如ク必ズ當時全佛國ニ行レタルナランイベードシヤルトハ彼ノル
マンチーニ在テ教育ヲ監督シ大ニ名ヲ獲タルランフランノ門人ナリ
此二書ハ佛國律學ノ方針ニシテラフエリエー氏ノ言シ如ク「ボローギ
ニユ」派ノ宗タル者歟

カノン法

「カノン」法モ亦此一期間ニ於テ一部ノ書類アリ一千百五十一年グ
ンノ纂集セシ指令録是レナリ又之ヲ誥命ト云フ

何故ニ犯人
ガ住處ノ法
律ニ照シテ
シテ處斷タ
リシ乎

第二 余上文ニ主權ノ分裂散亂シタルヲ以テ現行犯ヲ除クノ外ハ凡
ソ犯人ハ其住所管轄裁廳ニ於テ其法律ニ依テ處斷ス可キ規則ノ何
故ニ刑法ニ在リシヤヲ能ク詳明スルニ足ル可シト云ヘリ又曰ク主
權ハ土地ニ從フ其土地ヲ越エレハ復々權力ナシト故ニ法律及ビ裁
判權ハ土地所有ニ因テ生ズル所ニシテ各君主ハ皆其臣屬ヲ取戻ス
ノ權ニ據リ之ヲ裁判シ其罪ノ有無ヲ決定セリ

奴ハ其主人ノ裁判ニ罹リ耕作人ハ其君長ノ處分ヲ受ケタリヒエー
ル、ド、フホンテーヌ云ク神ニ非ザルヨリハ其尊卑上下ノ間ニ裁判者
ナシト眞ニ然リ

自由ノ人民ハ左ノ如ク裁判ヲ受ケタリ平人ハ其邑ノ裁廳ニ貴族ハ
其長上ノ貴族ニ罹リテ之ガ處分ヲ受ク但シ其長上ノ貴族ニ於テ裁
判スル時ハ其直臣即チ被審者ト同位ノ者數人ヲ參座セシメタリ而

ノ國君が隨人法ヲ施行スルニ於テハ種族ノ如何ヲ問ザリキ
 第三 余又前ニ論シテ云ク主權ノ分裂散亂セシヲ以テ後世國內ノ分
 レテ慣習法ノ部○成文法ノ部○トナリシ所以ヲ詳知スルニ足ルト封建
 ノ世各地遵守スル所ノ慣例中其種族ノ衆寡盛衰ニ因テ多少日耳曼
 或ハ羅馬ノ餘習ヲ帶ブル者アリ故ニ北方ハ大抵日耳曼ノ慣例ヲ履
 ミ南方ハ哥爾羅馬ノ風習ニ據ル是ヲ以テ後世北方ヲ慣習法ノ部ト
 ナシ南方ヲ成文法ノ部トナスニ至レリ
 此一期間ニ於テハ大概何ナル主義ヲ以テ刑法ニ施ス乎曰ク賠償主
 義是レナリ此主義タル元來各自復讎ノ義ニ基ク者ナリト雖モ既ニ
 其義ヲ壓止スルノ第一着ニテアリキ然レ厄其酷ニ涉ルノ甚シキ漸
 ク將サニ亡滅セントスルノ勢ヒアリタリ
 叛逆及ビ背信ナル稱ヲ下セシ重罪ハ即チ封建ノ制度ニ對シ犯シタ

第十一世紀
 第十二世紀
 世紀迄ノ刑
 法ノ主義

ル罪ニシテ處スルニ死刑ヲ以テシ且「コンミーズ」ノ名義ヲ以テ領地
 ノ全部若クハ其幾分ヲ沒収セリ領地ハ即チ犯法ノ源クンハナリ「コ
 ンミーズ」刑ハ特別ノ者ニテ實ニ封建制ニ於テノミ行レタル所ニシ
 唯死刑ニ屬スル附加刑タルノミナラズ或ハ以テ主刑トシタル「ア
 リ封建制ノ義務ニ對シ稍輕小ノ罪ヲ犯セシ者ハ罰金ニ處セラレタ
 リ
 謀殺強姦誘拐放火盜取隱藏ノ罪ハ概テ死刑ニ處シタリト雖モ直接
 ノ君長及ビ國君ノ制可アリテ被害者ニ於テモ承諾スル時ハ死刑ニ
 易フルニ財貨ノ刑即罰金ヲ以テスル「ア」得タリ輕小ノ罪ヲ犯ス者ハ
 償金ヲ出シテ被害人ニ給付シ且ツ罰金ノ刑ニ處セラレタリ
 ナルトラン氏以爲ラシ是ノ時君主復讐ノ主義ヲ以テ各自復讐ノ主
 義ニ易ヘタリト然レ厄君主復讐ノ主義ハ決シテ一箇特殊ノ主義ヲ

成ス者ニ非ズ又包括主義ヲモ成スニ至ラズト思惟セシムル者アリ
何ゾヤ源由ニアリ

一ニ云ク裁判上ノ決闘ハ依然尙ホ存ス

二ニ云ク求刑ノ權ハ被害人ニ在リテ被害人ハ刑事ノ訴ヲ擅マ、

ニスルヲ得裁判官ノ檢査ヲ經テ官ヨリ訴フル如キハ却テ例外ト

ナシ又此訴モ被害人ノ訴ナキ時ニ非ザンハナサズ

以上ノ事實ニ據テ之ヲ見レバチルトラン氏ノ説ハ信ズ可カラザル
ナリ

以下第十三世紀ヨリ第十六世紀迄ニ就キ論ズ今又左ノ二問題ヲ設ク

一ニ云ク第十三世紀ヨリ第十六世紀迄ノ刑法ノ根源ハ如何

二ニ云ク如何ナル主義アリテ此根源ヲ誘發セシ乎

第一 先ツ此一期間ニ於テハ政事上ノ變遷如何ヲ論ゼン

第十三世紀
ヨリ第十六世紀
迄ノ一

政事上ノ變
遷

回顧スルニ前一期ニ於テハ全國分裂封建ノ制盛ンニ行ハレ各地其
法制ヲ異ニシタリキ

今ヤ局面一變全國混一政權寢ク將サニ一ニ歸セントスルノ情勢ヲ

論ゼン封建隆盛ノ時ニ際シ諸侯同意シ「カベシアン」王朝ヲ立テタリ

諸侯ノ意以爲ラク此レ唯我同列ノ無上ノ位ニ充ツル耳ト然ルニ第

十三世紀ノ初メヨリシテ王家ハ古體ヲ回復スルノ意アリテ復タ曩

ニ約スル所ヲ履マズ羅馬法ノ舊規舊例ニ頼リ漸ク其權力ヲ大ヒニ

シ其職掌ヲ擴メ以テ當時ノ成規ヲ越ルノミナラズ却テ自家ニ維持

ス可キノ任アル封建制度ニ悖戻シ全國ノ力ヲ致シテ之ヲ中央ニ集

メ以テ混一兼併セントシ乃チ一國ノ大本タル社會秩序ノ確立ス可

キノ門戸ヲ開キ鎮撫綏靖等々以テ公益公利ヲ興ス可キ情勢ヲ表示

セリ

其政權ヲ集合シ全國ヲ混一スルニ付テ試ニ爲シタル所ノ公同ニ係ル者ハ曰ク上等裁判廳曰ク大民議會曰ク豪族會是レナリ

第十三世紀以前ニ在リテハ二名義ヲ以テ大官廳ヲ王家ニ屬セシメタリ其第一名義トハ王ハ佛蘭西侯ノ領地ノ臣屬即チ其直臣ノ君タリ其第二ハ王ハ大臣即チ諸侯ノ領地タル大地チ有スル者ノ君タル是レナリ

然リ而シテ其舊官廳ハ王家之ヲ改革シ委スルニ爲政、行法、司法ノ三權ヲ以テシ「パル、マン」ノ名稱ヲ附シタリ
「パル、マン」ノ司法權有ルヤ凡ソ封建制度ニ關スル事件ハ勿論其他重大ノ事件ニシテ控訴ヲ要ス可キ者ハ皆之ヲ審理セリ其爲政、行法ノ權アル幾ンド一議會ノ如キ者ナリト雖モ之ニ諮詢スルト否トハ常ニ王家ノ權ニ在リタリ

此二個ノ性質タル「パル、マン」ノ久シク保有ス可カラザル者ナレバ幾クモ無ク遂ニ分レテ二個ノ官廳チナスニ至レリ其行法ニ係レル者之ヲ王ノ元老院ト云ヒ其司法ニ係レル者ハ「パル、マン」ノ舊稱ヲ保存セリ

然ルニ王ノ大臣及ビ其直臣モ亦パスキエトノ言ノ如ク鋏刃ヲ以テ文墨ニ換フル文墨ヲ掌ルヲ欲セザレバ彼ノ司法ニ係レル制度ニ付テハ務メテ之ヲ避ケ以テ學士識者ニ其地位ヲ讓レリ學士識者ハ以テ大ニ力ヲ王室ニ盡スチ得タルニ因リ王家モ亦之ヲ優待厚遇シ以テ全國ヲシテ此輩ヲ崇敬セシムルニ至レリ

第十四世紀ノ初年ニ及ンテ「シエテロ」ト云フ議會ナル者始メテ起リ三民即チ僧侶、貴族、平民ヲ選デ以テ其員ニ充テタリ其初回ノ招集ハ實ニ一千三百二年ニ在リ

此議會ノ設立ハ未ダ齊整完備セズト雖モ即チ代議政體ヲナスノ第一
 步ニシテ國事ト稅則トヲ議スルニ付テ起ル者ナリ初メ王室ハ稅則
 ニ付テ貴族ト議スルニ平民ヲ參預セシメタリ蓋シ當時國稅ノ改正
 ヲ要シ其直接賦課ス可キ者ノ意見ヲ問ヒシハ亦能ク下情ヲ斟酌シタ
 リト謂フ可シ其後國力増益ノ爲メ一種族即チ平民ノ等級ヲ定ム可キノ
 一大國事起レリ此國事ハ即チ平民ヲ公認シタルトニシテ王家ハ之
 ニ依頼シ以テ法王ノ威權ヲ減殺シ以テ貴族ノ僭強ヲ抑止シ其効績
 實ニ少カラズト云フミキニエー氏ノ言ニ曰ク王家ハ孤立セシ種族
 ヲ滅シ一般政府ノ爲メニ特別ナル許多ノ政府ヲ衰ヘシムト具ニ然
 リ矣

其他一大議會アリ名ケテ豪族會ト云フ此議會ハ王ノ大臣及ビ其直臣
 ナ以テ員ニ充テ且ツ著名ノ士モ王命ヲ以テ之ニ加ヘタル者ニテエ

一般法律ヲ
設ケント試
ミシ

刑法ニ付キ
緊要ナル王
命

タイシニテロート並立シ又未ダ完然備具セズト雖モ其新建公共ニ
 屬スルニ於テハエターシエテロート異ナルヲナシ

公同ニ係レル法律ヲ設爲シタルハ以上舉グル所ノ三者ニシテ而シ當
 時王室ハ幾内ニ於テハ其權力ヲ集合セズト雖モ公同秩序ノ名義ヲ以
 テ第十一世紀ニ於テハ同列タリシ其大臣ノ領地ニ漸次ニ之ヲ擴張セ
 リ而シテ諸侯ハ經驗ニ因テ始メテ名ノ無上ハ王位ヲ威權ノ無上ヲナス
 ニ至レルヲ覺知セリ

諸王命中四ツノ者ハ最モ公同ノ性質アル者ニテ即チ此一期間ノ刑法
 根源ノ内ニ入ル可シ

第一 刑事調査ニ係レル一千三百四十四年十二月ノ第六世フギリ
 ツブノ王命

第二 シヤン王幽閉ノ時エターシエテロート歎願具申ニ付キ王國

緒言

大尉即チ後チ第五世シヤル、王トナリシ者ノ一千三百五十六年三月三日ノ王命

第三 第七世シヤル、ノ世モンチールレトウールノ一千四百五十三年ノ王命

第四 第十二世ルイノ世司法上一般ノ改正及び刑事調査ニ付キ特別ニ布告シタル一千四百九十八年三月ノ王命此王命ニ於テ從來ノ「アツキユザトワール」ナル糺彈方ヲ革メ更ニ秘密糺彈方ヲ立ツ之ヲ非常調査方ト云フ

以上一般ニ係ル諸法令ハ當時ニ在リテ最モ勢力アリシ者ナリト雖モ以テ自餘ノ特別ナル者ヲ廢除シタルニ非ズ故ニ此一期間ニ於テモ彼ノ平民ニ自由ヲ與ヘタル法令ノ如キ決シテ忽諸ニ付ス可カラザルナリ

特別ナル書類

又慣習ノ如キハ成文律ノ起リシ日ヲ識別スルニ足ル者ナレバ亦之ヲ忽ニス可カラズ

一千四百五十三年四月ノ第七世シヤル、ノ王命ハ其第二百二十五條ヲ以テ未ダ登録セラレザル慣習ノ編纂ヲ命ゼリ

「パリ」ノ「パル」ノ「マン」ノ決議録ノ如キ亦之ヲ此一期ニ於テ詳審スルヲ必要トスルナリ此決議録ハ「ジャンド」ノ「モントリユク」ナル者ノ始メテ採集セシ所ニシテ一千二百五十四年ヨリ一千三百十八年迄ノ諸事件ヲ載ス「チリンム」ノ名ヲ以テ世ニ聞ヘ輓近ク「リムラツト」及ビ「ブーゴ」氏ノ從事シタル者ナリ

其他學術上依據トスル者七個アリ

其一 「ルリ」ブルドシエスチツスエトアレ此書ハ第十三世紀ノ末年佛蘭西古法ト羅馬法トヲ比較シタル者ナリ

學術上ノ書類

緒言

其二「スチリユス、パルテマンチー、イン、シユブレマ、パリジエンシ、イ
キユリア」此レハギユイヨームシユブリユイユノ編纂セル者ニテ
一千三百三十年ニ於テ始メテ世ニ公ニセリ

其三「レデシ、バラン、ド、メツシイル、シヤン、テ、マル」其公布ノ日ハ考フ
可カラズト雖モ必ズ一千三百八十二年ノ以前ニ係ル者トス

其四「巴里城舊規」此レハ一千六百九十九年ドローリニールノ刊行
スル所ニシテ聖路易王ガ憲制ノ後ニ在リトス

其五「巴里城考定一般慣例」此レハ一千三百年ヨリ同八十四年迄ノ
者ヲ總括セリ

其六「第六世シヤル、ノ大慣例集」此書ハ無名氏ノ一千五百十五年
ニ於テ始メテ刊行スル所ニシテ一千五百九十八年ニ至リシヤロ
ンダルカロン其第九次ノ刊行ヲナセリ此書其第二編ニ罪犯ヲ記

載シ第四編ニ刑名ヲ提舉ス蓋シ第五世紀ノ初年ニ係レル者ナリ
其七「シヤンブーナリエー田野ノ概狀」此書ハ第十五世紀及ヒ第十
六世紀ニ於テ數回ノ刊行ヲ經タル者ニテ第六世シヤル、ノ大慣
例集ノ後ニ在リ其浩濶ナル題名ニ似ズ數章ニ於テ刑事ニ係レル
者ヲ載ス

「カノン」法ニ依據トス可キ者四個アリ

其一 指令録補之ヲエキストラ増補ト云フ五卷ニ分ツ第九世グレン
ゴワールノ集録セシムル所ニシテ一千二百三十四年ニ係レル者
ナリ

其二 第八世ボニフワースハグレゴワール集録ノ五卷ニ一卷ヲ加
ヘ總テ六卷トナス其第六卷ヲ「セキスト」第六卷ト云フ一千二百九
十八年ノ公布ニ係ル

其三 第五世クレマンノ蒐集セシメテ第二十二世ジャンノ一千三百十七年ヲ以テ刊行シタル指令録アリ之ヲクレマンナースト云フ

其四 格別成例此集ハ第二十二世ジャンノ二十二件ノ指令及ヒ第四シキストノ指令等ヲ纂集セシ者ナリ

第二 如何ナル主義アリテ此一期間ニ於テ刑法ノ根源ヲ誘發セシ乎
第十三世紀ノ初メヨリシテ刑法ニ新精神ヲ發出シ夫ノ各自復讐及ヒ貴族復讐ノ義ノ如キハ固ヨリ未ダ全ク除却スル能ハズト雖モ漸ク自家ノ勢力ヲ養成シ鞏固ニシ以テ之ヲ滅殺抑制セリ

王領又ハ其大臣ノ領地内ニ於テ重罪ヲ犯ス者ハ之ヲ擾亂即王家ノ保衛ス可キ公同安寧ヲ害スル所業トシタルガ故ニ公益ヲ害スル名義ヲ以テ之ヲ罰セリ當時ノ風俗遺傳ニ據レバ刑罰ハ復讐ノ義ニ出ヅルト

第十四世
第五十六世
紀問ノ刑法
主義

各自復讐生
義ノ衰微

信ゼザルヲ得ズト雖モ公同復讐ノ義ノ久シカラズ盛行ス可キ徵候ヲ既ニ表顯セリ

就中此一期間ニ於テハ各自復讐ノ義ヲ消滅セリ

二個ノ事實アリ之ヲ確證ス

第一 決闘ハ從來一般ノ規則ナリシモ例外トナリ刑事ニ在リテモ左ノ場合ニ於テハ之ヲ許サハルニ至レリ

一 現行及ビ衆知ノ犯罪ナル場合

一 證人ヲ以テ容易ニ罪ノ有無ヲ明カニス可キ場合

一 罪甚ダ醜汚ニシテ犯人ヲノ兵器ニ依テ之ヲ洗滌セシムルニハ不適當ナルト例ヘバ盜罪ノ如キ場合一千三百六十六年王命

第二 罪狀ヲ訴ヘ其刑ヲ乞フ可キノ權ハ從來被害者ニ在リテ其此權利アルハ第十三世紀ノ前ニ於テハ刑罰上通常最要ノ保護ナリシト

緒言

檢事ノ制

雖モ當時既ニ其訴フル者ヲノ危殆ノ要件アラシメタリ
 故ニ若シ被告人刑ニ處セラレザルハ其訴フル者ハ被告人罪アリ
 シキノ刑ニ反坐ス斯クノ如キ威逼ヲナス者ハ是レ即チ其權利ヲ殺ス
 ナリ官ヨリ訴フル如キハ嘗テ例外タリシモ乃チ普通ノ法トナリ一
 己利益ノ範圍縮マルニ隨フテ公益漸ク其區域ヲ擴張スルニ至レリ
 右ノ如ク訴權ニ付キ改革スル所アリシニ因リ此一期間ニ於テハ又檢
 事ノ制ヲ張大ニセザルヲ得ザリキ而シテ此制タルヤ以テ之ヲ今日ニ保
 存スル者ナリ
 何ヲ以テ之ヲ設立スルニ至リシ乎君長ハ一己ノ私事ニ付テ代理者無
 キヲ得ザレバ全ク私事上ヨリシテ之ヲ設ケタル乎將々収税ニ付キ代
 理ノ無カラザル可カラザルヲ以テ之ヲ設ケタル乎抑公益公利ノ爲メ
 ニ創立シタリシ乎此レ法律史家ノ大ヒニ論ジテ未ダ其孰レカ是ナル

君主利益ノ
 上位ニ在ル
 利益ハ第一義
 第一義ハ利益
 第一義ハ利益
 第一義ハ利益

ヲ見ザル所タリ唯其尤モ判然タル所ノ者ハ公同秩序ノ爲ニ私益或ハ
 公益上ノ代理タル者ヲ設立シ裁判廳ニ附属シ官訴ノ權ヲ保有シ私訴
 ノ有無ヲ論ぜズ訴フ可キハ之ヲ訴フルノ權且義務アラシメタル是レナリ
 故ニ王家ノ諸官廳即チ「パル、マン」バイヤージュ下パル、マン者セテシヤ
ウセー下バイヤージュニ列スル者ニ於テハ王家ノ檢事ナル者アリ又諸侯裁判廳ニ
 ハ貴族ノ檢事僧侶ノ審判院ニハ起事役其職檢事アリ私益ハ復々刑罰
 ノ第一義トセザルニ因リ公益ヲ以テ既ニ其第一義トナスニ至リシ乎
 將々其第一義トスル者ハ君主ノ利益ニ在リシ乎
 君主利益ノ上位ニ在ル利益ハ其第一義タリシヲ證明スルニ足ル者四
 アリ

其一 貴族ノ長タル名ヲ以テ王家有スル所ノ封建裁判廳ハ王家之
 ナ釐革シ最上標準ノ法庭トナシ貴族ノ裁判廳ハ勿論僧侶ノ審判

緒言

院ニ至ル迄悉ク之ニ由ラシメ以テ處斷ノ何レヨリスルヲ論ゼズ
 皆之ヲ變換修正セリ是レ固ヨリ大權力ノ主義ナレバ之ヲ名ケテ
 管轄主義ト云フ故ニ王家ハ全ク諸刑事ニ付キ控訴裁判所ノ形ヲ
 ナシタルヲ以テ從來ノ訴訟ハ戰鬪ニ決シ神裁ヲ仰ギタルガ故ニ
 控訴スルニ由シナク實ニ地界ノ審判權ニ越ユル所アリシト雖モ
 右ノ如ク王家ニ於テ控訴ヲ受クルノ制ヲ設ケタルニ因リ斯ル弊
 害ヲ滅スルニ至レリ

其二 律士ニ命ジテ王事ナル者ヲ制定シ特ニ其吏員「前ニ記セル」ハ「前ニ記セル」イヤ
「前ニ記セル」長「シ」セネシヤウ「亦前ニ記セル」セ「前ニ記セル」及ビ「前ニ記セル」バル、マンニ知ラシメ
 他ヲノ窺知スルヲ得ザラシメタリ
 凡ソ王事ヲ犯セル者ハ其何ノ地タルヲ論ゼズ皆王家ノ裁判官ニ
 於テ之ヲ審判セリ

何ヲカ王事ト謂フ

王家ノ律士ハ深ク注意シ之ガ義解ヲ畫定セズ唯所謂王事ナル者
 ハ王權ヲ害シ又ハ其威權ヲ侵スト看做ス可キ犯罪ニシテ實ニ茫
 逸タル者ナリ此レ其以テ便益アリシ所ナリ

當初此罪犯ノ數ハ殊ニ僅少ナリシモ後ニ至テ漸ク其區域ヲ擴メ其
 數ヲ増シ大ニ王室ヲ資ケ諸侯ヲ制壓スルノ具トナリ王室既ニ牢
 固全勝ヲ奏スルノ日ニ及ンデ犯罪トシ復タ王事ヲラザル者ナキ
 ニ至レリ議者或ハ言ヘルヲアリ此レ貴族ガ裁判權ヲ侵スノ所爲
 ト余曰ク否ラズ此レ曩ニ分裂シタル主權ノ最要ナル者ヲ恢復ス
 ルナリト

其三 王家ノ律士及ビ法官ハ又甚ダ便ナル方法ヲ創設シ之ヲ施行
 シタリ之ヲ先審規則ト謂フ

何チカ先審規則ト謂フ

曰ク王家ハ探索ニ最モ能ク周到ナルニ付キ其管轄外ナル犯罪ト雖モ別段ニ隱秘ス可キ所以ナキ者ニシテ諸侯ノ領地ニ於テ訴訟ヲ遅延スルハ王家ノ裁廳ニ於テ處斷スル者是レナリ蓋シ以謂ラク裁判ハ王家ノ義務其最モ急ニス可キ所ナレハ惡意或ハ懈怠ニ因テ不問ニ置カレタル事件ハ王家ニ於テ之ヲ裁判セザル可カラズ又裁判スル丁チ欲セザルカ或ハ之ヲ得ザルチ以テエウホカシヨ甲ノ裁判所ニテ裁判スルチ欲セザルカ或ハナル者ノ生シヨ乙ノ裁判所ニテ之ヲ裁判スルチ謂フナル者ノ生シ來リテ慣行スルニ至レル者ハ必竟舊法律ノ缺典ナリ自王家ノ裁判廳ニ非ザレバエウカシヨ丙ノ權無カル可キナリト

其四 王家ハ數地限管轄ノ主義ニ依頼シタル丁アリシガ遂ニ之ヲ實行スルニ至レリ此事業ハ實ニ大功タリト雖モ其成ルニ迄ルノ

地限管轄ノ主義

間艱難亦甚カラズト云フ抑此規則タル原來封建制ニ牴觸スルト甚ダシキチ以テ爭亂ヲ醸ス丁ナクシテ之ガ實行ヲ遂成スルハ難キガ故ニ王家ニ於テ初メ僅ガニ得ル所アリシモ又之ヲ失ヒ既ニシテ漸ク復スルノ功ヲ奏セリ

今其規則ノ緊要ナル所以ヲ論ゼン犯人住所ノ裁廳ニ於テ之ヲ裁判セズ而シテ犯處ノ裁廳ニ於テ之ヲ處斷シタリシトハ是レ其被審人ト諸侯トヲ連結スル所ノ關繫ハ刑罰上既ニ切斷セラレタルナリ其然ル所以ノ者ハ諸侯ニ於テ其所有即チ其封建上ノ位階品等ノ權ノ結果トシテ自家臣屬ヲ裁判ス可キ權ヲ取戻ス丁チ得ザリシニ由ル

當時地限ノ主義ノ爲メニ如何ナル議論ヲナセシ乎
其說ニ云ク若シ犯人ガ住所ヲ管轄スル裁廳ニ於テ之ヲ罰スルトトセバ其近隣ハ其親族ノ影響ヲ受ケ又ハ其恩德ヲ受クル等アリテ證據ヲ

緒言

獲調査ヲナシ又諸ノ信憑ヲ求索スルニ於テ甚ダ難カル可キモ今地限
 管轄ノ規則ヲ施行スル時ハ此等ノ事ヲ容易ニシ且犯人ガ逃脱ヲ大ヒ
 ニ妨遮スル所アラント此貴重ナル議論ノ採用セラレタル者ハ乃チ一
 ニ君長復讎ノ義ヲ指テ社會復讎ノ義ニ傾向シタルニ外ナラザルナリ
 蓋シ此論ハ公同秩序ノ爲メニ封建ノ成規遺傳ヲ無ミシタルニ根スル
 ナリ

此義ハ唯事實ヨリ出デタル者ニ非ズ既ニ成文ノ在ルアリ實ニ當時ノ
 諸書ニ於テ瞭然タリ

ボーウホジョイノ慣習法第三十章ニ云ク惡事即チ犯罪數箇ナルキハ其各惡
 事ニ付キ如何ナル復讎ヲナス可キヤ云々

又云ヘルフアリ惡事ヲ制ス可キ至良ノ方法ハ即チ犯罪ノ輕重ニ從ヒ
 痛ク犯者ヲ罰シ他人ノ之ヲ鑑戒トナシ裁判ヲ懼ル、所アリテ以テ自

カラ將來ニ戒ムル所アラシムルニ在リ而シテ余輩ガ此書ヲ著セシ者自
 非ル氏ニ前ニ擧ゲタル他ノ罪惡中貴族ニ於テ最モ能ク防禦セザル可カ
 ラザル者ハ貴族ニ對シ即チ公公共共利益利益ヲ害セント同盟スル罪是レナリ
 云々

聖路易ノ憲制ニ於テハ既ニ鑑戒ヲ以テ刑ノ一基本トセリ曰ク姦猾ハ
 刑ヲ懼レテ惡事ヲナサズ而シテ淳良ハ神愛ヲ享ケント欲シテ亦之ヲ爲
 サズト

以上叙述スル所今之ヲ簡説セバ控訴、王事、先容、地限、管轄ハ即チ新主義
 ニシテ刑罰ノ係レル所タルハ余ノ確認スル所ナリトス
 又其最モ注目ヲ要ス可キ所ハ刑罰ノ主義ト政事上ノ變遷ト互ニ併峙
 シテ相離レザル是レナリ
 抑此一大事業ハ第十二世紀ニ於テルイル、グロ―之ヲ創始シフヒリツ

プ、ラ、ー、ギ、ユ、ス、ト、聖、路、易、之、ヲ、承、ク、第、十、三、世、紀、フ、ヒ、リ、ツ、ブ、ル、ヘ、ル、即、位、ス、
ル、ニ、及、ビ、テ、又、其、遺、業、ヲ、繼、キ、中、央、權、ヲ、王、家、ニ、集、収、シ、最、上、法、術、ヲ、設、立、シ、
以、テ、諸、侯、ヲ、制、抑、シ、全、國、ヲ、一、ニ、歸、セ、ザ、ル、ヲ、得、ザ、ラ、シ、ム、刑、罰、是、ニ、於、テ、
手、公、同、ノ、性、質、ア、リ、以、テ、公、共、ノ、器、具、ト、ナ、リ、社、會、ノ、全、力、ト、ナ、ル、ニ、至、レ、リ、

第四章 緒言

前、章、ニ、於、テ、ハ、全、國、ヲ、混、一、シ、中、央、權、ヲ、獲、ル、ノ、艱、難、ヲ、叙、ベ、又、王、家、ニ、於、テ、
ハ、先、ヅ、諸、侯、ヲ、制、シ、テ、其、權、ヲ、恢、復、セ、ン、コ、ト、計、リ、次、ニ、僧、侶、ノ、專、横、ヲ、抑、ヘ、
テ、其、政、權、ノ、籠、絡、セ、ラ、レ、ザ、ラ、ン、コ、ト、勉、メ、公、同、ノ、法、令、ヲ、設、テ、以、テ、其、威、
權、ノ、區、域、ヲ、擴、張、セ、ン、ト、シ、タ、ル、ヲ、論、ゼ、リ、
蓋、シ、其、全、勝、ヲ、奏、ス、ル、ニ、至、ル、ノ、前、ハ、必、ズ、ヤ、軋、轢、ト、競、争、ト、ニ、多、少、ノ、星、霜、
ヲ、經、ザ、ル、可、カ、ラ、ズ、
此、章、叙、ズ、ル、所、即、チ、全、勝、ヲ、獲、ル、ノ、一、期、間、ニ、シ、テ、余、ハ、之、ヲ、稱、シ、テ、全、勝、王、

第十六世紀
ヨリ千七百
八十九年迄
ノ期

此期ノ性質

家ノ期乃チ王命期ト云フ

第十三世紀ヨリ第十六世紀迄ノ法令ニ就テハ全佛國ニ適用スベキ一
般刑法ノ四條件ヲ舉示シタルノミナリキ
然ルニ第十六世紀ヨリ一千七百八十九年ニ至ル迄ハ刑法ニ付テハ復
タ一般ノ事件即チ王家ヨリ出ヅル所ノ法令ニ非ザレバ遭遇セザルベ
キナリ

王朝主權

蓋シ王家ハ能ク封建ヲ敗亡シ其一時ノ獨立ヲ滅却シタリ而シテハ、
マン、大、民、議、會、豪、族、會、ノ、如、キ、ハ、王、家、之、ニ、依、賴、セ、シ、ト、雖、モ、固、ヨ、リ、其、制、ス、
ル、所、ト、ナ、ル、ヲ、欲、セ、ザ、レ、バ、其、嘗、テ、器、具、タ、リ、シ、斯、ノ、諸、會、モ、亦、併、セ、テ、之、ヲ、
敗、亡、滅、却、セ、ン、ト、欲、セ、リ、
今、王、命、ニ、就、キ、二、問、題、ヲ、講、窮、セ、ン、
第一 王命ハ皆同一ノ名義ト同一ノ性質アリシ者乎

緒言

法律ニ屬スル事件

第二 王命ハ其名義ノ如何ヲ論ゼズ其權力アルニ至ルニハ必ズ、パ
ル、マン」ノ登録ヲ要セシ乎

第一 王命ヲ分テ四トス曰ク尋常王命曰ク「エヂー」曰ク「レットル、パタン
ト」曰ク「デクラ、シモン」〔解後ニ在リ〕

其一 尋常王命ハ一般ノ性質アリテ數箇ノ條件ヲ包含スル法律ヲ
云フ

其程式ハ通常初筆ニ現○今○將○來○ニ○於○テ○遵○奉○セ○ン○ト記載シ王之ニ花押シ
大宰相之ヲ検査シ蠟ヲ以テ國璽ヲ鈴印シ之ヲ封緘セリ而シ其書大率
年月ノミヲ記シ多少鄭重ノ式ヲ用ヒテ之ヲ公布セリ其公布ノ時國王
民議會ニ親臨シ其意見ヲ問ヒシ「ア」又豪族會ニ諮詢セシ「ア」又
ハ内閣侍臣ト「巴里」ノ「バル、マン」議員ノ内ヨリ選定シタル委員トノ意
見ヲ聽シ「ア」或ハ當時人ノ言ヒシ如ク毫モ此保證ナク國王ノ隨意

「エヂー」

ニテ之ヲ公布シタル「モ」アリ

其二 「エヂー」トハ特別事件ヲ規定スル法律ニテ其特別事件ハ未ダ
前ノ王命ヲ以テ規定セラザル時カ又前ノ王命ヲ廢セント欲ス
ルハ公布スル所ニシテ毒藥、破産、略取、看守盜、決闘等ニ係ル者ヲ規
定ス

「エヂー」ノ初筆ニ於テモ亦現今將來ニ於テ遵奉セント記載シ國王花押
シ大宰相之ヲ検査シ綠蠟ヲ以テ國璽ヲ鈴印シ且之ヲ封緘セリ
又其書ハ大率年月ノミヲ記載シタリ但シ或ル「エヂー」ニ於テハ黃蠟ヲ
以テ之ヲ封緘シタルモアリ又日附ヲナシタルモアリ

其三 「デクラ、シモン」ハ尋常王命ト「エヂー」トノ中間法ノ如キ者ニ
シテ即チ此二法ノ施行スベキ方法ヲ指示セル者ナリ

其四 「レットル、パタン」ハ法律トナルハ例外ニテ通常人民ニ恩典

「デクラ、シ
モン」

或ハ特例ヲ授與スルニ用ヒ終末ニ他ノ事件ニ付テハ此限ニ在ラ
 ス。又諸般ノ事件ニ付テハ他人ヲ除クト記載セリ又時トシテハ新
 條目ヲ制定シ或ハ唯條規ヲ板援シ公益ニ係レル事件ヲ規定スル
 一モアリ其體裁ハ「ニギ一」ト同様ニテ均シク國璽ヲ鈐印セリ
 唯其初頭ニ於テ現今將來ニ於テ遵奉セント記載セズ凡ソ此書ヲ見ル
 者ト書シ黃蠟ヲ以テ封被シ年月日ヲ記セリ

其五「アレーシヨコンセイニ」

（按）前文王命ニ四種ノ列アリト言ヒ茲ニ至リテ其第五ナル者ヲ舉ゲタルハ茲ニ

著述者ノ言足ラサル所アラトハ國王ノ名ヲ以テ決議シタル者ニジ
 ラン今暫ク原文ニ依テテ其上院ノ制定スル所ニ係ルト雖モ國王ノ手ニ出テシト看做ス
 へキ者ナリ上院ニ三局アリ參議局ト云ヒ會計局ト云ヒ宮内局ト
 云フ即チ此三局ニ於テ之ヲ制定ス若シ「バル、マン」王國法律ヲ犯
 シタルトハ右上院ノ決議ヲ以テ「バル、マン」ノ決議ヲ破毀シ或ハ

アレーシヨ
 コンセイニ

バル、マン
 ノ權力

修正スルガ故ニ上院決議ハ亦「レットルバタント」ノ程式ヲ履ムニ非
 ザレバ法律タルヲ得ズ但會計事件王領ニ屬スル事件及ビ刑事入
 費規則ノ如キハ之ヲ要セザリキ

第二 王命ノ權力ヲ獲ルニ至ルハ必ズ「バル、マン」ニ於テ之ヲ登録ス
 ルヲ要スル乎曰ク否「バル、マン」ハ王權ニ對シテ決シテ確定ノ權ナシ
 王命ハ「バル、マン」ニ送致シテ之ヲ登録セシムト雖厄此登録ハ公布ノ
 一方法タルニ過ギザリキ

王命ハ「バル、マン」ニ送致スルノ外尙ホ其施行ノ主任ヲ受タル行政司
 法ノ官廳ニ廻送ス而シテ上等裁廳ハ勿論當初直チニ之ヲ受ケタリシ下
 等裁廳ニ迄廻附シタリ

「バル、マン」ニテ王命ヲ登録スルヲ以テ之ヲ法律タラシムルナリト屢
 主張セシマアリ其源由ハ如何

バル、マン
ノ口實
ナ
ス根源

或ル王命ハ其末文ニ於テ若シ「バル、マン」ニ於テ其新條件ハ現行法律
又ハ公益ニ違ヒ國王ノ豫期ト意思トニ反スル結果ヲ生スベシト判斷
スルルハ其條目ノ登錄ヲ停止ス可キトヲ聽セリ故ニ「バル、マン」ハ之
ヲ確固ニスルトテ得又ハ之ヲ修正ス可シト發言スルトテ得タリ
「バル、マン」ニ於テ更ニ討論ニ附セラレ度ト乞願スルノ權ハ當初一時
有セシ所タリシガ遂ニ一變シテ諫爭權トナレリ而レモ若シ國王ニ於
テ其諫爭ヲ納ンザルルハ乃チ「レットルドシニヨン」國王「バル、マン」ニ
ル者ヲ付與セリ然セシルハ王命ハ以前ノ儘ニテ之ヲ登錄セザルヲ得
ズ

又時トシテハ國王「バル、マン」ニ親臨シ登錄ヲ命ゼシトアリ其時授與
スル所ノ書ヲ「リードジュチース」國王自ラ首班ト書ト云フ
ムーランノ王命ト稱スル一千五百六十六年ノ王命ヲ以テ登錄ノ後ニ

非ザレバ諫爭スベカラズト定メタリ

一千六百四十一年ノ「デクラ、シモン」ニ於テ王室獨裁ヲ公告セリ此デ
クラ、シモンノ緒言ヲ見ルニ實ニリシユリユ一第十三世ルイ王ノ宰相
宗徒ヲ服從セシメ「チ」トナシ大ヒニ世ニ名アル者ナリ此ノ壯氣ヲ追想ス
ルニ足ル者アリ

既ニシテ一千六百七十三年ニ至リ其二月二十四日ノ「デクラ、シモン」
ヲ以テ一千五百六十六年ノ王命ノ條目ヲ更改シ又一千七百十五年九
月十五日ノ攝政官ノ「デクラ、シモン」ヲ以テ登錄前諫爭スルノ權ヲ一
時許シタリシガ一千七百十八年四月二十六日ノ「ソットルバタン」ニ於
テ短少ノ期限ヲ定メ其期限間ニ諫爭セザルルハ其諫爭ヲ無効トナス
ベシ又其期限内ニナシタル諫爭ト雖モ國王之ニ拘ハラズ登錄ヲ命ズ
ルルハ必ズ之ヲ登錄スベキ者トシ或ハ登錄シタリト看做スベキ旨ヲ

達セリ

「バル、マン」ノ權限タル立法上ニ關シテハ下文ノ如シ曰シ其管理ニベキ事件ニ係ル規則ヲ決定スルヲ得ベシ然レモ此決議ヲ以テ法律ニ觸ル、ベカラズ法ニ正條ナキハ裁判上ノ例規ヲ創設スルヲ得ベシ王命或ハ「エヂー」ヲ以テ任附セラレタル事件ハ之ヲ討論スルヲ得ベシ至急ヲ要スベキ件ト思惟スルハ其新法ノ草案ヲ起スヲ得可シ然レモ斯ノ如キ法ハ假定規則タルニ過ギザレバ國王ノ許可アルニ非ザレバ確定トセズ即チ國王ノ思意ニ適フヲ必要トセリ

今ヤ第十六世紀ヨリ一千七百八十九年迄ノ刑事ニ係レル諸王命ニ就キ其緊要ナル者ノ名及ビ年月ヲ舉示シ又之ヲ講說討論セシ諸著書ヲ摘載セシト欲ス

此一期間王家ヨリ直接ニ出ダセル刑法上緊要ノ法令ハ左ノ如シ

刑法ニ係ル緊要ナル王命

規則ノ決定

一千五百三十六年六月十九日ノクシニユーノ「エヂー」ハ第一世フランソア一在位ノ時諸裁廳裁官ノ爲メニ公布スル所ニ係ル裁判事件及ビ訴訟ノ省略ニ係レル一千五百三十九年八月ウキレールコトレノ王命此王命ハ亦第一世フランソア一ノ世大宰相ボワイエノ制定スル所ニシテ刑事調査方ヲ規定ス

一千五百六十一年一月ノナルレアノ王命此レハ第九世シャル、ノ世大宰相ロスビタールノ手ニ成ル所ニシテナルンアン民議會ノ希望ニ適ハシメタル者ナリ

一千五百六十一年一月ノルーションノ王命大宰相ロスビタールノ制定スル所ニ係ル

一千五百六十六年二月ノムーレンノ王命亦第九世シャル、ノ世大宰相ロスビタールノ制定スル所タリ此二箇ノ王命ノ表題ニ於テ其チル

緒言

レアン民議會ノ諫争ニ因リテ制定セラレタル旨ヲ明記セリ
一千五百七十九年五月ノブローアノ王命、此王命ハブローアノ初度ノ民
議會ニ因リ制定セラレタル者ナリ

一千六百二十九年一月ノ王命、一名チ「マリアック」法典又ハ「ミンチール」法典
ト云フ蓋シ第十三世ルイノ世司法卿ニシテ之ヲ編纂シタル委員ノ
長タル「ミシエトル、マリアシ」ノ名ヲ借ルナリ此王命ハ一千六百十四年巴
里ニ會同セシ民議會及ビ一千六百十七年ト一千六百二十六年トヲ以
テ「巴里トアント」ニ於テ會集セル豪族會ノ歎願ニ付キ公布セラレタル
者ニテ數多ノ「バル、マン」ハ之ヲ非トシ大ヒニ論駁シ「マリアック」ノ轉墜
ニ及テ痛撃益甚シカリシト雖モ第十六世紀ノ緊要ナル太王命ヲ能ク
包括シ補足スル者ト謂フ可シ
第十四世ルイノ世起案審査シタル所ノ一千六百七十年八月ノ刑事

王命、此討論ニ於テ議長「ド、ラモワギ」ニヨシ及ビ代言師總長「クロン」ハ温
和及ビ仁惠ノ義ヲ固持シテ「ビユソール」ノ刻薄ヲ痛排セリ
「アレウボ」及ビ「アレシアール」皆國郡事件ニ係レル一千七百三十一年二
月五日ノ「デクラ、シヨン」
第十六世ルイノ世前代ノ起案事件ヲ廢シタル一千七百八十年八月
二十四日ノ「デクラ、シヨン」
一千七百八十八年五月一日ノ「デクラ、シヨン」改革ト言ヒ倣ス宗教、決
闘、無籍、乞丐、分散、破産、偽詐等ニ係レル特別法令ハ今之ヲ舉示セズ
自餘ノ刑法根源ハ即チ羅馬法習慣法及ビ「カノン」法ナリ
成文法ノ地方ニ於テハ王家ノ直接ニ作爲シ或ハ間接ニ作爲シタルヲ
論ゼズ凡ソ王命及ビ其他一般ニ係レル法制ニ明文無キトハ羅馬法ヲ
以テ通法トナシタリ

而シテ羅馬法ハ王法ヲ遏止スル能ハズ王法ハ却テ最モ行ハレ刑事ニ於テハ殊ニ準據スル所ナリシト云フ

不成文法ノ地方ニ於テハ習慣法ハ王家ノ法令ト並ビ行ハレ羅馬法モ亦全ク廢レザリキ

佛國慣例彙纂ハ名世ノ至完至備トスル者ニシテブールド、ドリシユブールノ編集スル所ニ係リ一千七百二十四年ニ刊行ス

吾法律ノ歴史ハ古羅馬及ビ新羅馬ノ法令ト日耳曼ノ諸制ト相軋シ競争スル所タリトハ即チ余ノ前ニ言ヒシ所ナリ然レ何レノ地ト雖凡其勝敗ナル者ハナク皆各幾分ノ跡ヲ存シ其土地ト法律ノ部分ニ因リ唯各專用スル所アリシナリ

刑法ハ固ヨリ公法ト緻密ノ關係ヲナスヲ以テ羅馬法及ビカノン法ハ刑事ニ於テ最モ依準セラレシ所タリ蓋シ羅馬法タル村落人及ビ律士

ノ據ル所ニシテ王家ニ在リテハ全國混一中央集權ニ奇貨トセシ所ナレバ必ズヤ王家ノ法令ニ混入セザルヲ得ズ而シテカノン法ハ條理正義ヨリスレバ當時ノ法令中最モ義ナル者タルガ故ニ王法モ亦自カラ其義ヲ含マザルヲ得ズ

學術上ニ供スベキ書類

學術上ニ供スベキ此一期間ノ書類ハ左ノ如シ

第一 民刑事調査決定裁判實地必用此書ハ巴里、バル、マシ議長リセー氏ノ撰スル所ニシテ一千六百三年ニ至リテ始メテ刊行ス但シ撰者ハ一千五百五十四年ヲ以テ没セリ

第二 民刑事裁判實際鑑此書ハシヤン、エン、ベルノ一千五百五十二年ニ於テ羅匈語ヲ以テ著述セシ所ニシテ其後佛語ヲ以テ之ヲ刊行セリ

第三 古希臘羅馬治罪順序此書ハピエール、エイロールノ編纂スル

所ニシテ佛國ノ慣例ニ對照セシ者ナリ四編アリ其末編ハ死體、灰
燼ノ死人記念、暴戾ノ獸畜、無生物、闕席人ニナシタル審判ヲ叙明ス蓋
シ一千五百八十七年ヨリ同九十一年迄ニ成ソリト云フ

第四 一千七百四十一年ニ於テギユイ、ルソー、ド、ラ、コロンブノ著
セル刑法篇

第五 一千七百六十七年ニ於テフランソア、セルピチンノ著セル
刑典

第六 佛國刑事裁廳篇此書ハ一千七百七十一年ニ於テシユヅスノ
著述スル所ニシテ凡ソ犯罪刑名ニ屬スル者ハ其一般ニ係ルト特
別ナルトヲ論ゼズ悉ク網羅詳論シ細大遺ス所ナキ者ナリ

第七 一千七百八十年ニ於テミユイヤール、ド、ブ、ランノ撰セシ佛
國刑法

法學士ノ著

以上舉グル所唯其緊要ナル者而已自餘小冊子ノ如キハ數フルニ勝フ
ベカラズ宜シクガミユースノ編セル律書目錄ニ就テ考フベシ
又法學士ノ著作ニ付テハ唯其刑法ノ改更ヲ喚起シタル緊要ナル書名
ノミヲ列載セン

一 モンテスキウ 法律精義○第七編第七章ヨリ第二十一章ニ至ル
○第十二篇第四章ヨリ第十九章ニ至ル○第十四篇第十二章○第二
十五篇第十二章○一千七百四十九年ニ刊行ス

一 ルソー 社會契約 一千七百五十六年ニ刊行ス
一 ベツカリア 犯罪刑罰論 僧官モルレー之ヲ譯述ス 一千七百六
十四年ニ刊行ス

一 ウホルテール ベツカリアー釋義 一千七百六十六年刊行ス
一 セルウツン 刑事裁判考 一千七百六十七年ニ刊行ス

- 一 マブリ 法律原則 一千七百七十六年ノ刊行
- 一 ベルガツス 刑事裁判仁慈説 一千七百七十六年ノ刊行
- 一 ルトロース 刑事裁判概要 一千七百六十八年ノ刊行
- 一 ベルナルシー 刑事裁判説 一千七百八十年ノ刊行
- 一 マラ 刑事立法案 一千七百八十年ヌーミヤテールニ於テ刊行
シ一千七百九十年巴里府ニ於テ刊行ス
- 一 フリッソー、ド、ウルウキール 刑事理論 一千七百八十一年ニ刊行ス
- 一 ラクルテール 加辱刑説 一千七百八十四年ニ刊行ス
- 一 ジョフリシンドウワラゼー 刑律論 一千七百八十四年刊行ス
- 一 ロベスピエール メツス工藝理學會社ヨリ褒賞ヲ出シタル左ノ
問題ニ於ケル演説
- 一 曰ク犯人ノ受タル加辱ノ刑ニ附帶セル耻辱ノ幾分ヲ親族ノ各人ニ

第十六世紀ヨリ一千七百八十九年迄ノ刑法主義

- 及ボス世論ノ根本ハ如何ナル者ゾ云々
- 右一千七百八十五年ニ刊行ス
- 一 シュパチー 三車刑人事件訴訟論説 一千七百八十六年ニ刊行ス
- 一 プサランヂエリ 律令學 一千七百八十六年ニ刊行シ其後屢
刊行ス

第十六世紀ヨリ一千七百八十九年迄ハ刑法ニ於テ如何ナル主義アル
乎

其説數多アリ

或ル人ハ云ク公同復讎ハ大革命迄ノ刑法ノ根本蘊義ナリト

公同復讎主義ノ大勢力ヲ保有セシハ疑ヲ容レザレ厄其獨行スルナ
ナカリキ

自餘ニ主義アリテ混入セリ

第一 上帝復讎ノ主義

第二 刑罰ハ社會ノ人民ヲ畏懼セシムル器具即チ犯罪ヲ妨グ又ハ

其數ヲ減少スルヲ最モ眼目トシタル方法ナリト云フ主義

公同復讎主義、上帝復讎主義、刑罰ハ畏懼ノ器具タル主義ハ刑律ニ於テ各其跡ヲ遺セリ

復讎主義ニ於テハ調査糾弾ノ秘密ナルアリ(第一)疑似人ノ保護即チ辨護人ナル者ナシ(第二)事實發顯ノ方法トシテ拷問ヲ用ユ(第三)此方法ハ僧侶裁廳ヨリ借り來レル者ニ非ズ乃チ羅馬法ヨリ傳來セル者ニシテ而シテ其羅馬法ハ亦アテ古希臘國法ニ倣ヒシナリ是ニ由テ之ヲ觀レバ凡ソ罪人タル者ハ社會復讎ヲ免ル、能ハズ皆此目的ノ犧牲トナリシナリ

王家ハ上帝復讎ノ委任ヲ受ケ生殺ノ權ヲ司ドルトスル主義ニ於テハ

人類ノ權ヲ以テ神權ヲ干侵シ又社會ノ法律ヲ將テ直チニ純手タル心思上ノ事件ヲ罰シ刑罰ヲ具トナシ以テ心ヲ制スルナリ蓋シ當時ニ於テ罵詈訾宗門邪法、妖術ノ如キモ犯罪視セラレ刑罰ヲ受ケタリ是レ其行為ヲ以テ政府ノ法律ノ部分内タル宗門ヲ顯ハニ侵害シ社會秩序ヲ紊亂スル者ナリトシタレバナリ

又背教即チカトリック教ニ非ザル宗門ヲ遵奉セル者ハ人界裁廳ニ於テ之ヲ罰シ王事中ニ算入セリ然レモ僧侶裁廳ニテカノン法ニ隨フテ背教ノ罪タリトシタル事件ノミチ政府ニ於テ罰シタル迄ニシテ政府ハ之ヲ認定スルナク唯宗門外ノ不足ヲ補フヲ以テ己レガ職掌トセリ設シ政府ニ於テ信仰上ノ犯罪ヲ定メシナラバ即チ是レ政權ノ宗門權ニ干渉スル者ノ如クシ且ツヤ寺院ハ當時ニ於テ既ニ智識ヲ有シ自由ヲ尊崇シ凡ソ犯罪ハ公顯ニシテ惡習ヲ生シ又數之ヲナスノ情狀ナカ

ルベカフズトシタルヨリ見レハ蓋シ幾分カ本心ノ自由ヲ依據トシタルヲ知ルベシ故ニ諸法廳中僧侶ノ裁廳ヲ以テ最モ保護ノ義ヲ供出シタル者トナスベシ

嘗テ猶太人ノ數國內ヨリ放逐セラレタル所以ノ者ハ其カトリック教ヲ崇奉セザルガ爲メニ非ズ一般ノ推測ヲ以テ其高利貸毒殺及ビ其他ノ罪ヲ犯シタルガ故ナリ且一千七百九十一年九月二十七日及ビ十一月十三日ノ布告迄ハ猶太人ハ平生外國人ト見做サレ法律ニ於テモ亦其例ニ入レタリヨリ之ヲ區別セザルベカラズ耶蘇教人ト外人トハ固ザル者ハ即チ外人ナリ云云テ背教人ニハ其持説宗義ノ土耳其人猶太人ノ如キ是レ外教人ナリ云云故ニ背教トハ其持説宗義ノ土耳其人猶太人ノ別派ヲ立ツルヲ謂フ其風儀ノ夫ノ耶蘇新教ノ徒ヲ制セシ法令ノ如キ少ナクモ其數件ニ於テハ王家ヲ以テ上帝ノ代理者トシタル義ヲ觀ルニ足ル者アリ唯其特別法タル

ハ誠ニ幸ヒナリ

當時ニ於テ全國ノ信心ニ反セル諸企舉並ニ外顯事件ヲ以テ社會ヲ擾亂スル者トシテ之ヲ制抑スルハ原來王家ノ爲ステ得ベキ所タリシト謂フモ誣言ニ非サルヘシクモソテ受ケザルトノ自由アリシナラバ決シテ之ヲ是ノ國ニ興何トナレハ第十九世紀ニ於テモ尙ホ公信宗門ヲ許否スルノ權ハ政府ニ在リト認ムル者稍一嚴ナルヲ以テカトリック一教ノ全社會ニ盛行セシ時代ニ於テ夫ノ許否權ノ政府ニ在リシハ固ヨリ言ニ足ラザルガ如シ然レニ其權ニ據リ刑罰ヲ用テ心思ヲ殘虐ニ委スルニ至ラズ唯王家ハ既ニ全國ヲ混一ニシタルヲ以テ併セテ宗教モ歸一ナラシメント欲セシ者ノ如シ

公同復讎及ビ上帝復讎ノ二義ハ相混同シ互ニ堅固ニシ實ニ無用ノ殘酷ヲ極メタリ

警防ノ意望及ビ畏懼ノ義ニ於テハ亦甚ダシキ者アリテ害君上弑父母等ノ如キニ至テハ痴愚マリシ故ニテ犯セシ者ト雖モ亦之ヲ罰シ害君上ヲ犯セシ者ハ其刑不辜ナル兒女ニ連及セリ又害君上及ビ決闘ハ勿論其他ノ犯罪ト雖モ死者ヲ刑シ屍體ヲ罰セシ者アリタリ是レ之ヲ罰スルニ非ズ他人ノ鑑戒ヲラシムルノミ即チキヤンチリアンノ言ヲ實行スルナリ曰ク凡ソ刑ハ尤モ鑑戒ニ屬ス可ク而シテ罪犯ニ從フテ少ナシト

以上擧グル所ノ三主義ハ是レ唯實況ノ事ノミニ非ズ當時ノ學問ニ於テモ亦之ヲ確定セリ

ドマト自著ノ法律書ニ云ク君主ノ上位ニ在ル猶天帝ノ如ケレバ彼レ亦其職掌ニ於テ天帝ノ地位ヲ占ムル如ク仰ガレントテ欲スルナリ而シテ其自カラ統御權ト裁判權ヲ委スル者ヲ呼ンテ神ト稱スル者亦此理

諸主義ノ確

ニ因ルナリ蓋シ此權ヲ以テ君主一己ノ有スベキ所トスルニ由ルナリ法律ニ隨ヒ社會秩序ヲ保維スルガ爲メ上帝ハ政府ニ於テ第一ノ地位ヲ占ムル者ニ一國無上ノ權威及ビ自餘附屬ノ雜權ヲ附與シ以テ此威カヲ實行セシムルナリ

又時ニ循ヒ地ニ因テ共同福祉ノ爲メニ必要ナル法令規則ヲ制定スルノ權及ビ罪犯ヲ刑スルノ威權ヲ附シタル者ハ亦即チ斯ノ秩序ヲ保維スルガ爲メナリタル者其耶蘇制(一)一千五百年代ノ人ニシテ宗教ヲ改革シ宰相ニシテ其憤怒ノ爲メニ使ハレ惡事ヲナス者ニ復讐スルト第十九年ニ於テシヤトウアリアンメ此義ヲ提出シ曰ク卿ハ斯ノ威權ヲ掌握セシリ斯ノ威權ハ即チ天主地界ノ君主ニ委託

アルゾ其佛國法制ニ於テ論シテ曰ク人ハ復讐ヲナスヲ得ズ獨リ君主ハ神ヨリ受シル權利アルガ故ニ其吏員ニ由テ之ヲ行フヲ得ルナリト

ジュースハ其刑事裁判論ニ於テ刑罰ヲ以テ防衛方トセリ其序ニ云ク
 一般ノ犯人ニ關セル法律ニ於テ刑罰ヲ設クル第一ノ目的ハ極刑ニ處
 ス可キ者ヲ除クノ外ハ若シ向後新タニ罪ヲ犯スルハ新タニ刑ニ處ス
 ベシトシテ犯罪人ヲ懲戒スルニ在リ
 又大罪及び極刑ニ處ス可キ者ノミニ關セル第二ノ目的ハ犯人ヲ罰ス
 ルニ死刑若クハ他ノ重刑ヲ以テシ之ヲ復タ社會ヲ擾ス丁チ得ザラシ
 シムルニ在リ
 刑罰ノ諸種ニ通該セル第三ノ目的ハ犯人ニ施行スル刑罰ニ因リテ其
 未ダ刑ヲ受ケズ畏怖スルノミニテ惡事ヲ爲サザル者ヲ制抑ス可キ鑑
 戒ヲラシムルニ在リト
 是ニ由テ之ヲ觀レバ懲戒ノ義ハ未ダ警防ノ具タルニ過ザリキ
 ミニイヤリドウドウグラシ其刑律篇ニ於テ言ヘラク

人命ノ上ニ於テ擴張スベキニ因リ又生殺ノ權トモ云フベキ此ノ權力
 ハ上天ノ君主ニ附與シタル無上ノ權威ニノミ屬スベキナリト
 セルウツン其刑事裁判事務ノ演說ニ於テ既ニ復讎ノ義ヲ以テ刑權ノ基
 本トスルヲ駁セリ曰ク
 既往ノ復讎ニ非ズン將來ノ般鑑タル是レ眞ニ刑法ノ大目的ナリ蓋シ
 復讎ナル者ハ慾情タルヲ以テ法律ニ於テハ宜シクナカルベキ所タリ
 法律ノ人ヲ罰スル者ハ怨恨ヲ以テスルニ非ズ憤怒ヲ以テスルニ非
 ズ既ニ犯罪ニ因テ國民一人ヲ失ヒ又刑罰ニ因テ國民一人ヲ失フハ
 情ニ於テ實ニ忍ビザル者アルガ故ニ法律ハ哀歎シテ之ヲ罰スルナ
 リト
 ドウリクシールハ尙ホ復讎ト鑑戒トノ義ニ據リ論下セシト雖厄其行文
 チ考閱スルニ實ニ大進歩ヲ徵スルニ足ル者アリ曰ク

抑法律ノ目的タル犯罪アレハ直ニ之ニ適用ス可キ刑アリト云フニハ非ズ其希望スル所罪人ヲ罰シテ而シテ決シテ他人ヲ罰セザルニ在リトス此意義ハ極メテ平凡ナル如シト雖モ亦甚ダ緻密ニ渉ルヲ知ルナリ夫レ罪犯ヲ抑止スル茲ニ鑑戒ナル者ナキヲ得ズ而シテ罪人ニ非ザレハ又誰レカ鑑戒タル者アランヤ社會ニ於テ若シ犯罪ノ害ヲ受ケタルハ固ヨリ之ガ復讐ヲナサザルベカラズト雖モ此復讐ハ嚴格公平ナル法律ノ復讐ニシテ寸毫モ枉曲ノ所爲ナキ者ナリ而シテ其執行者ガ訴訟ヲ爲サザルベカラザル者ハ其遇然タル適意ヨリスルニ非ズ實ニ其必要ニシテ已ム能ハザルニ由ルナリ又其裁判ハ是レ其負債ノ償完凡ソ其爲ス所其行フ所ハ皆其負フ所ニ非ザルハナシ故ニ不辜ナル者ニハ天日ヲ保載セシメ有罪ナル者ニハ刑罰ヲ受ケシムルノ義務アリ而シテ負債ノ償完ノ如キ情態ニ接セザルノ遠キ處爲ナル者ハ無シ

ト

右ノ文章ハ一千七百八十三年ノ作ニ係ル

刑罰ノ目的ハ罪人ヲ懲戒スルニモ在リトスル說ハ既ニ往昔於テ附屬主義トシテ起ルト雖モ社會ハ刑罰ナル負債アリテ刑罰ヲ施スハ即チ其負債ノ辨償ナリト云ヘル說ハ佛國刑法ニ於テハ實ニ新說トナス可キ者ニシテ第十九世紀ニ及ビフニスタンエリトノ始メテ詳明スル所タリ此說ヤ初メプラトンノ發スル所ニシテ聖チーギユスクン之ヲ繼ギ聖シリグストムグロチニスセンデンローブニツパスカール亦之ヲ祖述シタリト云フ

百般ノ事實ヨリ諸主義ノ生出スルニ際シ第十八世紀ニ於テ爭鬪改革ノ具タル一新說ノ發スルアリ此社會ノ根原及ビ社會權ニ關スル當時最モ盛行セシ理論ナリ其說ニ云ク社會ハ契約ノミ抑人ノ自然ノ狀態

緒言

ニ在ルヤ特立獨行毫モ規則ニ牽制セラル、丁ナキガ故ニ私力ノ襲侵ヲ防グハ一己ノ私力ニ非ザレハ能ハズ而シテ其自然ノ狀態ヲシテ復タナカラシメント欲シ互ニ契約ナシ以テ社會ヲ立ツ故ニ社會權ハ人爲ニシテ一般ノ意望ニ出ヅル者即チ以テ法律ヲ制スル所ナリ又社會權ハ一般ノ意望ヲ施行スルノ任アル代理者ヨリ被雇者タリト

又云ク社會契約ノ目的タル結約人ヲ保衛スルニアリ而シテ其目的ヲ欲シタル結約者ハ必ズ其方法ヲ欲シタリ刑罰ハ即チ社會維持ニ缺クベカラザル此方法ノ中ニ入ル社會全體ニシテ自己ノ生命自由財産ヲ保護スルノ任アルニ於テハ若シ同約人ノ生命自由財産ヲ害スル者アラハ社會ノ之ガ生命自由財産ヲ擅マ、ニスル丁チ各人が承諾シタルナリト

此說ニ依レバ刑罰ハ則チ結約人互相保護ノ爲メニ受クベキノ契約ヲ

ナシタル不定ノ作爲物ニ外ナラズ一般安寧ノ質物ト謂フベシ

又云ク社會契約ノ目的タル結約人ヲ保護スルニ在リ凡ソ目的ヲ欲スル者ハ亦其方法ヲ欲ス而シテ此方法ハ危險損害ノ避クベカラザル者アリ又他人ヲ害シテ己レガ生命ヲ保全セント欲スル者ハ其須要ナル時ニ於テハ己レモ亦他人ノ爲メニ之ヲ供セザルベカラズ抑國民ハ法律ニ於テ之ニ當テントスル危害ヲ是否スルヲ得ズ故ニ若シ君主ニシテ汝ノ死スルハ國家ニ要用ナリト言ハバ即チ死セザルベカラズ何トナレバ則チ斯ノ約束ヲ以テ晏然今日迄日ヲ送り又其生命ハ啻自然ノ良好物タルノミナラズ實ニ國家約束上ノ賜タレバナリ

死刑ニ付テモ亦殆ンド同一ノ論ニ歸ス可シ謀殺者タルキ自カラ死スル丁チ承諾スルハ是レ謀殺者ノ犠牲トナラザルガ爲メナリ此契約ニ於テハ我が生命ヲ擅マ、ニスルニ非ズ却テ之ヲ鞏保スルノミ而シテ結

約各人ハ豫メ其身ヲ殺サシムルヲ慮リタルナリト推測スベカラズ
 合契論ハ第十八世紀ニ於テ大ニ權カアリシモ其以前ニ於テ既ニ此
 ノ出テザルニ非ズホツシユエ一人ノ民主權ヲ以テ各人ノ權ハ此
 民ノ有ニ非ズ保有人ノヨリ生シ來ルハ明カナリ各人ノ權ハ成
 テ國ノ有ハ諸權ヲ保有人ノヨリ生シ來ルハ明カナリ各人ノ權ハ成
 物ニシテ授與スルガ爲メ主有スル者ナリト思惟ス可カラズ此
 ハ各人自ニ與シテ又一人モ主有スル者ナリト思惟ス可カラズ此
 乃チ此權ヲ自由トテ舉クテ是ニ於テ政府ナル者初メテ創立シ
 ルニ至リ万事混同衆庶歸一是ニ於テ政府ナル者初メテ創立シ
 故ニ生命ノ附托ハ結約各人ニ於テ約束上ノ自殺ニ非ズ防衛方策ノ結
 構ニシテ其効アテシムル者タリ

ルイソノ刑罰ニ付キ社會合約ニ於テ論ズル所ベカリア之ニ依準シ
 自著ノ書ニ於テ大ヒニ敷衍シ之ガ結了ヲナシテ曰ク社會維持ニ必須
 ナル者ニ非ザレバ各人ニ於テ讓與スベカラザルナリト
 一千七百八十九年ノ革命ニ至リ新主義又世ニ起リ既ニ之ヲ以テ法律
 ナ制定シタルヲ見ルナリ

第五章 緒言

一千七百八十九年以降
刑法根源

一千七百八十九年以降刑法ノ根源タル者ハ如何
 一千七百八十九年以降今日ニ至ルマデノ刑法根源ノ歴史ハ即チ政事
 上ノ種々ナル變遷ノ歴史ニシテ唯法律ノ更改ノミナラズ餘ノ事件ニ
 於テ就中之ニ權カヲ施セシ原因ニ於テモ大ニ推移セシ者アルヲ見ル
 ナリ是ヲ以テ今之ヲ解説スルモ固ヨリ以テ詳悉スルニ足ラズ且ツ往
 々適切ナラザル者アラソトナテ恐ル又其繁ヲ省キ簡ニ就クモ或ハ實況
 ナ誤ラシムル者アル可ク而シテ其實況モ亦得ルニ難カラシ蓋シ事實景
 況ノ詳細ハ互ニ連絡シテ各影響ヲ及ボス所アレバ之ヲ別ニシ取捨叙
 述セバ茫邈トシテ其眞情ヲ知ルニ由シナカラシメン
 余ヲ以テスレバ或ハ一千七百八十九年以降ノ刑法歴史ノ詳細ヲ具サ
 ニ叙論スルカ或ハ其變遷沿革ノ較著ナル者ノ概表ヲ舉グルカノ二途

ユアンスタ
ユアンスタ
切ナルト
法

アル耳

今止マ其概表ヲ提舉セシ

一 一千七百八十九年八月二十六日 人權公告

一 一千七百八十九年十月八日九日及ビ十一月三日 刑事斷例ノ數

件ヲ改正セシ布告

一 一千七百九十年一月二十一日 刑法ニ於テ特例ヲ廢シ諸人ノ刑
事ニ於テ同等ナルヲ定メ刑罰ハ其人ニ止マルトナシ且ツ悉皆没入
法ヲ削除シタル布告

一 一千七百九十年三月十六日二十六日 封書ニ國王鈐印シ緘封シ
下付スル所ノ命令書ヲ廢シタル布告

一 一千七百九十一年七月十九日 違警及ビ輕罪裁判所ノ治罪順序
ニ係ルル法

アッサン
ラレンヂス
シヨ
シヨ
シヨ

一 一千七百九十一年九月三日 調査陪審及ビ裁判陪審ノ法

一 一千七百九十一年九月十六日二十九日 治罪法

一 一千七百九十一年九月二十六日十月六日 刑法此法ニ於テハ死刑

ヲ存シテ自餘ノ無期刑ヲ廢シ一定ノ刑名ニ付テ裁判官ノ加減スル
ヲ禁シ又試犯ハ變例トシテ之ヲ罰シ且ツ謀殺及ヒ毒殺ノ時ノミ

ニ限レリ此法ノ立案委員ハ、ルメルチ
エドワードサンフルジャナルチ

一 一千七百九十一年九月二十六日二十七日 烙刑ヲ廢シタル布告

一 一千七百九十一年九月二十九日十月二十一日 治罪法糾問式ニ係
ル布告

一 一千七百九十二年三月二十日二十五日 醫師ギョイヨタンノ發明セ

ル新器械ヲ處刑ニ用ユベキヲ定メタル布告

一 一千七百九十二年七月二十七日及ビ十月二日

緒言

一 千七百九十二年八月三十日及び十月三日

一 千七百九十三年三月十九日

右國事犯ニ於テ悉皆沒収法ヲ再設スルニ係レル布告

一 千七百九十五年十月二十五日即チ共和第四年三月三日犯罪刑罰法典此法ハ六百四十六條アリ其五十三條ハ刑罰ニ關シ其五百九十三條ハ治罪ニ關スメラルラシ氏ハ此法ニ關スノ立案委員タリキ

一 千七百九十五年十月二十六日即チ共和第四年二月十四日「コンウツンション」政府覆墜ニ際シ一般平和ノ日ヨリ死刑ヲ廢ス可キ旨ヲ定メタル公布

一 共和第四年九月二十二日 重罪ノ試犯ヲ罰スル法

一 千八百十一年三月二十八日 岡士ノ決議ヲ以テ委員ヲ命ジテ刑律草案ヲ作ラシムウヰエイヤールタルジュウダルトレイヤール及びブレンドンノ諸氏其委員タリ

ツレクトワ
コシユラ
及ビ帝國

一 共和第十年第四月八日即チ一千八百一一年十二月二十九日 死刑ヲ存スル法

一 千八百四年六月五日ヨリ千八百四年十二月二十日迄 參議院ニ於テ二十五回ノ會議ヲ以テ刑罰及ビ治罪ヲ混淆セル法案ヲ審議ス此法案ハ千六百六十九條アリ

ナポレオン親カラ議院ノ首班トナリテ討論ニ盡力セリ

中途ニシテ停止シ四ヶ月ヲ經法案ヲ分テ治罪法刑法ノ二部トナシ以テ以前ノ草案ニ易ヘ以前ノ草案ハ之ヲ廢棄セリ

刑法草案ニ付キ疑難ノ廉ヲ筆記スル者ハダルシ氏ニシテ治罪法ニ於テハウーダル氏其事ヲ掌レリ

一 千八百八年一月三十日ヨリ同十月三十日迄 參議院ニ於テ治罪法ヲ討論ス

一 千八百八年十一月十七日ヨリ十二月十六日迄 右ノ治罪法ヲ九

緒言

法トシテ布告ス

一 千八百八年十月四日ヨリ千八百十年一月十八日迄 参議院ニ於テ刑法ヲ討論ス

一 千八百十年二月十二日ヨリ同二十日迄右ノ刑法ヲ七法トシテ布告ス

此二法制定ノ間参議院法制局ニハ議長トレイヤール議員アルビッソ
ンベルリエフホール其他大審院議長ミユレール大検事メルランノ諸氏
之ヲ擔任セリ
民選議院ニ於テ内閣辨明者タリシハトレイヤールベルリエフホール
及ビアールノ諸氏ナリ
右刑法治罪法ハ千八百十一年一月一日ヨリ施行スベキ旨ヲ布告セリ
烙刑及ビ沒収刑ハ再ビ設ケタリ

シレストーラ
シヨン

一 千八百十四年 帝國制定ノ刑法及ビ治罪法ヲ存シ悉皆沒収法ヲ
廢スルノ勅命

一 千八百十九年五月七日 印刷ニ係レル法

一 千八百二十二年三月二十五日 印刷及ビ其他何等ノ方法タリト
モ公ケナル方法ヲ以テナシタル犯罪ニ付キ訴訟シ處刑スル法律

一 千八百二十四年六月二十四日 刑法中ノ數件ヲ改正シ及ビ情狀
減刑ヲ始メテ設ケタル法

一 千八百二十七年五月二日 陪審制保護ノ事項ヲ増加セシ法

一 千八百三十年十月八日 印刷犯罪及ビ國事犯ニ陪審ヲ適用スル
法

一 千八百三十二年四月二十九日 刑法治罪法ヲ精査シ著シキ釐正
ヲナシタル法

一千八百三
十年七月ノ
革命

- 一 千八百三十四年四月十日 會社ニ係レル法
- 一 千八百三十五年九月九日 重罪裁判所ニ係レル法及び治罪法數條ヲ改正シタル法
- 一 千八百四十八年二月二十六日二十九日 國事犯ニハ死刑ヲ廢スルノ布告
- 一 千八百四十八年三月六日八日 千八百三十五年九月九日ノ法ヲ削除スルニ係レル法
- 一 千八百四十八年四月十八日二十二日 輕罪ニ於テ剝奪シタル諸權ヲ復スルヲ許ス法
- 一 千八百四十八年八月七日十二日 陪審編制ニ係レル布告
- 一 千八百四十八年十月十八日二十日 陪審員ノ投言多數ニ關スル布告

一 千八百四十八年十一月四日十日 國事犯ニ死刑ヲ復設シタル憲法

一 千八百四十九年六月十九日二十二日 會合及び其他公會ニ關スル法

一 千八百四十九年七月二十九日 印刷ニ關スル法

一 千八百四十九年十月十一日同十一月十九日及び二十二日同十二月一日 刑法第四百十四條第四百十五條及び第四百十六條ヲ改正シタル法

一 千八百五十年一月二日九日 治罪法第四百七十二條ヲ改正シタル法

一 千八百五十年六月八日十六日 流刑ニ關スル法

一 千八百五十年十二月十九日二十七日 平生高利貸ヲナス犯罪ニ

一 千八百五十六年七月十七日三十一日 治罪法ノ多數ノ條款ヲ改正セシ法

一 千八百五十七年六月九日八月四日 陸軍軍律

一 千八百五十八年二月二十七日 一般安寧ニ關スル法

一 千八百五十八年五月二十八日 刑法第二百五十九條ヲ改正セシ法

一 千八百五十八年六月四日同十三日 海軍軍律

一 千八百六十年六月十二日 サウホウ州及ビニツス縣ニ刑法治罪法ヲ施行ス可キ旨ヲ布告シタル勅命

一 千八百六十三年四月十八日五月十三日 刑法第六十五條ヲ改正セシ法

一 千八百六十三年五月二十日 懲治罪裁判所ニ於テ現行犯ヲ吟味

スルニ係ル法

一 千八百六十五年七月十四日 假出獄ノ法

一 千八百六十六年六月二十七日 治罪法第五條第六條第七條及ビ第百八十七條ヲ改正セシ法

一 千八百六十七年六月二十九日 治罪法第四百四十三條第四百四十四條第四百四十五條第四百四十六條第四百四十七條ヲ改正セシ法

一 千八百六十七年七月二十二日 刑事禁錮ノ法

一 千八百六十八年五月十一日 出版條例

一 千八百六十八年六月六日 集會權ニ係ル法

一 千八百七十年十月十四日十七日 千八百四十八年八月七日ニ布告シタル陪審法ノ數件ヲ改正シ再ビ之ヲ行フ可キ旨ヲ布告セシ法

一 千八百七十年十月二十四日三十一日 千八百五十一年九月八日